

始



特234
429



福の目

竹田黙齋著



目

竹田黙齋著

竹田黙齋

はしがき

一、曩に公にせられたる『黙雷禪話』九十則と、『續黙雷禪話』百五則との中より、予が最も會心の言とするところのもの、百五十則を選びて一冊となし、これに名づけて『禪の面目』といふ。蓋、黙雷老師の活禪談、縦横無礙にしてしかも懇到親切、予が如き鈍根の徒をして、尙、且、本來の面目を徹見せしめずむば、止まざらむとするの概あればなり。

二、後輩、予の如き者が、先覺の言説を取捨し選擇すといふ、何等の不遜、何等の無禮ぞ。當にこれ萬死。たゞ、老師が、天空海濶の雅懷に訴へて、切に、寛恕の恩典を冀ふのみ。

三、『黙雷禪話』の編者たりし中外日報社と、『續黙雷禪話』の編者たりし柘植秋畝氏とに對して、こゝに深厚なる敬意を表す。

丙午出版社編輯局にて

高島米峰識

目次

一	經典に讀まるゝ勿れ	一
二	邪禪の流行	五
三	如來禪と祖師禪	六
四	賞罰一致	八
五	法演禪師の憂	一〇
六	老婆禪	一〇
七	高僧と洋行	一一
八	再び如來禪と祖師禪	一三
九	禪機拈弄の機關	一四
十	禪坊主の境界	一五

目次

十一	無作の妙用	一七
十二	物我の一致	一八
十三	急いで遣つては不可ぬ	二
十四	禪僧の祈禱	三二
十五	白隠會下の系統	三三
十六	卓州隱山兩派の系統	三六
十七	白隠の述懐	三八
十八	白隠の自書自賛	三九
十九	石頭和尚の草庵歌	三九
二十	出家と俗人	三一
二十一	有無の商量	三一
二十二	邪禪	三三

二十三	精進心と妄心	三四
二十四	造塔と靜坐	三五
二十五	少室夜坐吟	三六
二十六	虚空の差別	三八
二十七	丹霞和尚の翫珠吟	三九
二十八	達磨の寶珠觀	四四
二十九	闍提翁	四五
三十	寒林と胎寶	四六
三十一	菩薩の境界	四七
三十二	臨濟の五山十刹	四七
三十三	色衣と輪住	四九
三十四	禪宗二十四流	四九

三十五	再び五山十刹に就て	五五
三十六	現在の安住	五七
三十七	順逆二境	五八
三十八	へば知識	五九
三十九	禪家と教相家の法戦	六〇
四十	船頭の實驗談	六四
四十一	唐武帝の僧侶淘汰	六五
四十二	漁夫の禪知識	六六
四十三	龍淵東瀨老師	六七
四十四	師家のいろく	六九
四十五	達磨禪經	七四
四十六	大乘と小乗	七五

四十七	老醫の質問	七六
四十八	肺病患者の引導	七八
四十九	昔の法階	八〇
五十	腐敗又腐敗	八一
五十一	僧堂常住	八二
五十二	五山の連環會	八三
五十三	茶禪一味	八四
五十四	寒山拾得	八五
五十五	南嶽大師の偈頌	八七
五十六	人境俱奪	八九
五十七	收と放	九三
五十八	臨濟の四料揀	九五

五十九 四料揀の略解 九七

六十 翠巖頌略解 九九

六十一 佛耶信仰の異同 一〇一

六十二 豪商の宗教事業 一〇三

六十三 殺生に關する質問 一〇五

六十四 絶待論と相待論 一〇六

六十五 法然上人の殺生觀 一〇

六十六 殺生に關する書簡の解答 一一二

六十七 人情の機微 一一四

六十八 臨濟禪の特色と悟後の修行 一一五

六十九 凡情退治の方便 一二七

七十 臨濟の三句 一二九

七十一 三句とは何ぞ 一三一

七十二 佛鑑禪師の偈頌 一三八

七十三 無學和尚の僧侶訓 一三一

七十四 昔の知識 一三一

七十五 五種の縁 一三三

七十六 布袋歌と一軀佛 一三四

七十七 吾に一軀の佛あり 一三六

七十八 善慧大士の法身偈 一三七

七十九 默雷老漢の懷舊談 一三七

八十 臨濟の打爺 一三九

八十一 親の顔と酒徳利 一四〇

八十二 臨濟の宗名 一四一

八十三	臨濟和尚の傳	一四三
八十四	廁て大悟	一四八
八十五	仙嗟和尚の牧童畫贊	一四九
八十六	臨濟の吹毛劍	一四九
八十七	三種の根機	一五〇
八十八	境と法と人	一五一
八十九	精神と儀式	一五二
九十	煩惱即菩提	一五四
九十一	三毒の水泡	一五六
九十二	修養の兩面	一五六
九十三	隠れたる徳僧	一五七
九十四	園碁と度生	一五八

九十五	肺病慰問傳道	一五九
九十六	白隱會下の大姊	一六三
九十七	桶屋の頓悟	一六五
九十八	依頼心と禪	一六八
九十九	逆境の修養	一七〇
百	悟道の境に天地なし	一七三
百一	魔窟に入りて魔事を破る	一七五
百二	美人も來れ姪婦も來れ	一七七
百三	内魔驅り盡して始めて安心	一八〇
百四	佛とは糞かき篋の事	一八三
百五	南禪の梅垣謙道	一八五
百六	五里霧中の迷説	一八七

百七 志道禪師の愚問……………一九九

百八 火吹竹の故郷……………一九一

百九 佛陀の出世は義軍なり……………一九四

百十 禪道の奮闘……………一九七

百十一 法界吞了の口……………一九九

百十二 八識超越の工夫……………二〇一

百十三 三世諸佛と一體無二……………二〇四

百十四 這裡の無門關……………二〇六

百十五 迷悟の語響……………二一一

百十六 無類の侍者……………二一四

百十七 洋人の根氣……………二一六

百十八 布薩會……………二一九

百十九 小笠原流の元祖……………二二一

百二十 一面の難關……………二二三

百二十一 繩つきの幽霊……………二二五

百二十二 灰頭土面……………二二七

百二十三 心頭の情報……………二三〇

百二十四 長生不死の靈劑……………二二三

百二十五 迷悟の別……………二三四

百二十六 他宗僧侶と禪……………二三五

百二十七 學界の幽霊亡者……………二三八

百二十八 動中の工夫……………二四〇

百二十九 縦横無盡の透觀……………二四二

百三十 有所得の心……………二四四

百三十一 人は釘付にあらず……………二四六

百三十二 吹笛術の奥義……………二四八

百三十三 予が戒律主義……………二五〇

百三十四 靈的健闘……………二五二

百三十五 覺夢不二……………二五五

百三十六 車挽きの稽古……………二五七

百三十七 速成的禪學……………二五八

百三十八 佛教中の王道……………二六〇

百三十九 迷悟と境遇……………二六一

百四十 我此土安穩……………二六三

百四十一 名僧尙ほ在り……………二六四

百四十二 便所的佛教……………二六六

百四十三 禁肉禁妻論……………二六八

百四十四 超出越格の倫理……………二七〇

百四十五 形式と精神……………二七二

百四十六 文字教の弊害……………二七四

百四十七 入道の門戸……………二七五

百四十八 乞食の親方……………二七六

百四十九 禪者の品々……………二七七

百五十 諸魔外道も我眷屬……………二八二

一、經典に讀まるゝ勿れ

昔馬祖の會下に八十餘人の知識があつたが、其中最も馬祖の眞髓を得た殊勝な者は、漸く三四人に過ぎなかつた。丁度さう云ふ工合で、何時の世でも大量の人物と云ふ者は、極めて尠いものだ。だからお經を讀んでも、眼光紙背に徹する底の烟眼と見識とを具へて居らないと、折角の看經が何んの役にも立たない事となつて、到底經中深妙の玄義を窺ひ知る事が出来ない。例へば法華經を讀んでも、眞正に法華の經意を解せなければ、却つて法華に轉ぜられて仕舞ひ、金剛經であらうが、其他何のお經でも、畢竟其通りだ。經典を眞正に解してこそ經典を讀んだ所詮があるので、若し經意を解することが出来なかつたならば、お經を讀んだのでは無くて、お經に讀まれたのだ。ところが近來益々お經に讀まれる連中が多いのは、實に慨はしい次第である。

▲天下の居士。だから世間の奴等は、天下の居士とさへ云へば、烏尾得庵や大内青巒等に

限る様に思つて居るのだ。併し彼等は佛學の半可通に過ぎないので、禪の妙味は決して分つて居らない。真正の居士と云ふ者は、却て天下に名を轟かして居らないで、田舎に隠れて如實に修行して居る者だ。先づ京都では、洛北高野村の井口徳左衛門正信居士の如きは、即ち其一人であらう。彼は今では息子に身代を譲つて隠居の身の上となつたが、廿餘年以前から、此建仁寺や相國寺へ、眞面目に參禪したもので、何時でも肥桶を擔いだ儘で遣つて来て、副司寮に預けてある袴を穿いて獨參し、其れが済むと再び肥桶を擔いて村へ歸ると云ふ鹽梅で、決して道樂半分や慰みに遣ると云ふ様な呑氣な物では無いのだ。文字禪や理窟禪を捏ね廻はして、自分免許でえらがつて居るヒョットコ先生とは、全く正反對で、少しも法螺も吹かず鼻も高くせず、溫良謙讓の君子とは實に彼の事だらう。そして彼の禪は決して空見識ではなくて、實踐躬行の禪だ。又大阪の北野村に、上林喜兵衛觀道居士と云ふ老爺があるが、此男も熱心に各老師に歴參した居士で、大阪の様な所で一寸見られない程、禪に老熟して居る。兎角か

う云ふ風で、眞正の居士と云ふものは、世間に餘り知られて居らない者に多いのだ。東京あたりに構へて居る先生達が、何遍洋行して來たとか、和漢洋の學に通じた博士だとか、大家だとか云つて、威張つて見た所が、偕愈々の所となると、糞桶昇ぎの徳左衛門爺の足元へも寄られないのだから、可笑いじゃないか。だから物識禪程詰らない者は無いから、どうか實踐躬行と云ふ事を忘れずに、遣つて貰ひ度いものである。曾て久留米の梅林寺に羅山和尚が居られた時に、八十餘人の會下が居つたが、臘八に大衆が充分骨を折らなかつたと云うので、折り返して、臘八接心の蒸し直しを遣られた事があつた。其れ程に骨を折らねば到底物にはならないのである。伽藍の外護者ばかりあつて、眞正に佛法を外護する者が無いでは無いか。曾て山岡鐵舟居士が、宮内の少輔を辭して禪僧とならうとした際に、滴水和尚が之を遮り、坊主になるよりは、居士の儘で、佛法を外護する方が、幾ら佛法の爲になるか知れないと云つて、思ひ止まらせたことがあつた。實際尤も千萬の話である。凡て禪の上から

観ると、境縁に、好いの悪いのと云ふ様な、好醜の差別は無いのだ。善惡好醜は皆な心から起るものであるから、此心さへ平げて仕舞へば、妄情は何處からも起らない。既に妄情が起らなければ、順逆の境界に於て、自ら苦惱を生じない様になるのである。そして既に此苦惱が生じない様になれば、惡魔鬼神も佛法護持の善神となるのであるから、須らく善惡好醜の妄分別する心を退治せねばならぬ。

▲忙閑不二。夫れから佛法を眞面目に修行仕様と思つたならば、時節因縁と云ふことを観じなければならぬ。時節因縁を観ずると云ふのは、即ち閑の時にあつて、動を忘れず、動の時に閑を忘れないと云ふ、所謂忙閑不二一體となることである。かうなれば、幾ら眼の玉の飛び出る程忙しい劇務の中に居つても、綽々として餘裕があつて、悠々としてゆつくり遣られるのである。然して、かう云ふ境界になるのには、鏝湯爐炭中は愚か、刀の山、劍の樹の上をも驀直に突貫して、身を喪ひ命を失ふ底の大死一番と云ふ所を通らなけりやならないのだ。兎角參禪學道は死ぬか活きるかの眞劍勝負

を遣らねば、何んの役にも立つ者では無い。

二、邪禪の流行

近來類に邪禪を振り廻はす、僞宗師が澤山あるのには困る。彼等が云ふ所に依れば守静と云ふことは何より大事だ。静は道の根本だ抔と云つて居るが、かう云ふことを云ひ觸らす奴は、悟と云ふものはどう云ふものやら、守静とはどう云ふものやら、一向知らないのだ。全體守静と云ふとは、畢竟妄想の番兵に過ぎないものであつて、幾ら其番兵が妄想を抑壓しても、またしても、煩惱の芽を吹き出すので、丁度春の陽氣に萌え出づる雑草を、幾ら上から刈り込んでも、刈り盡すとが出来ない様なものだ。根本的に刈り盡して仕舞ふと思つたならば、一本々々根こそぎに抜き取つて仕舞はなけりや駄目だぞ。其處が畢竟悟道だ。守静は一時的に妄想を降參させるに過ぎないのだ。彼の越王句踐が一時吳王に降參したのは、眞實の降參ではなくて、ちよつと

降参した風をして見せた様なものだ。又説教や講義杯は、大病の時に按摩に擦らす様なもので、遣つて居る間は氣持が好いけれども、癩病患者に膏藥療治と一般で、到底根本的の治療は出来ない。本當に大悟徹底しやうと思ふならば、根本的に精神上的の大手術を施さなければならぬ。其死ぬか活きるかの精神上の大手術は、腹の底から坐禪を遣つてく遣り抜くに限るのだ。昔、大燈國師が、佛法不思議王法に對すと云はれた時に、後醍醐天皇が、王法不思議佛法に對すと仰せられた通り、昔は國王長者の有力な檀越が、佛法の外護者となつて働いたのであるが、近年はどうだ。

三、如來禪と祖師禪

凡て禪を遣るのに就いては、葛藤即ち偈頌等を澤山に拈弄して、自證自得するものもある。さうすると自然に、活潑々地の大活力が現れて來るのである。しかし之に就いて善惡の二方面があつて、一概に禪と云つても、其中に如來禪もあれば、祖師禪も

ある。如來禪と云ふのは、畢竟表門から這入る佛で、祖師禪と云ふのは、裏門から這入る佛で、自分が本尊、自分が達磨と云ふ見地からして、達磨を棚の上から取り卸して、永遠無窮に變ずる事も無ければ、滅することも無い、自己の本尊、自己の達磨を拈弄して、歴史的の本尊達磨と、不二一體の境界となるのだ。之が所謂祖師禪の遣り方と云ふものである。

夫れから禪の下稽古としては、場合に由ると偈頌杯を作らしめて見ることがある。其れに就いてから云ふ話がある。昔豊後の國に妙心寺派の學林があつたが、例の禪の下稽古として、大衆共へ、子規を聞くと云ふ偈頌の題を與へた事があつた。すると、大衆の中の或一人は、何しても轉結が甘く出來ないので、一生懸命に文殊菩薩に祈願を籠めて居た。所が其れかあらぬか豫想外な妙句を得たので、大得意になつて、早速偈頌を提出したが、哀しい事には、點檢者の眼が利かなかつた爲に、とう／＼落第した。そこで其雲水は非常に残念がつて、縊死したので、僧堂中が上を下へと大騒動を

やらかした事があった。其偶頌を今茲に云うて見やう、恚う云ふのだ。

啼血千聲明覺頌 呼名圓悟克勤評 若被遇大慧一燒却 飛入蜀山一免此生一
かう云ふ様なもので、禪道の修行と云ふものは、實に並や大抵の者では無いので、人の知らない苦勞をするものである。

四、賞罰一致

また、納が若い時分、久留米の梅林寺僧堂の副司を遣つて居た時に、妙心寺派の巡教師で、四國の太平和尚と云ふのが梅林寺へ遣つて來た。此男は學問も出来るし、詩も亦善く出来る人であつたが、早速先生大自慢の詩を書いて皆んなに見せた。所が其處に居つた安國寺の和尚が、其詩を非常に賞讃し、あゝ之は中々上出來だ、實に甘い傑作だなあと賞めるが早いか、太平和尚の腦天目懸けて、拳骨を五六箇喰はした事があつたが、本當に面白かつたよ。こゝが即ち禪坊主の禪坊士たる所で、扣いたかと思

ふと口では非常に賞める、口で賞めたかと思ふと擲り付ける、賞めるのも本當であるし、扣くのも決して冗戯ではない。こゝが所謂妙味のある所だ。其れだから、太平和尚も流石に怒りもせず、敵對もしないで、笑つて扣かれて居つたよ。こゝが即ち、賞罰一致の痛棒と云ふ所である。

然らば恚う云ふ風に心膽を練るのには、どうしたら好いかと云ふと、昔から、所謂、鎌倉の一枚悟、即ち鍋蓋悟と云ふ様な事ではいけない。學問に、梅樹學問と楠樹學問、藥罐學問と鐵瓶學問との區別がある如く、禪の悟にも、其れと同様の區別があることを忘れてはならぬ。沸くのも速く冷めるのも速い、藥罐的の悟では實に詰らない。其れではどう云ふ風に心懸けるかと云ふと、畢竟嚴正なる裁判官が、公平無私の判決を下だす様に、自分の心を嚴肅公明に持つて、油斷無く邪心を檢舉し、煩惱の魔軍を塵にするにあるのだ。そしてこれには鐵饅頭の公案を咬んで咬んで、咬み碎いて行くに限るのだ。

五、法演禪師の憂

五祖法演禪師が、嘗て白雲に居られた時に、靈源和尚に答へられた書の中に、
今夏各所より米麥を收めざれども、憂と爲すこと勿れ。夫れ憂ふべきは、一堂數
百の衲子、一夏に一人の箇の狗子無佛性の義を透得する者なく、佛法の將に滅せ
んとするを恐るゝのみ。

と云はれてある。實に其通りて、宗師の心は斯くなければならぬのだ、唯徒らに賽
錢の多いとか少いとか、堂塔の伽藍の大いとか小さいとか云ふことを、心に懸けて計
り居つてはいけない。唯一生懸命に自己の本分、即ち佛道を修行することに邁進せね
ばならないのである。

六、老婆禪

全體老婆禪と云ふものは、其當時は善いかも知れないが、後々の爲には、却つて善く
ないもので、師家が老婆親切で、餘り強ちに指示したり、説破したりするのは、將來に
なると無慈悲の事となるものだ。と云つて雲水を困らす譯では無いが、餘り老婆禪を振
り廻はさないで、一時は無慈悲の様でも、峻嚴に遣つて除けた方が、後には却て大慈
大悲で遣つた事が分つて来るものだ。或中學校の數學教師の實驗談に、中々面白い話が
ある。其數學の教師は、始め東京の或數學の學校に學僕として住み込んで居たさうだ
が、其處の校長は、此男に限つて、問題を與へるだけで、少しも説明して呉れないので、
こりや自分は學僕杯をして居るものだから、親切に教へて呉れないのだ。其證據には
外の普通の學生には、ちやんと丁寧に説明して教へて居るでは無いかと、心竊かに先
生の不親切を怨んで居つたさうだ。所が今と成つて見ると、其時普通の學生であつた
人達は、先生から教へられた六ヶ敷い問題杯は、皆んな忘れて仕舞つて居るもの許り
だが、學僕で晝は色々の仕事に追ひ廻はされ、夜は先生から與へられた難問題を自分

獨りて、コツ／＼と考へたお蔭で、今尚ほ忘れずに暗記して居る。して見れば、普通の學生とは違つて、學僕をして迄勉強し様と云ふ自分を可愛さに、心底から覺えさせようと云ふ慈悲心から、態と先生が、あゝ云ふ遣り方を爲られたのだと云ふことが分つて來たさうだ。世間の學問の研究すら、かう云ふ工合だから、況して不可稱不可説の祖師禪だもの、浮か／＼と老婆禪を遣ると、有害無効となるものだ。だから是の處を可く注意せねばならぬ。

七、高僧と洋行

昔の各宗の僧侶は、一度入唐入宋を爲なければ、高僧に成られぬ者と思ふから、争うて支那へ渡航して留學したものだ。恰も今の學者連中が、歐米へ留學さへすれば、遊んで居ても、國へさへ歸れば、高く買つて呉れると思つて居るのと同様であつた。だが大燈國師は支那へ留學をせられなかつたけれども、白隱禪師は、日本の禪僧で、大燈國師

程偉いものは無いと、其徳を追慕して居られたては無いか。又、淨土門の元祖法然上人は、支那の地を少しも踏まず、且つ又時代も非常に隔つて居たけれども、善導大師の念佛法を相承せられたては無いか。して見ると、洋行とか何んとか云ふ事は、抑も末の末の事であつて、高僧と愚僧との依つて分るる所は、一に其人格の如何に依るものである。

八、再び如來禪と祖師禪

先達云つた、如來禪、祖師禪の事を、只表門と裏門との相違だけの様に誤解されては困るから、茲に今一應云つて置く必要がある。全體祖師禪と云ふのは、裏面から探り附けるのであつて、如來禪と云ふのは、所謂鐘が鳴るのか、撞木がなるか、鐘と撞木のあひが鳴ると云ふ様な類で、つまり言句文字の禪だ。天台の止觀に説いてある觀法の如きは皆な如來禪である。だから如來禪は祖師禪に比較すれば、兒戯に類したものだ。

だ。昔或人が、洞家の俊傑水戸の惠舜尼に向つて、如來禪と祖師禪との相違如何と問うた時に、惠舜尼の答に、貞婦兩夫に見えずと遣つたさうだ。何んと面白い話では無いか。

九、禪機拈弄の機關

此間偈頌を作る爲に縊死した雲水があつた話をしたが、其れて思ひ出したことがある。昔或人が唐崎の松を見て、「唐崎の松はふたつになりけり」とやつたが、どうしても下の句が出来ない。さうすると其處へ白髪の老人が現れて、「寄せくる波に影をうつして」と云ふ下の句を付けて呉れたと云ふ事がある。又或人が富士山を眺めて、「ひくければこそ不二の山」と、後の十二文字丈け咏んだが、どうしても上五文字が出て来ない。どうかして唸り出さうとしても出て来ないので、困つて居る所へ、或禪僧が通り合せて、「よの山が」とやつて呉れたので、どうやらかうやら一つの句が出来

たと云ふ話がある。序にもう一つ云うて見やうなら、或男が月を観て、「今宵の月は下にこそ見る」と云ふ下の句丈けが出来たが、上の句が出来ないので困つて居る所へ、之も同じく通り合せた禪僧に「寒空に影も氷に閉ぢられて」の上の句を教へられたと云ふ話がある。畢竟和歌や偈頌杯と云ふものは、皆な禪機を拈弄する爲の一種の機關となるものである。

十、禪坊主の境涯

衲等はえらく老年になつても、少しも元氣が衰へずに益々勉強して、大衆や居士等を激勵せしめねばならぬ。そして法を喜び禪を悦ぶを以て、何よりの榮として、少しも倦まず撓まず、大死一番てやるのだ。だが世間から見たら、禪坊主程詰らぬ者は無いだらう。朝は三四時から起きて、粥を啜り麥飯を喰ひ、二三年は愚か、一生涯坐禪に浮身を養ひ、肉食妻帯杯せずに遣り徹するのが當然だから、滅多に禪坊主なんかにな

るなと云ふのだよ。併し善い人物は天然自然にあるもので、又學校からも随分出来るものだ。然らば禪の特色は何處にあるかと云ふに、人々各々の心の働きを善くするものであつて、其修行の爲には、全く寢食を忘れて、只管禪定を以て飲食と爲て行くのである。佛見も法見も悉皆取つて仕舞ひ、佛臭味をも悉く剝ぎ落して仕舞はねばならぬ。その代り、禪坊主の境界は、王公貴人も博士も學者も窺ふことが出来ない所があるのだ。佛臭を脱して仕舞つたら、禪には信がない様に思ふかも知れないが、決してそんな譯では無い。全體禪と云ふものは、最初信から這入つて、そして一大疑團を起し、其大疑團を晴らして、遂に大悟徹底するのだ。此處まで遣つつけた者は、決して他宗他派に轉つて行く様な氣遣はない。所が眞宗や日蓮宗や基督教では、どの様に熱心だと云つても、なにかの動機で直にぐらついで、千變萬化する者が多い。是れは畢竟信不退と云ふ所を手に入れて居らないからである。

十一、無作の妙用

衲が或信者から貰つた紫檀の机を、八年間毎日怠らずに拭いて居るが、今では艶が出て光澤が出て塗物の様に光つて居る。修業と云ふものは畢竟こんなものだ。無始曠劫より垢だらけになつて居る者が、容易に光の出る筈がないのだ。そして修行と云ふ上から云ふと、世福や世智のあるものは、此一大事因縁に意を潜める事は中々六ヶ敷ものである。だから釋尊は四十二章經に二十難を説かれた中に「勢ありて臨まざる事難し、豪貴にして道を學すること難し」と云うてある如く、兎角爵位や財産のある奴は中々眞實の佛道を究め盡す事が出来ないものだ。寶積經の中に、釋尊が、文珠師利に向つて、「汝不思議三昧に入るや否や」と問はれた。すると文珠菩薩は、「いゝえ我若し不思議三昧に入つて居りますのならば、心で彼れや是れやと思議したり食着しない筈ですが、どうもさう云ふ心の境界でありませんから、どうして不思議三昧なんて云ふ

様な高尚な境界に這入れませうぞ」と答へられたと云ふことを説いてあるが、不思議な三昧と云ふのは、無分別の心で以て、さら／＼と遣る事である。佛祖の遣方は、皆無分別でさら／＼と遣られたのであつて、こゝが所謂無作の妙用と云ふ所である。だから吾々も矢張其積りて、無作の妙用の修練を爲さねばならない。

大體悟りとはどう云ふものかと言つて云うて見ようならば、こゝにかう云ふ禪歌が一首ある。

悟りとは悟らてさとりなり、悟るさとりは悟らざりけり

十二、物我の一致

日々夜々の工夫に於て、唯舊に依つて、不變不動に遣らねばならぬ。そして不變不動に工夫を凝らして居る場合に、外から何物が來ても、之と相手になつて居るがよい。さうやつて居ると、時を経るに従つて、自然に物と我と一致して仕舞うて、一如にな

るのである。昔清涼國師が「放曠にして其本性に任せ、靜鑑して其源流（本源）を覺せよ。證を語れば、則ち人に示すべからず。理を説くは則ち證に非れば了せず」と云うた通り、自證自得した處は、人に之を見せる事は出來ないけれども、唯自分が親しく證し、親しく得たる事が事實であるならば、少し其鋒銛を顯せば、直ぐ彼此互に默契するものである。而して悟道の境界は、所謂己の欲する所に従つて矩を越えずで、自由自在であると同時に、規矩準繩に契ふものであつて、恰も上手に牛を牧ふ者は、索を持つて居ても、放つて居ても、自由自在に牛を扱ひ、而も牛を狂亂せしめないのと同様である。であるから、慈明和尚の牧童歌に、「首を回せば平田の濶きを看、四方に放ち去つて欄邊すること勿れ。八面拘すること無くして意に任せて遊ぶ。收めんと要すれば、只索頭に在つて撥す」と云はれたのである。

▲不緩不急。全體工夫と云ふものは、圓熟するに隨ひ意を四方に配つて、無理に心に牆壁を築いて用心を爲なくとも善いのである。而して工夫と云ふものは、緩ならず急な

らず遣るべきものであつて、喩へば劍を空に揮ふが如く、天に届うが、届くまいが、そんなことは考ふべきでない。

▲嚴陽と趙州の問答。昔、嚴陽尊者が趙州和尚に問うて云はれる様には、一物も持つて居らない時にはどうかと問はれた。其時趙州和尚の云はれる様には、放下著。即ち萬事を打捨て、仕舞へと答へられた。さうすると嚴陽尊者は、更に問はれる様には、既に一物も持つて居らないから、打捨てて仕舞へと云はれても、打棄てる品がないぢやありませんかと云はれた。すると趙州和尚之に答へて、何んにも打ち棄てるものがないならば、一層其儘擔ぎ投にして仕舞へと云はれた。其一言で嚴陽尊者は、立所に大悟徹底せられたのである。

よく心を潜めて此問答を考へて見るが善い。凡て法は始め分別から生じ、また分別依つて滅するものであつて、是が即ち諸の分別の法を滅せば、是の法生滅なしと云ふ所である。

十三、急いて遣ては不可ぬ

一大事因縁の工夫をするには、急いて遣つては不可ぬ。昔の歌に「ものゝみの矢走の渡し近くとも急がば廻はれ瀬田の長橋」と云ふのがある通り、遽て、急に遣れば仕損ひをする。と云つて餘り緩漫に遣り過ぎると怠惰に陥るから、その呼吸を善く注意しなければならぬ。丁度樂器を奏する様なもので、急ならず緩ならず、緩急其宜しきを得て遣らねばならぬ。全體、惜いとか可愛とか云ふ心を捕へて見るがよい。泥棒を捕へて見れば吾子なりと云ふ様な場合もあるだらうし、又泥棒を吾子と誤認すると云ふ様な場合もあるだらう。公案と云ふものは心の主人公を搜索して、門を扣く瓦であるから、先づ第一番に、其主人公を見届けねばならぬ。

十四、禪僧の祈禱

十三、急いて遣ては不可ぬ

禪僧が朝早くから、諸神諸佛を禮拜するのは、何んであるかと云ふに、此建仁寺法堂にも、八百萬の神々を合祀して、毎月一日と十五日の兩日には、寶祚萬歳を主として禮拜することであるが、其禮拜する趣意、即ち禪坊主の祈願の精神は、普通の祈願とはころりと違ふのである。さあ八百萬の神々よ、己の云ふ言を聽け、己の云ふことを聽けば尊敬してやるが、若し聽かなかつたならば、唯は置かないぞ。神々の奴隸ども、何を愚圖愚圖して居るのだ。充分の守護もせず其れて役目が立つと思つて居るのか、己は主人公で、御前等神々は己の家來だぞ。主人の命令を守らない神ならば、どんく放逐して仕舞うぞ。國家に變亂があつたり、法堂を荒したりした時には、貴様等を縛り付け、百叩きにして放逐するぞと云ふ様な意味だ。だから僧堂や禪堂に祀られて居る鎮守神杯は、中々浮か浮かしては居られない。丸て夜警や火番が棒を持つて徹夜をして居る様な鹽梅だ。之に就いて可笑かつたのは、東福寺の大會に、千人餘りの大衆が、雲霞の如く群集した所が、食物が無くなつて仕舞つた爲に、皆んなが非

常に困つた。そこで早速評席役位會を開き、臺所の守護神としてある韋駄天を、荒繩でぐるぐる巻きに縛り、貴様が愚圖々々して居つたから、こんな始末になつたのだと打擲した。所が各地からどんく米や薪炭の寄附が、山の如く集つた事があつた。なんと面白い話ではないか。世間の迷信者が、神佛に祈禱するのは、主客顛倒して居るのだ。併し如何に大悟徹底した者でも、妻形は少しも變つたものではない。恰も菟弱のあくのあるのと無いのとは、表面は少しも違つた所はないが、さて喰つて見ると大變味が違ふ様なものである。坐禪と云ひ工夫と云ふ、詰り菟弱のあく抜きの様なのてある。

十五、白隱會下の系統

今の臨濟宗は悉く白隱會下の末流であるが、實に白隱禪師は、自ら五百年以來の知識だと云はれた程あつて、非常な英師であつた。そして白隱の先輩に、日向の古月和

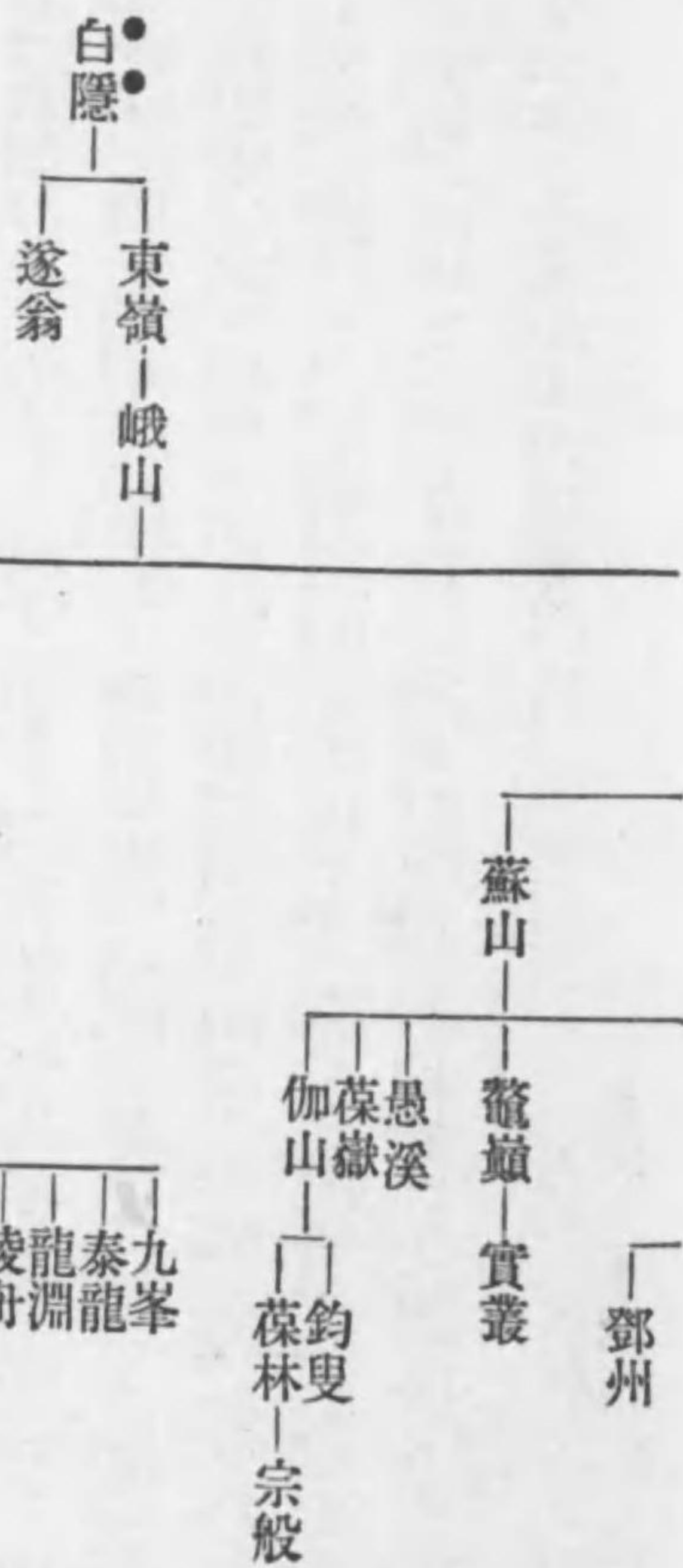
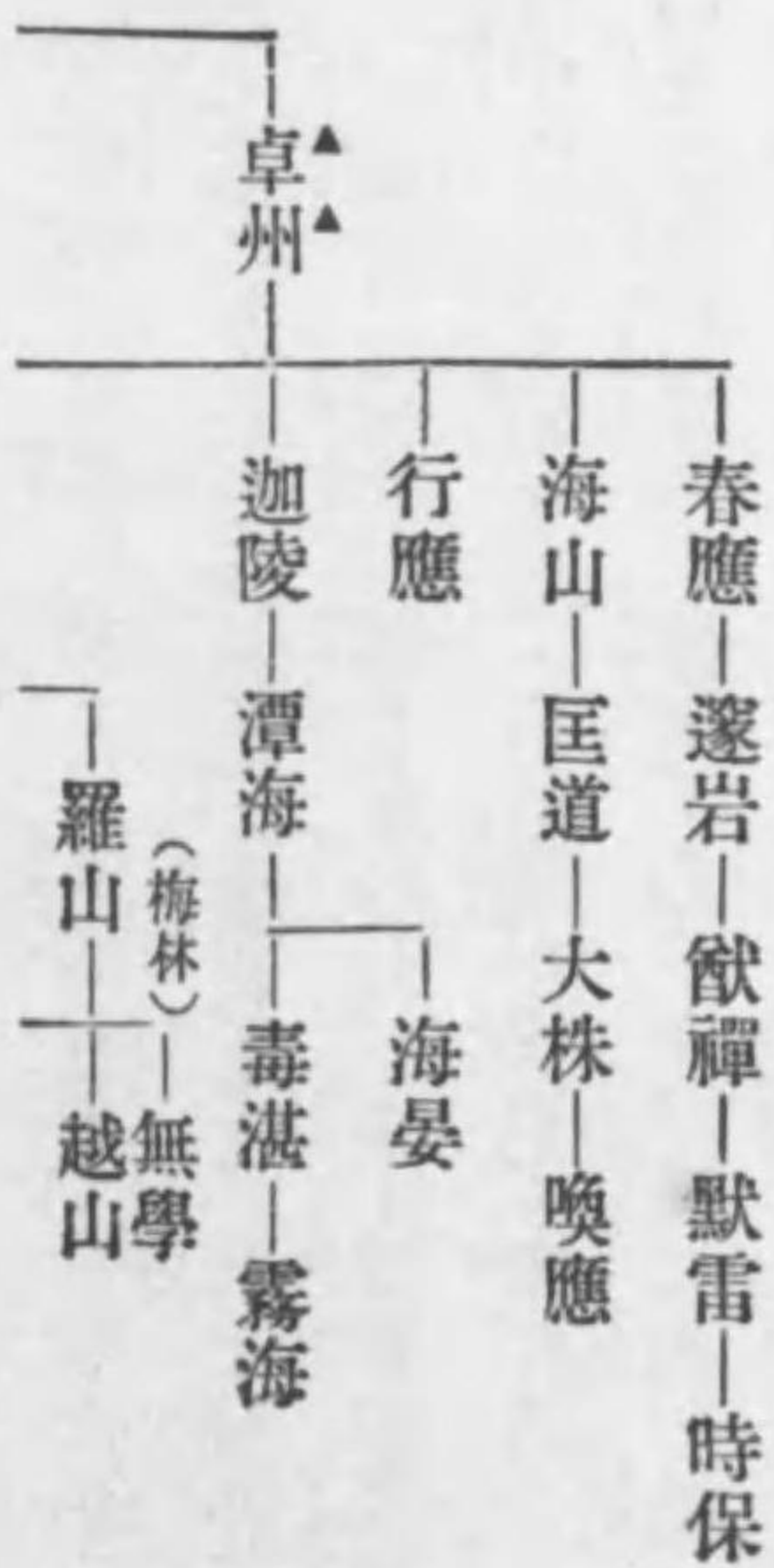
尙と云ふのがあつて、其會下に三河（華嚴寺）の良哉と云ふ俊才があつたが、古月が老衰した爲に、此良哉が白隱の室に遣つて來た時、白隱が良哉を見て、文殊來哉と叫んで賞嘆し、彼に印可を與へた。所が後になつてから白隱和尚が、今三年間良哉に印可を與へなかつたならば、我會下四十餘人中の隨一になつたであらうに、實に惜い事をしたと述懐せられたことがあつた。白隱でさへ印可を急れた爲に俊才な良哉を育て損なつて、終に第二三流の者とならしめた位だから、印可と云ふ者は容易に許されないのである。印可を與へた後に若し其れが墮落でもした時には、印可を與へた師家の大過失となるのだから、よく見極めた上でなければ、印可を與へてはならないのだ。そこで白隱の會下に四十餘人の豪傑があつたが、其中東嶺遂翁の二師が其上足であつた。遂翁と云ふ人は、大機の遂翁とも云はれた人で、如何にも禪坊主の標本とも云ふべき和尚であつた。だが遂翁の法嗣は、阿州瑞巖寺に住職した春叢と云ふので斷絶して仕舞つた。所が東嶺和尚の法脈は益々繁昌して、以て今日に至つて居る。そして

此東嶺和尚と云ふのは、一見禪坊主の様に見えぬ多病の男であつたから、到底長命が出来ないものと諦めて、死土産として、無盡燈論を著はして、死を待つて居られたが、柳の雪折れなしと云ふ風で、老いて益々壯健となられ、七十餘歳の長壽を保たれた。和尚は學問の上では、白隱以上の力量があつて、白隱が説いて未だ悉さなかつた所の幽意を闡顯發揮して、禪門の光彩を發揚した明師であつた。殊に法の爲には、至つて忠實な方で、四弘誓願丈けては足りないからと云うて、普賢の十大願を起し、常に普賢三昧を行じて居られたのである。だから大慈悲の實行は云ふ迄も無く、智仁勇學德兼備の知識であつたのだ。そして師なる白隱の末の弟子に弱年の峨山と云ふのがあつたが、一日白隱が東嶺に向つて、峨山は見込のある奴だから、今より汝の弟子として充分に修養させて呉れと、峨山を托せられた。そこで丁度釋尊が阿難を迦葉に托し、後に阿難が三代目の法嗣と成つた様に、終に峨山が東嶺の法嗣となつた。そして此峨山下に、頭の極緻密な卓州と、豪放不羈な隱山とが現はれた。隱山は美濃の堅相寺に住

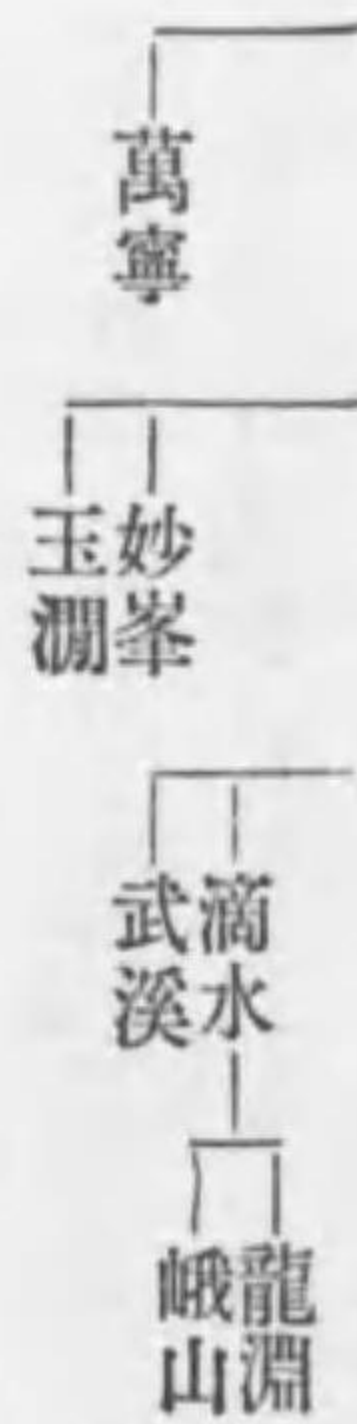
して天澤の僧堂を興し、卓州は尾張の物見寺（信長公の寺）に住した。今の臨濟宗は皆な此卓州隱山の兩派の者計りて、卓州派でなければ、必ず隱山派であるのだ。そして此兩師の會下から、非常に複雑になつて居る。

十六、卓州隱山兩派の系統

先きに云つた卓州隱山兩派の系統を、便宜の爲、系統的に書いて見ると、下の様な者である。



十六、卓州隱山兩派の系統



十七、白隱の述懐

白隱和尚は東海道、原の松蔭寺と云ふ小寺の黒坊主で、終身遣り通された方であるが、此松蔭寺と云ふのは、興津清見寺未であるから、つまり妙心寺の孫寺になるのだ。其當時の清見寺本山の住職は、仕方の無い凡僧であつたから、始終本山風を吹かせて末寺を壓制したものだ。だから白隱和尚の述懐に、小糠三合あつたら孫末の黒坊主になるもので無いと、冗戯半分に云はれた相である。和尚の様な大徳の方でさへ、憊う云ふ事を云はれたのであるから、其當時本寺と末寺との關係が、どれ程八釜敷かつたかと云ふことが分るのである。

十八、白隱の自畫自賛

此處に掛けてあるのは、白隱禪師の自畫自賛であるが、夷子が玩具の春駒を差し揚げ、福祿壽が太鼓を叩いて、偕に踊つて居る畫で、其賛に
 春の始めの春駒などと、夢に見てさへ好いとや申すと書いてある、誰れでも識つて居る有り觸れた畫賛ではあるが、書き手が書き手だから一寸と面白。

十九、石頭和尚の草庵歌

景德傳燈錄の中に、石頭和尚の草庵歌と云ふのが出て居る。則ち之である。古歌に「引寄せて結べば柴の庵なり、解くればもとの野原なりけり」と云うてある通り、本源の自性と云ふ事が分つて見れば、解くればもとの野原であるばかりでなく、解けなくて

も矢張り其儘野原であるのである。解いて始めて野原だと合點するのは、誰でも出来る事で、そんなトロ臭い事では駄目である。解かなくても元の野原であると云ふ、見地に住せねばならぬ。

吾結草庵無寶貝 飯了從容圖睡快 成時初見芻草新 破後還將芻草蓋
 住庵人鎮常在 不屬中間與内外 世人住處我不住 世人愛處吾不愛
 庵雖小含法界 方丈老人相體解 上乘菩薩信無疑 中下聞之必生怪
 問此庵壞不壞 壞與不壞主元在 不居南北與東西 基址堅牢以為最
 青松下明窓内 玉殿朱樓未為對 衲被幪頭萬事休 此時山僧都不會
 住此庵休作解 誰誇鋪席圖入買 廻光返照便歸來 廓達靈根非向背
 遇祖師親訓誨 結草為庵莫生退 百年拋卻任縱橫 擺手便行且無罪
 千種言萬般解 只要教君長不昧 欲識庵中不死人 豈離而今這皮袋

二十、出家と俗人

又法燈國師の歌に「世を捨て、身は無きものと思へども、雪の降る日は寒くこそあれ」とあるが、如何に通世出家の身の上と云へばとて、喰はずに生きて居る事は、なんぼなんでも出来ない。つまり「世を捨て、身は無きものと思へども、ものくはずには居られざりけり」だ。だが出家と俗人との依つて分かる、區別の點は、寒いとか寒くないとか、飯を喰ふとか喰はないとか云ふ所にあるのではなくして、石頭和尚が所謂「吾れ草庵を結ぶ寶貝なし、飯了して從容として睡の快ならんことを圖る……世人住する處我住せず、世人愛する處我愛せず、庵小なりと雖も法界を含む」と云はれた様に、世人が迷執せる顛倒の妄見を離れた處に、存するのである。

二十一、有無の商量

曾て達磨が二祖に曰はれる様には、汝但だ外諸縁を息めて、内心喘ぐことなく、心
 牆壁の如くにして、以て道に入る可しと云はれた。然るに今の禪を遣るものは、動も
 すれば此語を聞いて、直ぐ早合點をして、頑然自知になつて仕舞ひ、牆壁の如く硬く
 ならねばならぬ様に心得る者があるが、之は大變な謬りである。昔の禪歌に「佛にも
 成りかたまるはいかぬこと、石佛らを見るにつけても」とある通り、總じて言説に執着
 しては不可ない。言説は眞理の月を指し示す指に過ぎないのだから、指を見て之に執
 着し、却つて天上の月を見ないでは、何んの所詮も無い事だ。言説文句に拘泥するのは
 丁度我家へ歸つてから里程を問ふ様なもので、何んの必要も無いことだ。併し硬くなり
 過ぎては悪いと云つて、又一概に之を排して、反對の邪路に走つてはならない。飽く迄
 情識を撃破しなければ、心火常に焰々として、苦惱より脱却する事が出来ない。だか
 ら公案提撕を遣る時には、宜く有無の商量をしてはならぬ。雲門禪師が、説く時だけが
 即ち有て、説かない時は即ち無であると思つては不可ない。又商量する時計りが有

て、商量しない時は無であると思つては不可ないと云はれた通り、善く此有無の商
 量を作して、驀然と進行しなければならぬ。

二十二、邪 禪

近年はどうも禪に種々の邪禪があつて困る。例へば一問一答の最後の一句を多くす
 るとを以て、禪と心得て居る者もあり。或は古人が道に這入つた因縁に就いて、古を確
 かめ今を量り、之は虚なり、彼は實なりと、差別分別するのを禪だと思つて、得々とし
 て居る者もあり。或は眼見耳聞を附會して、三界は唯心だとか、萬法は唯識所變だと
 か云ふのを、禪と思つて居る者もあり。或は獨り眞闇がりの魔鬼窟裏に坐して、黙照坐禪
 をなすのを以て、眞の禪と心得て居る者もある。併しかう云ふ邪禪は、妙悟の境に達
 して居らないのみならず、却て悟りと云ふものは、人を誑惑する者である。坏と毒言を放
 ち、自損々他する連中である。だから衲は常に大衆に聽かせる様には、世間の工藝武

術坏てすら悟達の境に入らなければ、其妙を得ないものだ。況んや生死の難關を脱せんとするには、但だ口頭を以て静を追ひ、夫れて解脱せんとする様な事では駄目だ。さう云ふ遣方は、恰も眞黒な漆桶を頭に被つて、東奔西走して、物を採らんとする様なもので、求むれば求むる程遠く離れて仕舞うのだ。だから生死問題を根本的に解決し様と思ふたならば、先づ第一に此漆桶を打破して仕舞はなけりやならない。そして邪師や邪教に誘惑せられない様に、要慎しなければならぬ。

二十三、精進心と妄心

法句經の偈に、若し精進心を起さば、是れ妄にして精進に非ず。直心にして若し妄無くんは、精進涯あること無し」と云うてあるが、之に就いて山岡鐵舟居士に、憇う云ふ話がある。居士が或日友達と二人連れて歩いて居た所が、一天俄に掻き曇りて、雷鳴甚しく直足元へ落雷した。友達は喫驚仰天して卒倒して仕舞つたが、居士は平然と歩

いて居つた。そこで其後その友達が居士に向つて、なぜ君はあの時驚かなかつたのかと問うたら、居士の云ふ様には、乃公だつて他の者が怖ろしい事は、矢張怖ろしいに違ひないが、歩いてゐても坐禪工夫をして居るものだから、殷々たる雷聲も遠く耳の底に聞えて、卒倒したり、どうしたりする餘地が、更に無いからだと答へた相だ。こゝが中々面白い所で、なぜ居士が泰然自若として居られたのかと云ふと、心境全く一致して居つたからである。正念工夫の眞ツ只中には、寸分も他の者が入り込む餘地がないからだ。即ち全く無念無想であるからだ。こゝが所謂、直心にして若し妄無くんば、精進涯ある事なしと云ふ所である。

二十四、造塔と静坐

また文殊の偈に、若し人静坐一須臾なる時は、恒沙七寶塔を造るに勝る。寶塔畢竟化して塵となる。一念静心正覺を成ずと云うてあるが、静坐と云ふのは、即ち坐禪の

事で、坐禪は元來廬舎那の本體であるから、一分坐すれば一分の佛、一時坐すれば一時の佛で、是れ本地法身の本體である。雲に聳ゆる五重の塔は、元是れ法身の影であるから、また無くなつて一塵となつて仕舞ふ。だが法身の本體たる静坐は、決して無くならぬのみならず、遂に正覺を成ずるのである。此建仁寺にも、昔梶原一族が滅された後に、其妻が塔を建てた舊趾が、少し残つて居るが、塔は影も残つていない。堂塔伽藍は皆んな恂う云ふ有様であるから、そんな事に骨折るよりも、永劫無くなりもせず、滅しもしない、坐禪をやらねばならぬ。

二十五、少室夜坐吟

少室六門集に、少室夜坐吟が出て居るが、少室とは達磨大師の居られた室で、少林寺のことだ。一更から五更に至るまでに區別して、坐禪をやつて居る境界を云はれたものだ。本來は左様な區別を付けられぬもので、別に一更から五更に限られた譯では

無い。今茲に一更から五更までと云はれたのは、晝夜不斷と云ふ事にもなり、或は面壁九年とも成り、三十年とも成り、一生涯ともなり、盡未來際に至るまでのことゝもなるのだ。畢竟修行をして發達し行く、心の經過を示されたものだ。今其文を擧げて見やう。

- 一更端坐結跏趺 怡神寂照胸同虛 曠劫由來不生滅 何須生滅生滅渠
- 一切諸法皆如幻 本性自空那用除 若識心性非形像 湛然不動自如如
- 二更凝神轉明淨 不起憶想真如性 森羅萬象併歸空 更執有空還是病
- 諸法本自非空有 凡夫妄想論邪正 若能不二其居壞 誰道即凡是非聖
- 三更心淨等虛空 遍滿十方無不通 山河石壁無能障 恒沙世界在其中
- 世界本性真如性 亦無本性即含融 非但諸佛能如是 有性之類普皆同
- 四更無滅亦無生 量與虛空法界平 無來無去無起滅 非有非無非暗明
- 無起諸見如來見 無名可名真佛名 唯有悟者應能識 未會衆生由如盲

五更般若照無邊、不起一念歷三千、欲見真如平等性、慎勿生心即目前、
妙理玄奧非心測、不用尋逐令疲極、若能無念即真求、更若有求還不識

二十六、虚空の差別

一更の時にも虚に同じとか、諸法は幻の如く本性は自空だとある。四更にも滅なく生なく量虚空法界と等しと云うてある。一寸見ると一更から五更まで、どれも同じ様なことを云うて居らるゝ様だが、決してさうてはない。たゞ虚空と云へば同じもの、様だが、其虚空にも異つた點があるのだ。例へば同じ晒し木綿でも、一寸見れば同じ様に只眞白に見えるけれども、能く能く手に觸れて見ると、上等なのか下等なのか、ちやんと其差別が判る様なもので、同じ虚空と云はれても、種々の差別があつて、随つて心の境界にも、優劣淺深の差別があるのである。だから一更より二更三更と云ふ様に、何處までも不撓不屈に繼續してやらねばならぬ。

二十七、丹霞和尚の翫珠吟

翫珠吟と云ふのは、先づ恁う云ふ文である。

般若靈珠妙難測、法性海中親認得、隱顯常遊五蘊中、内外光明大神力、
此珠非大亦非小、晝夜光明皆悉照、覓時無物亦無蹤、起坐相隨常了了、
黃帝曾遊於赤水、爭聽爭求都不遂、罔象無心却得珠、能見能聞是虛僞、
吾師權指喻摩尼、採人無數溺春池、爭拈瓦礫將爲寶、智者安然而得之、
森羅萬象光中現、體用如如轉非轉、萬機消遣寸心中、一切時中巧方便、
燒六賊兮燦衆魔、能摧我山竭愛河、龍女靈山親獻佛、貧兒衣下幾蹉跎、
又名性兮亦名心、非性非心超古今、全體明時明不得、權時題爲弄珠吟、
▲般若の靈珠。古人は是を、丹霞和尚は珠に譬へ、龐居士は古劍に譬へたのだ、乃て今の
本文に「般若の靈珠妙にして測り難し、法性海中親しく認得す」と云ふのは、法性海

中に煩惱妄想の波が起つて居るから、般若の靈珠が現れぬので、先づ第一に心の狂瀾怒濤を押し鎮めて、明鏡の如く澄み切らする必用があるのだ。心の狂瀾怒濤を鎮定すれば、般若の靈珠が現はれると云ふのは、丁度深夜の闇黒であつたものが、夜が明けてばつと太陽が輝いて、一時に光明世界となる様なもので、煩惱妄想の暗黒中へ大悟の日輪が現はれるのだ。然るに多くの人は之を知らず、百世日々に用ひて相識らず、浮か／＼暮らして居るのを「隱顯常に遊ぶ五蘊の中」と云はれたのだ。そして此所謂般若の靈珠は「大にあらず小にあらず」で、若し大なる時は天地一杯に擴り、小なる時は至微至細で、芥子粒の如きものだ。そこが靈珠の靈珠たる所である。

▲莊子の偶言。夫れから「黃帝曾て赤水に遊ぶ」と云ふのは、元莊子の偶言であるが、赤水と云ふ河に一の寶珠を落して、さあ大變だと云ふもので、多くのものが寄つて懸つて河底を悉く搜したれども、遂に搜し當てる事が出来ず、大騒ぎを爲たと云うてあるが、之を臨濟和尚は、赤肉團上に一無爲の法身ありと云はれた。と云ふのはどう云

ふ意味かと云ふと、所謂「罔象無心にして却つて珠を得」で、罔象と云つて、智慧や才覺の無い眞の愚者になると、始めて般若靈妙の珠を見出す事が出来ると云ふ事だ。生半熟の智慧や才覺があると、其爲に妄見を募つて、却つて此珠を發見する事が出来ない。所が世間には此半可通の智慧や才覺の爲に眼が暗んで、折角立派な珠を持つて居ながら、迷うて居る者ばかりだ。何んと可愛な事では無いか。眞に此珠を我物に仕様と思ふならば、智慧や才覺を振り棄て、無一物の赤裸々になつて、全くの愚物になつて仕舞はねばならないのだ。

▲東嶺和尚の自費贊。其れに就いて恁う云ふ話がある。此程高台寺山内の玉雲院が、東嶺和尚の自書自贊の珠の軸物を持つて來て、其贊が能く分らぬから讀んで呉れと云うので、どう云ふのか讀んで見たらかう云ふ贊であつた。

珠ぢやぞよ、磨けば光るもの持て、其なりかばね(註、なりかばねとは人の肉體の事也)何の眞似ぢやいと云ふのだ。何んと面白い贊ではないか。今の人は恁う云ふ般若の珠杯と云ふよりも

寧ろ黄金の珠が身中にあると云うたならば、一生懸命に捜すに違ひないアハ、ハ、ハ。
 ▲六賊の奴隷。次に「萬機消遣す寸心の中」と云ふは、先づ消遣とは殺活自在の境界だ。
 所が多く凡人は、六賊の奴隷となつて居る計りてなく、終には六賊に喰はれて仕舞ふのだから、眞の修業者は、摩尼寶珠の光明を以て、六賊を焼き衆魔を燦かさねばならぬのだ。

▲八歳の龍女。次に「龍女靈山に親しく佛に献ず」と云ふのは、靈山會上に僅か八歳の龍女が出現して、釋尊に寶珠を献じたと云ふが、法華經提婆達多品にある譬喩である。此譬喩を此處へ引いた意は、此般若靈妙の珠さへあれば、男が成佛するは無論、如何なる女人でも成佛すると云ふ意味である。即ち人類は勿論昆蟲鱗介に至る迄、悉皆成佛すると云ふのである。そこで涅槃經の菩薩品には、我は是れ佛なりと知覺する者は、女と雖も男と名く。又我は是れ佛なりと云ふことを知覺せざるものは、男と雖も之を女と名くと説かれてある。だから元來佛に成ると成らざるとは、肉體の男女に就いて

云ふのでは無く、佛性の寶珠を知覺すると知覺せざるにあるのだ。

▲貧兒衣下の珠。それから「貧兒衣下に幾んど蹉跎す」と云ふのは、矢張法華經にある譬喩で、何億萬圓とも云へぬ結構な寶珠を、親がちやんと其兒の着物の襟に縫ひ込めてあるのを識らずして、遠國を流浪し、自ら貧賤な者であると自暴自棄して居る様に、迷ひの凡夫が、眞の佛性の珠を持ち乍ら、三界二十五有界を流轉輪廻するのだと、譬を以て誡められたのである。

▲虛明歷々。「全體明なる時明むることを得ず」と云ふのは、臨濟和尚が、虛明歷々底と云はれた處である。

▲心珠と櫻花。已上さつと「翫珠吟」に就て話したが、全體此心の珠と云ふものは、身中に何處を捜しても、左様なものが無い。丁度櫻の樹を幾ら割つて見ても、櫻の花が更に無いのと同じだけれども、一度春風駘蕩の時節が来れば、自から花爛漫と咲き匂ふが如く、因縁順熟して大死一番後の大活を得ば、般若の靈珠は赫灼として心の中に

輝き渡るのてある。

二十八、達磨の寶珠觀

此間から引續いて丹霞和尚の翫珠吟に就いて話したが、今其餘談として、是非話にやならぬ事がある。と云ふのは、釋尊から第二十七代目の般若多羅尊者が、香支國の大王から非常に歸依せられたので、或日の事に、大王が尊者を請待して、三人の皇子を其席へ呼び寄せ、秘藏の寶珠を出して云はれる様には、三人の皇子よ、卿等は此珠を如何なるものと思つて居るかと問はれた。すると第一の皇子が先づ進んで答へられる様には、之は無上の珍寶でありますと云つた。次に第二の皇子も其と同様な答へつた。然るに第三の皇子即ち達磨は、此珠は決して貴き寶ては無い、眞の寶と云ふは佛法を除いては外にありませぬ、佛法こそ眞に心の珠であつて、無上の珍寶であります。今此處に寶てであると云つて居る珠は、時と場合によりては、砕けもすれば、火に

焼けることもある。けれども心の珠は決して碎ける事もなく、火に焼ける氣遣ひの無いものでありますと答へられた。乃て般若多羅尊者を始め、一同其言葉に感じて、尊者の弟子となし、遂に法嗣となられたのである。梅檀は二葉より香しくと云ふが、達磨大師が幼少の時、既に此活眼を備へて居られたのは、實に驚嘆すべきことではないか。

二十九、闡提翁

白隱和尚の別號を闡提翁と云はれたが、自ら闡提と云はれた處に妙味があるのだ。そして此白隱和尚が古人の語句を拾ひ、之を座右に備へて、寒林貽寶とは如何なる謂れがあるのかと、問うた時に、和尚の答に、和解言句を超越して、得脱無依の時節是を寒林と謂ふのみ。貽寶の二字は汝自ら參究し去れと云はれた。其或人と云ふのは、和尚の高足東嶺和尚の事で、東嶺師は、二十年間白隱和尚に侍して、遂に其所謂貽寶の貽寶たる所以を知られたのである。

三十、寒林と胎寶

凡て寒林と云ふ處を通過しなければ、どうしても胎寶と云ふ境界を獲得する事が出来ないのだ。丁度吉野の花爛漫と咲き匂うて居る、一目千木を見様とする場合には、途次寂しい墓原も通らねばならぬだらうし、寒村僻地も通らねばならぬ。さうして始めて吉野に達することが出来る様なものである、寒村即ち嚴冬極寒の辛苦を経なければ、一陽來復と云ふ春景色にはなれないのだ。だから求めても是非此嚴寒の堅氷霜雪に打當て、心膽を鍛へなければならぬ。そこを通り抜けさへすれば、自ら、鳥啼花笑ふ春がやつて来るのだ。畢竟寒林と云ふのは、大死一番、二進も三進も動きの取れない、難關を通過することで、胎寶と云ふのは、悟後の修行の事だ。さて其悟後の修行となると、中々容易な事では無いのだ。東嶺和尚てすら、二十年も此寶を得るのに懸られた程である。だから今の雲衲等は、三十年も四十年も骨を折る大決心で、勇猛精進しないと、到底駄目である。

三十一、菩薩の境界

抑も寒林と云ふのは、意識の上に浮ぶ種々雑多の妄想煩惱を刈り盡して、風吹き荒ぶ枯野となることだ。而して後始めて春風胎蕩の天地が開けて来るのである。是が即ち胎寶と云ふ處だ。凡て人間には、妄想がある間は賑かであるが、之を刈り盡して仕舞うと寂くなるもので、所謂阿羅漢と云ふものは、即ち其境界である。出山の釋迦も矢張此寒林と云ふ側の姿だ。然るに華嚴の會座へ來ると、釋迦如來は立派な千葉の蓮華に坐し、莊嚴美麗な寶冠を冠り、丸て菩薩の様な姿となつて居られる。こゝが即ち、寒林を通り越した胎寶と云ふ境界である。

三十二、臨濟の五山十刹

▲臨濟の五山。五山と云ふのは何人も能く知つて居る通り、支那宋の五山に模倣して拵へたもので、其順序は、天龍、相國、建仁、東福、萬壽寺の五ヶ本山である。其中萬壽寺は、今の東本願寺の積穀邸がある所にあつたと云ふ説だが、今は東福寺へ合併して、同山内に其名義だけ残つて居る。そして其五山の外に、南禪寺は五山之上と稱して五山の上に置いてあつたのだ。これは龜山法皇の縁故があつたからだ。また、天龍相國と云ふ順序に定めたのは、畢竟足利の寺であるから、さう云ふ順序にしたのだ。尤も草創建立の年代から云ふと、第一が此建仁寺で、第二が東福寺、第三が相國寺と云ふ順序であつて、建仁寺が一番古い歴史を持つて居る。

▲十刹及び諸山。そして五山の次ぎが十刹と云つて、等持寺、臨川寺、眞如寺、安國寺、寶幢寺、普門寺、廣覺寺、妙光寺、龍朔寺等である。それから其次に諸山と云ふのがあつて、例せば越中の國泰寺の様な類である。

三十三、色衣と輪住

そこで、南禪、妙心、大徳の三山だけは紫衣であつて、五山は黄衣、十刹は紺衣と規定してあつたのだ。そして其時分には輪住と云ふ事が流行して、建仁寺の住職でも一旦南禪寺の住職になる事があると、非常に其階級が昇進したのだ。だから何箇寺でも澤山輪住して來た者程、階級が高くなると云ふ風習であつたのだ。所が今日ではどうだ、どんな寺中の愚僧でも、冥加金次第で、紫衣を着て、威張つて居るではないか紫衣も其處まで下落すれば、寧ろ滑稽と云ふべしだ。

三十四、禪宗二十四流

- | | | | |
|--------|----------|----------|----------|
| 第一建仁開祖 | 千光(榮西)祖師 | 第二永平開祖 | 道元(承陽大師) |
| 第三東福開祖 | 圓爾(聖一國師) | 第四紀州興國開祖 | 心地(法燈國師) |

- 第五相州淨智 無象
- 第七建長 古先
- 第九建仁 建長 中岩
- 第十一建長 大拙
- 已上は南詢支那へ渡航の十一師
- 第十二建長開祖 蘭溪
- 第十四圓覺開祖 無學(佛光國師)
- 第十六相州淨智開祖 大休
- 第十八南禪 一山
- 第二十南禪 東陵
- 第二十二建仁 南禪 清拙
- 第二十四建仁 南禪 明極(楠正成公の師)
- 第六崇福 龍翔開祖南浦(大應國師)
- 第八建仁 別傳
- 第十藝州佛通 愚中
- 第十三建長 兀庵
- 第十五建仁 建長 鏡堂
- 第十七建長 西礪
- 第十九建長 東明
- 第二十一建長 靈山
- 第二十三南禪 竺仙

已上は東渡(日本へ渡來)の十三師

南詢東渡の兩僧を合して、年代の順序によつて列記すると、

- 第一千光、第二道元、第三圓爾、第四心地、第五蘭溪、第六兀庵、第七大休、第八無象、第九無學、第十一山、第十一南浦、第十二西礪、第十三鏡堂、第十四靈山、第十五東明、第十六清拙、第十七明極、第十八愚中、第十九竺仙、第廿別傳、第廿一古先、第廿二大拙、第廿三中岩、第廿四東陵と云ふ順序である。

▲廿四流の今昔。已上述べたる禪宗の二十四流に就いて恁う云ふ話がある。南浦即ち大應國師の法嗣に、大徳寺の開祖大燈國師(宗峯)が出て、其宗峯の法嗣に、妙心寺の開祖關山國師(惠玄)が出た。其關山國師の三百年遠諱を花園妙心寺で執行したが、當時の同本山輪番住職の愚堂國師が、導師を勤められて、其香偈に、

二十四流日本禪 惜哉大半失其傳
關山幸有愚堂在 續焰聯芳三百年
と唱へられた。すると其席に居られた妙心寺の大愚和尚が、此香偈を開いて、否や愚

堂ばかりで無い、大愚が居るぞと云はれた事があつたよ。大愚和尚の事は兎に角、正しく此香偈に據つて見るも、關山國師已後三百年の後に、二十四流の過半は、既に傳燈を失つて居たのは、事實であつたのだ。

▲愚堂國師の修行時代。此愚堂國師が若僧時代には、妙心寺山内聖澤院住職庸山和尚に師事して居られたが、其後各地の僧堂に掛錫して、随分骨を折られてから、再び聖澤院へ歸り、庸山和尚に參じて見解を述べた處が、そんなにすい悟りが何んになるものかと、襤褸囊に遣られたので、愚堂國師は炎暑の時をも厭はず、早速丸裸になつて竹藪の中に這入り、徹夜坐禪三昧に入られた。坐禪中は工夫三昧で居るから、何も角も知らずに居られたが、翌日になつて身體を見ると、蠶蚊が刺して全身が眞赤になつてゐた。其時大いに得る處があつて、更に庸山和尚に參じ、忽ち印可を受けられたと云ふ事である。

▲無難禪師の發心。其後此愚堂和尚が江戸へ下らるゝ途中、中仙道の竹中驛を通り懸られ

た時、草鞋を稼業にして作つて居る百姓家へ泊まられた。所が其處の亭主が大酒飲みで、貧乏するのを女房が非常に心配して居つたものだから、愚堂國師にどうか亭主に意見をして下さいと頼んだ。そこで和尚は其亭主に向つて種々様々に垂示せられた所が、流石の亭主も大いに感動し、忽ち大決心を起して、翌朝和尚が出發せらるゝ際に、是非弟子として隨行させて戴きたいと言ひ出して、とう／＼和尚の弟子となつた。後に至道無難禪師と云ふのが、即ち此人の事である。

▲無難禪師の法脈。無難禪師の法嗣が信州飯山城主の庶子であつた、正受老人であつて、正受老人の法嗣が『日本に過ぎたるものが二つあり、駿河の富士に原の白隠』と自ら云はれた白隠禪師である。

▲白木屋の至道庵。所が此至道無難禪師は、京都や東京にある吳服商白木屋の親戚に當るさうであるが、其事は此程京都の白木屋へ大般若經の轉讀に招待せられた折に委しく聞いた事だ。そして其時代に江戸の白木屋が、至道庵と云ふ寺を建立して、愚

堂、無難、正受、白隠の四禪師の木像を安置してあつたさうだ。然るに近年になつて廢寺となり、其地所も悉皆賣つて仕舞つたと云ふ事である。それで衲は當地の白木屋の主人に、お前等の先祖が折角、寺を建立して四禪師の徳を傳へやうとしたものを、其子孫たるものが無茶苦茶にして仕舞うては、祖先へ對して濟まない事であるから、是非再興する様に相談したが善からうと云うたら、何れ東京へ行きました時に、何んとか相談して、地所を買ひ戻し、再建する様に取計らひますと云うて居たよ。大體此至道庵には白隠和尚の書かれたものも澤山あつて、和尚が寺の事に就て、時の寺社奉行へ差出した、願書類の控へまであつたさうだ。

▲現代の臨濟禪。白隠和尚が常に禪の命は細い絹糸一筋の様なもので、實に危いものであつたと云はれた通り、愚堂和尚から白隠和尚の時代までは、實に臨濟禪の命脈は危殆の有様であつたのだ。然るに前に話した様に、白隠の會下から引續いて英匠が現はれ、次第に繁昌して今日まで傳燈相承して來たのだ。だから現代の臨濟禪は、關山國師の

兒孫のみてあると云つて可いのである。

三十五、再び五山十刹に就て

此間京都の五山十刹のことを大略云つたが、其起因は遠く印度の佛在世に起つたので、五山十刹と一口に云つても、いろ／＼あるのである。

- 一、佛在世の五精舍（印度五山）
 - 一、佛滅後の十刹
 - 一、支那の十刹
 - 一、京都の十刹
 - 一、關東の十刹
- 一、支那の五山
 - 一、京都の五山
 - 一、鎌倉の五山

▲印度の五山十刹。五山とは鹿苑、祇園、竹林、大林、那蘭陀であつて、十刹とは、頂塔、牙塔、齒塔、髮塔、爪塔、衣塔、鉢塔、錫塔、餅塔、鹽塔である。

▲支那の五山十刹。經山、靈隱、天童、淨慈、育王が五山で、中竺、道場、蔣山、雪竇、

萬壽、江心、雪峰、双林、虎丘、國壽が十刹である。そして此支那に於ける五山十刹は、宋の寧宗の時、竺土に準じて立てられたるものである。そして天堺寺と云ふのが支那での五山之上である。

▲本朝の五山十刹。天龍、相國、建仁、東福、萬壽の京都の五山より以前に、五山があつたのだが、右の五山は其定められた時も、又其順序も詳かでない。そして今の天龍相國等の五山十刹は、至徳三年に足利尊氏の定められたものである。それから又京都の十刹の中で、其後大徳寺が勅旨によりて、南禪寺と同じ位になり、龍翔は大徳に屬したのである。

そして鎌倉の五山と云ふのは、建長、圓覺、壽福、淨智、淨名で、十刹は、禪興、瑞泉、東勝、萬壽、長樂、國清、大慶、圓福、興聖、外一箇寺である。

先達て京都五山の創立年代の順序に、建仁、東福の次に相國とあつたのは、間違ひで、正しく云ふと、建仁、東福、大徳、南禪、天龍、妙心、相國と云ふ順序になる

のである。

三十六、現在の安住

業務が繁忙で爲すべき仕事は澤山ある時に、どうして之を處置するであらうか。又凡ての出来事に撞着つた時に、どう云ふ風に動靜したらよいのであらうか。そして又寂靜の處に住して居る場合に、妄想を起さないだらうか、どうだらうか。凡てかう云ふ事を體究して居る時分に、種々雑多の妄念が起らないだらうか、どうだらうか。之に就いて釋尊は「心妄りに過去の法を取らず、亦未來の事に貪著せず、現在に於て有らず、住する所の三世は、悉く空寂なりと了達せよ」と言はれた。即ち過去の事は善惡共に思量しない方がよい。若し然らずして、過去の事を追懷して思ひ煩つたならば道の妨害となるからである。又未來の事も、無暗に計度分別して、取越苦勞許りをして居たならば、必ず狂亂に陥つて仕舞ふ。そして又現在も順逆共に貪著してはなら

ぬ。若し順逆の境遇に心を奪はれて貪著して計り居たならば、胸中擾亂して仕舞ふ。だから現在の事は一切時に臨み、一切の縁に随つて、可い加減にして、徒らに過去を妄想したり、未來の取越苦勞をして、騒ぎ廻はるのは甚だ善くないことである。

三十七、順逆二境

順逆二境に於て、逆境は却つて遣つけ易いが、順境は中々面倒だ。我意に逆ふものは、唯一箇の忍を以て通り過ぐる事が出来るけれども、さて順境と云ふ奴は、油がしみくくと浸潤する様なもので、中々之を避くる事が六ヶ敷い、丁度磁石と鐵とが相吸引する様なもので、無明煩惱と順境とが互にくつつき合つて、益々無明を増長せしむるのである。それだから、若し得意満面の順境に立つて居る時に、眞の智慧が無かつたならば、鴨が知らず識らず、霞の網に引懸つて、遁路を失うて仕舞うのと同様に、順境と云ふものは、非常に恐ろしいものであるから、修道者は最も此點に警戒と

注意とを拂はねばならぬ。

▲淫怒癡 彼の維摩經の中に、増上慢の人に對して、淫怒癡を離るゝを解脱と爲すと説かれてあるが、又同經に、増上慢なき者に對して、淫怒癡の性即ち是れ解脱なりと説かれてある。人にして若し此淫怒癡を免れ得たならば、順逆の境界に於て、起滅の相が無くなつて、増上慢を離れ得るのである。こゝが所謂世間に入得すれば、出世間餘りなしと云ふ所である。

三十八、へぼ知識

近頃修行者の中に、往々前條の意味を誤つて、増上慢の淫怒癡其儘が出世間の淨法なりと心得誤り、之が即ち煩惱即菩提、生死即涅槃だ坏と、間違つた事を説いて居るものがある。實に品行の悪いへぼ知識には困つたものだ。川柳に「一休の眞似して寺を逐ひ出され」と云うてあるのは、かう云ふ下手知識を諷刺したものだ。畢竟かう云

ふ誤謬に陥るのは、増上慢より起る姪怒癡と、増上慢を離れた姪怒癡との區別を知らないからである。天台では、かう云ふ誤解者を、矢鱈圓頓と云うのだ。如何に煩惱を起しても、之を行しても構はぬ。そこか煩惱即菩提で、圓頓一乘の妙法だとやられては、たまつたものではない。だから我臨濟宗では、此點に注意をして、尠くとも二十年は口を開けさせず、又印可した後でなければ提唱を許さないのである。そして其提唱と云つても講釋屋の様に、くどくしく遣らずに、極あつさりと遣るのである。

三十九、禪家と教相家の法戦

▲禪家と教相家。とは其扱ひ方即ち活用の仕方にては、各々其特色があるけれども、一般に教相家は、見臺に向つて講釋する様な傾きがあつて、兎角情識に流れ理窟に陥る風がある。そして却つて其れを向うでは得意にして居る様に見える。所が禪家ではころりと正反對で、情識や理窟を遠離して仕舞つて、行住坐臥に正念工夫を相續して

行くのだから、總て活動的だ。其れ故禪家では、靜中の工夫よりも、動中の正念工夫を重んずるのである。此禪家と教相家との相違は、昔からあつたもので、隨分盛に兩家が論戦を交へたものである。今茲に其一例を擧げて見やう。

▲大燈國師。頃は元弘四年の正月二十一日、清涼殿に於て法戦を遣つた事がある。各宗諸山の學徳兼備の高僧が澤山集つて、大燈國師を相手として法戦を遣つたのだ。そして其時迄大燈國師は二十年の間、五條の橋で頭陀行即ち乞食となつて修行して居られた所が、或時、瓜の施行があつて、其瓜を空手で受取れと云ふ難問を與へられた。けれども澤山其處に居る普通の乞食は、誰れ一人として其答をなし得るものが無かつたが、一番結末に出て來た乞食が「空手で出したら空手で受け取る」と即答した。そこで是れこそ勅命で探索して居る禪師に相違無いと云つて、其筋の役人等が押し懸けて來て其乞食の老人を入浴させたり、奇麗な法衣を着せたりして、ちやんと立派に仕度をさせて、勅命であるから直ちに參内せよと云つて、清涼殿へ引き連れ歸り、即日各宗の高

僧と論戦せしめたのだ。云ふ迄もなく其乞食の老人とは、大燈國師其人であつたのだ。
▲二論敵を破す。先づ第一番に遣つた清涼殿での法戦では、一問一答で勝敗を決すると云ふ大燈國師の申出の通りに遣つた。そこで先づ山門派（比叡山）の玄惠法印が現はれて「如何なるか是れ教外別傳の禪」を問ふや否や、大燈國師は忽ち「八角の磨盤空裡に走る」と答へられた所が、流石の玄惠も二の句が出ず、忽ち降参して國師の弟子となつて、名を宗叡と改めた。次に現はれたのが三井寺の僧正で、一箇の箱を持つて出て云ふ様には「これは是れ乾坤の箱也」と遣つた。すると國師は直ぐ折り返して「乾坤打破の時は如何」と反問せられた。所が三井寺の僧正最早一言も述べることが出来ず、其儘國師の弟子となつて、宗國と改名した。そこで此二弟子が國師を輿に乗せて行つて、即日大徳寺の建立に着手したのだ。後に之が例となつて、大徳寺の住職と定つて、初めて参内した時には、其歸りに必ず叡山の僧侶が輿を昇いて、大徳寺まで送ると云ふ事になつてゐた。

▲七日間の法戦。然るに教王護國寺即ち東寺の虎聖と云ふ和上が、法戦は一七日の間繼續すべき先例があるのに、僅か一問一答で勝敗を決するのは甚だ本意であるから、充分繼續して出来る丈けの問答を遣り度いと申し出たので、今度は大燈國師の代理として、南禪寺正眼院長者大光國師が出られた。そして其對手として虎聖の高足が現れて「如何なるか是れ禪」と問うた。すると大光國師は先づ彈指一下して「此聲梵天に徹す、爾聽き得るや否や」と答へられたので、直ちに敗北して仕舞つた。それから南都六宗の碩學が、替るゝ出て問答をしたが、皆な負けて仕舞つた。

▲大光國師と虎聖。最後の二十七日に遂に虎聖自身が現はれて、「如何なるか是れ禪」と問ひを發した。大光國師直ちに「箭既に絃を離れて返圍するの勢なし」と答へられた。そこで虎聖和上も「我が宗も亦た是の如し」と遣つた、所が國師は、「的何處にか在る」と云はれた。すると虎聖は「盡大地是れの」と答へたから、今度は國師扇子を擧げて「爾試みに射看よ」と遣られた。やがて虎聖は「中れり」と答へたから、國師は

重ねて扇子を袖にして「爾射看よ」虎聖云く「箭既に盡也」と、國師曰く「吾宗を知らんと欲せば猶ほ白雲萬里を隔つ」虎聖云く「聞くを得べき哉」國師曰く「近前（近寄る）し來らば、爾に向つて道はん」と遣られたので、虎聖が國師の前に近寄た所が虎聖を一踏々倒と蹴倒して仕舞つた。そこで虎聖が忽ち三拜して、即弟子の禮を取り名を宗虎と改めて、遂に法戦が終結した。

▲大死一番の活禪機。已上は大燈、大光兩國師等の活禪機に懸つては、如何なる教相家の達人でも遣つつけられて仕舞ふと云ふ話であるが、強ち兩國師に限らず、大死一番した活きた禪坊主でさへあるならば、憊う云ふ活用は誰れでも遣つて除ける事が出来るのだ。其處が禪家の禪家たる所であるから、死んだ教理や下手理窟を捏ね廻はして居るよりも、大きな網を張つて、活潑々地に飛躍する様に遣らねばならぬ。

四十、船頭の實驗談

霧海餘滴に、漁師が波の話を爲てあつたが、實驗上の話であるから面白く感じた。衲も三十餘年前に、或船頭の實驗談を聽いて感心した事がある。其れはどう云ふ話しかと云ふと、船に乗つて居るには、船と舟子と水波との此三つが一致して居らなければ、航海することが出来ない。若し此三つの中どれ一つ缺いても、調子が狂つて仕舞ふと云ふ話である。船頭は佛法の事を何も識らずに云つたのだが、衲等が眼から船頭の此談を佛法の上に照らし合せて見ると、非常に面白い意味を含んで居る。畢竟船頭が所謂、舟と舟子と水波の一致と云ふことは、佛法で身口意三業の一致と云ふ道理と、全く符合して居るのである。

四十一、唐武帝の僧侶淘汰

昔、唐の武帝の時に、僧侶の淘汰が盛んに行はれた事があつたが、其時にどう云ふ風に淘汰したかと云ふと、僧侶一般の試験をして、之に落第した者は、どし／＼還俗

させたのだ。だから随分立派な禪の知識までが、還俗させられて、或は漁夫となるものもあり、或は船頭となるものもあつた。併し假令還俗させられて、如何なる賤業に身を投じて居つても、晝夜不斷に正念工夫をした知識も澤山あつた。

四十二、漁夫の禪知識

所が或時一人の禪僧が、蝦抄ひを遣つて居る男を見て、何んでも之は普通のもては無、何か謂く因縁のある人間に違ひ無。一つ之を試みて遣らうと思ひ、其漁師が小さい辻堂の中で、破れた襦袢々々の紙子の様なものを着て、ぐう／＼軒をかいて寝て居る所へ、突然、如何なるか、是祖師西來の意と問うた。所が、右の漁師は忽ち刎ね起きて、神前の酒臺碗と答へた。此漁師こそ巖頭と云ふ偉い禪の知識其人であつたのだ。今憍う云ふ話をするのも外ては無。縦令熟睡中であつても、正念工夫が出来て居るから、少しも狼狽へず、判然と答へが出来るので、若し之が普通の凡人であつた

ならば、逆も憍う云ふ事は出来ないのだ。其れに就いても、昔の知識杯と云ふ者は、縦令如何なる境遇に在つても、少しも撓まずに、正念工夫せられたのが分るてはないか。

四十三、龍淵東瀨老師

▲龍淵東瀨老師。筑前博多の聖福寺に居らる、龍淵東瀨老師は、獨園和尚の法嗣であつて、夙に陰徳の聞き高き師家である。だが一寸見ると風采が揚がらない方だから、時にとんでも無い者と間違はれる事がある。何でも今から十三年程前であつたかと思ふが、妙心寺で花園法皇の六百年か何かの御遠諱の大法要が勤まつた時、東瀨和尚も數十名の居士や大姉を連れて上洛した。所が授戒會の、澤山な戒徒共が、庭先へ出懸けて、松の木の根へ小便をたれて居るのを、和尚が見附けて、何とも云はずに黙つて自分が肥桶を其處へ持つて来て、其れが溜ると、他へ明けて来て、亦其處へちやんと据て置いたさうだ。何分風采の揚らぬ和尚の事だから、誰一人和尚と云ふ事を知らずどこの

田舎の乞食坊主が遣つて居るのか知らんと、馬鹿にして居つたさうだ。

▲乞食坊主が紫衣の和尚。所が愈々戒徒へ血脈を授けると云ふ日になつた所が、當日の戒師即ち時の管長無學和尚が澤山な坊主の中から、東瀛和尚を選抜して授戒の證明師に登用した。そこで昨日までは破衣を着て居つた爲に、乞食坊主と間違はれて居つたのが、俄かに紫衣の大和尚となつたものだから、あゝあれが東瀛老師であつたのかと、今更の如く其徳に驚いた事があつたよ。

▲深夜の庭掃除。又同師は曾て、毎夜僧堂の大衆が寝んだ頃を考へて、そつと起き上り、襦袢一枚で、境内の広い庭を掃除せられた事があつた。所が或夜の事にいつもの如く真夜中に獨りて掃除をして居られると、其處へ夜警の巡查が通り合せて、曲者かと思つて誰何した。和尚は平氣な顔で、ずつと其巡查の顔を見ると、其巡查は始終和尚の室へ獨參する立花と云ふ男であつたから、あゝお前は立花か、決して己がこんな事を爲て居つたと云ふことを他の者に云ふ事はならぬよと云はれたさうだが。立花巡查は

老師の身の上を氣遣ひ、どうか法體を輕々しく爲さずに、護法の爲御自愛を祈ると云つて、今後は斷然斯かる深夜の庭掃除杯は、廢められたいと歎願したので、夫れ以來ふつとり止められたさうである。

▲近代稀有の良師家。又聖福寺の本堂や、庫裡僧堂の大修繕をせられた時には、和尚が最先に立つて、雨が降つても雪が降つても、草鞋穿きて托鉢をして歩かれて、どうやらかうやら成就せられたのだ。そして普請の時ばかりでなく、平生でも雲水共と、一所に托鉢に歩かれるのだ。禪定の力と云ひ、持戒の堅固なこと、云ひ、實に近代稀れなる良師家と云ふべきである。

四十四、師家のいろく

八幡圓福寺の伽山和尚の法嗣が、葆林和尚で、其又た葆林和尚の法嗣が、今の見性宗般和尚だ。宗般和尚は中々氣樂な面白い性質で、遊山玩水が好きで、能く旅行する人

だ。鎌倉の宗演和尚は、洪川老師に就いて速成禪を遣つてから、教相學を學んだ、當世の才子肌である。伊豫八幡の禾山和尚も、速成禪を遣つた人だが、教相學にかけては濟家唯一の學者で、教禪共に振り舞はす風がある。興津の清見寺阪上宗詮老師は、越溪禪師の法嗣であつて、中頃伊勢で學校教師をも兼ねて、先生／＼と云はれた事もある人で、中々融通の利く才智に長けた和尚だ。夫から西の宮に潜んで居る南天捧鄧州和尚は機鋒の鋭い師家ではあるが、兎角物事を急ぐ性質があるのには困る。元南禪寺管長であつた勝峯大徹和尚は、八十餘歳の頽齡でありながら、中々しつかりした者だ。此老僧位専門の禪を委しく微細に識つて居る者は他にあるまい。相國の獨園下で最も早く法嗣となつたのは、安藝の佛通寺寛量和尚と、越中國泰寺の雪門和尚とであつた。今の相國寺の管長東岳和尚は、ずつと後に法嗣と成つたのである。そして今の南禪寺管長毒湛和尚は、最初久留米梅林寺の羅山老師に就き、其後美濃に寺を持たれてから、名古屋徳源寺の客僧となつて、齋巖和尚に參究し、夫れから美濃虎山に登

りて、栢樹軒潭海和尚から印可を受けて、法嗣となられたのである。其當時から毒湛で無くて、藥湛であると云はれた程、評判の善い師家だ。毒湛和尚と共に潭海和尚の法嗣となつた、海晏和尚も、中々出來た人であつたが、若死して仕舞つた。

天龍寺管長高木龍淵和尚は、隨分専門も調べてあるし、至つて溫和な人だが、性質と云ふ者は妙な者で、此和尚は蓄財する事が上手で、巨萬の金を溜めたさうだが、偶人に騙されてころりと一萬圓も踏み倒されて仕舞つた事があるさうだ。此龍淵和尚の法嗣が、今の天龍僧堂の師家高木泰嶽和尚で、大衆を養成するところが上手だ。妙心僧堂の師家惠澄和尚は、故虎關老師の法嗣で、大會等の折でも彼さへ居れば上下の間に立つて、寛ならず嚴ならず、毫も衝突するとなく、圓滿に遣つて除ける手腕を持つて居る。而かも其性質は溫和て意志の堅固な和尚だ。南禪僧堂の師家霧海和尚は、雲納時代には評席にあつても、他の者の云ふとを扶る癖があつたが、師家になつてから、がらりと其風が無くなつて、大衆にも至つて受けが好く、立派な師家となつた。建長寺

の菅原時保は、衾の室に居た時分、日々三四度づゝの獨參を缺かした事が無かつた。そして大衆にも至つて人望のあつた人物だから、鎌倉へ行つてからも、講座の時には一山塔頭の寺僧も、悉く出席すると云ふ程に受けが好い。衾が何時死んでも時保が此建仁へ來れば、誰一人異議を唱ふるものが無い。そして彼は枕山の高足であるから、詩を作らせたなら逆も衾等の及ぶ處では無い。只彼の爲に惜むのは、能辯過ぎはせぬかと思へるのだ。師家と云ふものは、餘り口が廻り過ぎるよりも、寧ろ下手で口が重い方が却つて重みがあるのだ。往々時保老師の提唱は、説教見た様で、軽々しく聞える。と云ふ評判があるのは、つまり彼が能辯過るからである。

いま美濃の龍善寺に住職して居る慈穩和尚と云ふのは、其前に丹波の瑞光寺と云ふ曹洞宗の寺に居られた人で、今年六十二歳だ。此和尚は、古風其儘を堅固に護持して居られる。そして何處へ行くにも、屹度草鞋をはいて、破れた麻衣一貫て出懸けられるが、何一品買はれる時でも、袂から封じた儘のお布施を出して、さあ之て何んぼでも

取つて呉れと云ふ風である。又行脚の途次、信者の家へ泊られて、汚れた物を洗濯して上げませうと云はれても、堅く辭退して、翌朝宿の者が起きない先きにちやんと其れを洗濯して仕舞ひ、寢床の蒲團を疊み、座敷を掃除して鐵瓶に湯を沸かし、靜かに坐禪をして夜の明けるのを待つて居られるさうだ。さう云ふ有様だから、宗内の江湖（大會）があると、和尚の徳望を敬慕して、講師に拜請することが屢々あるさうだ。所が此慈穩和尚が或時衾の許へ來られて云はれる様には、宗祖の承陽大師も、此建仁寺の千光祖師に就かれた事もありませんでしたのですから、其緣故で、貴方もどうか曹洞僧のお世話をして下さいと頼み、前後十五六人の洞僧を紹介して寄した。そして何れも二三夏づゝは、此僧堂に居つた。其中でも和尚の直徒慈漂と云ふのは、五六年も此僧堂に居つて、其後石州へ住職したが、今では曹洞で第一流の知識になつて居るさうだ。それから此建仁寺僧堂の首座をして居る鹿兒島耕道は、初め久留米で五六年遣つて居たが、此處へ來る様になつた時に衾に隨つて來たので、それをつまり前後二十年餘

りも骨折つて居るのだけれども、修行はとうに済んで居ても、未だ陰徳を積まなければならぬから容易に印可しないのだ。山内の正傳院や大統院も、耕道同様の古顔だが矢張未だ印可をしない。

其他、美濃深井の僧堂には、大義老師の法嗣洞宗和尚が師家と成つて居り、同じく天澤の僧堂には、矢張大義老師の法嗣熊嶽和尚、當地東福寺僧堂には、九峯和尚、神戸の祥福寺僧堂には、天應和尚、堺の南宗寺には、東海蜻州和尚と云ふ鹽梅で、各地に在りて多少の大衆を育て、居らるゝが、此等の師家の話は、他日又更めて話す事にしよう。

四十五、達磨禪經

達磨禪經と云ふのは、支那の劉宋時代に、印度から渡來した、達磨多羅三藏と云ふ小乗の法師の著述であるが、禪經としてあるから、禪宗の禪師たる達磨大師の著作で

あると誤解する者が多い様である。併し是れは全く誤謬で、其内容は即ち小乗の禪經である。一口に禪と云つても、強ちに大乘計りに限つた譯では無い。そして白隱會下の東嶺和尚が、此達磨禪經に註を加へられてから、益々所謂達磨大師の著述の様に誤解されるに至つたのである。

四十六、大乘と小乗

たとひ達磨禪經は小乗の禪經と云つたとて、敢へて淺劣であるといふ譯では無い。全體大乘は偉いとか、小乗は詰らぬとか、云ふべきものでは無いので、假令小乗家の説いた小乗部の書物でも、之を取扱ふ者が偉ければ、非常に好くなるのである。亦假令大乘部の書物でも、扱ふ者が詰らぬ奴等ならば、小乗よりも劣るのだ。茲が所謂牛の飲む水は乳となり、蛇の飲む水は毒となると云ふ所で、飲まるゝ水其者は毒でもなければ亦た薬でも無いけれども、只之を飲むものゝ如何に由つて、毒ともなり薬とも

なるのである。

四十七、老醫の質問

江州の老醫村池柳軒から、時々種々雑多な質問をして説明を求めて来るが、そんな事は結局徒勞だから、斷然よした方が宜からう。其代り一の公案に就いて骨折るが可いと云うて遣つたが、此頃又態々遣つて来て云ふ様には、説明したとて無効だと毎度申されるに、又してもく、恚うやつてお願ひに出ますのは、實にくどい話でムいませぬが、先般此柳軒が赤痢に罹りました所が、家族残らずに傳染しまして、私も今度は最早助るまいと決心して居ました所が、幸ひに本復しましたので、其祝ひと、もう一つは、私共老夫婦が結婚してから、今年で丁度五十年目になりますので、其金婚式の祝とを致さうと思つて居りますのですが、何に致せ、私が禪の本當の安心が出来ませぬものですから、其れが出来てから、祝賀の式を擧げやうと思つて居ります。本當の

安心が出来ないと、何となく物足らぬ感じが致しまして、そんな事を遣る氣にはなれないのであります。悴は難有い事には、或病院の院長を遣つて居りまして、何不足なく暮らして居りますから、さう云ふ點には別に何にも心配する事が無いせんのですけれども、一番大事なく安心が、充分に出来て居らないでは、大變な事でムいませぬから、どうか是非もう一度、委しい御垂示を願ひ度いと云つて、どうしても歸らうとしない。とうとう四時間餘りもくどくどと云つて居つた。そこで禪は、彼の質問に無關係な、當らず觸らずの語を簡單に書いて遣はした。何な事を書いたかと云ふと、有佛の處を避けて無佛の處をも走過せよと云ふ様な意味だ。そして是非かう云ふ境界に成り切らなければならぬと云つて、色々垂示して遣つた。所が彼はどうやらかうやら安心が出来たと見えて、やれく安心が出来ましたから、これから早速歸宅しまして、快く金婚式を擧げることが出来ますと云つて悦んで歸つて行つたよ。一體彼の隠居は八十近い老人であるが、禪の事になると、丸て無我夢中で、一生懸命に浮き身を

寔して居るのだ。併し、かう年が寄つてからは、中々爲にはなりにくいものである。

四十八、肺病患者の引導

景年畫伯の高弟の梅村景山と云ふ畫家が、近頃納の所へ来て、自分の恩人の或紳商が、肺結核で、須磨の病院へ行つて居るが、最早死の宣告を受けて居るのだから、臨終前には是非納の引導的説法を聴かせて遣つて呉れと頼んで来た。なぜ納の慰問を頼みに来たかと云ふと、稻垣貞次郎と今の病人とが親友であつて、稻垣が死ぬる時、納が慰問して説法をして遣つたのを、本人を始め親族共が非常に喜んだ事があつた。其れを知つて居る者だから、是非来て呉れと云うて来たのだ。餘り頼むことだから、夫れぢや其中暇があつたら行つて遣らうが、全體其男の宗旨は何んだと問うたら、本國寺派の日蓮宗ですけれども、平生至つて宗旨には冷淡で、題目杯唱へた事が無いさうだ。

▲豪商紳士は大嫌ひ。全體豪商紳士とか、爵位でもある奴等程、濟度の仕悪い者は無い。彼等は只金力や権力を振り廻はして、偉さうにするのが、本来の面目である様に思つて居つて、眞實の宗教心杯は、薬にしたくても無いのだ。だから納は富貴の家に行く事は大嫌ひだ。彼等のする事爲す事は、皆な疝癪に觸つて仕様がな。平生坊主が彼等の家へ行くと、何か勸財か無心にも遣つて来たと思つて、留守だとか、病氣だとか云つて、玄關拂ひを喰はして、邪魔物扱ひにする癖に、さあ一朝病氣に罹つて、最早危篤と云ふ場合になると、平生罪惡ばかり造つて居つた事が恐ろしくなつて、藻掻き苦しき、さあ説法を爲て呉れとか、引導を與へて呉れとか云つて、狼狽へ廻るのである。丸て熟柿のやうに腐つた癩病患者の療治を、醫者に頼みに行くのと一般である。だが最早さうなつてからは、どうしても駄目だ。

▲親類共の見せしめ。併し瀕死の病人を飾つて置いて、枕元に付き纏うて居る親戚縁者の奴等を厳しく呵り倒して、道に志す様にするのは、臨終の慰問説法も決して無効

ては無いのだが、柄はさう云ふ場合には、貴様達も今の中に目を覺さない、此瀕死患者の様に狼狽へ廻らねばならぬぞ。何を浮かして居るのだと呵り飛ばして遣るのだ。實際富貴を鼻に懸けて居る奴等には、具體的に死の宣告が下つてから、其鼻柱を打折つて、そして其處の親類共の見せしめにして遣るのが、中々の好方便だよ。

四十九、昔の法階

昔は建仁寺の本山住職と、東堂即ち其前住とは、紫衣を着たものだが、西堂と云つて本山より一等下つた他山の前住は、紫袈裟と紺衣であつた。そして其次が坐元と云つて、南禪寺に龜山法皇が禪居あらせられたので、僧堂へ雑居も如何と思ふ所から、獨居の別室を作り奉つた因縁からして、始めて坐元即ち單寮と云ふものが出来たのだ。此坐元と云ふのは黒衣の袖口に服綸を附けたもので、老師の不在中とか病氣とか云ふ場合に、分座説法と云うて、師家の代りに提唱も爲し、獨參も聴くことが出来る

のだ。さうして首座は通常の黒衣で前堂に居り、坐元は後堂に單居すると云ふ制度である。と云ふ様な鹽梅で、至尊の法皇の御身ですら、坐元として如法に禪居ましますと云ふ有様であつたから、各本山とも大方丈を僧堂として、何時も僧堂常住で、規律も頗る厳正であつた。

五十、腐敗又腐敗

然るに近來に至つては、各山とも山内の如何なる小院でも、冥加金さへ澤山納めたり、或は年功を澤山積みさへすれば、修行の修不修に拘はらず、黄衣も着れば紫衣も着らるゝと云ふ様になつて、東堂も西堂も單に法階の目として残つて居るばかりで、冥加金次第で何な位にでもなられると云ふ、無茶苦茶な時節と成つて仕舞つた。そして其と同時に、本山と云ふ一の法廳が出来て、法廳の役僧等は専門の修行杯は少しも無く、只明けても暮れても、虚儀虚榮に流れて、外界の華美にのみ耽つて居つて、所

謂黒衣素麥の専門修行の僧堂と全く分離する様になつた。そこで法廳の連中は僧堂生活の雲水共を輕蔑して、あれは無頼漢な杯と始終排斥し、終には師弟諸共本山から遠く離れた片田舎へ逐ひ遣ると云ふ風であつたから、本來の禪風が振はなかつたのも無理がなかつたのである。

五十一、僧堂常住

此間も話す通り、禪宗の内部にも色々の弊害があつて、本來の禪風が揚らないのは實に残念の至りであるが、どうか衲は之を矯正して、昔開山達が叢林を開かれた當時の様に、一山全體を擧げて、僧堂常住となし、大方丈も多くの塔頭も、どれもこれも私有視する様な事をさせずに、悉く佛物法物僧物であると云ふ三寶の觀念を以て、規律正しく勵行したいと思つて居る。そして其所謂僧堂常住と云ふのは、どう云ふのかと云ふと、常住とは讀んで字の如く、遊山翫水的の遣り方て無くて、何時も夏中の如

く、年が年中不出門同様で、大衆の養成を専らにして、將來の釋迦を拵へるのに、一生懸命に打ち掛かる事である。若しさう云ふ風に遣る事になれば、圖書館杯も作りて、僧俗共に其根機相應に、教禪の内孰れなりとも研究することが出来る様に、ちやんと機關を提供して置かなければならぬ様になるのだ。一體此建仁寺の千光祖師は、四宗兼學で、孰れも實行せられたのであつたが、祖師の滅後年を経るに隨ひ、段々禪風が振はない様になり、こゝ二百年餘りの間は、殆んど頽廢して居たのだ。だから衲はどうか之を再興したいと思つて、一生懸命で遣つて居るけれども、今の所では何にもかも革新せねばならないので、手が廻はり兼ねると云ふ有様だ。

五十二、五山の連環會

昔から我が臨濟宗で、五山の連環會と云ふものがあつて、毎年一回づゝ順番に五山の師家や大衆が當番僧堂へ群集して、禪の研鑽に骨を折つたのだ。これは實に善い事

であつて、第一、専門の修業に大きな効果があり、又一つには、各山の和衷協同を助ける事となるのだから、是非何とかして之を再興したいと思つて、思案して居る様な譯だ。

五十三、茶 禪 一味

禪僧が茶を遣るのは、決して自分の道樂とするのではない。皆度衆生と云ふ所から割出しての事だ。無學の爺や婆々に向つて禪の正味を露出して話すのは、丁度齒の無い者に堅い餅を喰はすやうなもので、薩張り譯が分からぬから、さう云ふ者を其儘棄て、置くのは可愛さうでならぬ。そこで斯かる根機の者を禪に引入れるために、抹茶でも啜りながら、俗談平語の裡に、禪味を嘗めさせるのである。夫に就いて先達下京小堀袋町の久原の別邸へ茶に招かれたが、其節主人久原が豫ねて祕藏の、軸物が掛けであつた。之は元人南堂清欲禪師が僧の日本に歸るのを送る文で、二百文字程書いてある。文章と云ひ、運筆と云ひ、何んともかとも云へない立派なものである。段々久

原に聞いて見ると、貳千五百圓を投じて先年購つたのださうだ。それを聞いて柄は無量の感に打たれた。維新後、坊さん頭を叩いて見たらと云ふ、俗歌の流行つた時代には、禪僧の書いたもの杯は、二束三文で誰も相手にしなかつたのだ。然るに今ではどうか、禪僧の書いた一幅の掛軸に、貳千圓の參千圓のと云ふ大金を擲つやうになつた。之は畢竟どう云ふ譯かと云ふと、禪の眞味も何にも知らない茶人でも、禪は貴いものであると云ふ觀念から、禪坊主を尊崇する様になつたからだ。柄は日に日に禪風が盛んになるのを見ると、實に嬉しくつて耐まらぬのだ。

五十四、寒 山 拾 得

昔支那天台山國清寺に、寒山拾得と云ふ二人の隱者が居つた。寒山は詩が上手であつた。拾得は詩が下手であつた。此拾得と云ふ名は、子供の時分に拾はれたから、其儘拾得と命名したのである。そして拾得は國清寺の氏神へ毎日供へ物をする役を遣つ

て居た。所が何を供へても、直ぐにそれを下げて喰つて仕舞ふ。或日の事に、其供物を烏が飛んで来て喰つて仕舞つた。拾得之を見て、おのれ氏神奴、眼の前にある供物の番をしながら、烏に喰はすと云ふ事があるか、實に相濟まざる奴だと云つて、神體を取出して打擲した事があつた。普通の者から見ると、狂人だか仙人だか愚人だか賢人だか、何んともかとも名のつけ様のない人物であつた。だから彼がたま／＼詩を作つて随分六ヶ敷事を云うて居る、例せば

井底紅塵生

高山起波浪

石女生石兒

龜毛數寸長

欲覓菩提路

但看此榜樣

と遣つたのがある。どう云ふ事かと云ふと、井戸の底から塵埃がたつて、山から狂瀾怒濤を起し、石女が石兒を産み、元來無い處の龜の毛が、五六寸も長く生えて居るぞ。菩提の路を覓めんとする者は、但此榜樣(手本)を看よと云ふのだ。此味ひは云うて聽かせるぐらゐでは分らぬ。此石餅鐵飯を人々各々が咀嚼して、自分の胃の腑で、消化

させて見よ。さうすれば直ぐ分る。丸呑では駄目だぞ。

五十五、南嶽大師の偈頌

序に南嶽大師の偈頌二首を擧げて見やう。

頓悟心源開寶藏 隱顯靈通現真相 獨行獨坐常魏々 百億化身無數量
縱令逼塞滿虛空 看時不見微塵相 可笑物兮無比況 口吐明珠光晃々
尋常見說不思議 一語標名言下當

其二

天不能蓋地不載 無去無來無障礙 無長無短無青黃 不在中間及内外
超群出衆大虛玄 指物傳心人不會 偈にもある通り、頓に心源を悟つて自己の寶藏を開かねばならぬ。他に漸々に遣る方法があるけれ共、そんな手緩い事では役に立つものでない。寶藏を開くとはどうする

事だ。即ち含藏識を押開くのだ。一念の稱名が即彌陀の光明だと云ふのは、寶藏を開いた所だ。それから獨行獨坐と云つて、唯我獨尊の身だから、連れと云うては一人も無い。だから他の者をあてにしたり、助力を求めたりするやうな、卑屈な心を起してはならぬ。そして遣り切れれば百億無量の化身が現じて來るのだ。然るに迷ひの凡夫は山を見ても河を見ても、家を見ても、何を見ても其見えるのは、滓ばかりであつて、一物として光明土ならざるはなしと云ふ事は、夢にも知らぬのである。寒山拾得が時々大きな口をあけて笑うて居るのは、其處に何んともかとも云ふに言はれぬ嬉しい事があるから、呵々獨笑して居るのだ。そして其口からは、明晃々たる珠玉を吐いて居るのだ。それから第二の偈頌も中々面白いな。其中の群を超え衆を出て、大虛玄とは何んだ。此境界に到ると、もはや佛祖の仲間入りも眞平御斷り、そんなものは先方から仲間入りを申込んで來ても玄關拂ひだ。此處が所謂眞向虛明歷々と云ふ處であつて、此境界は物を指して心を傳へても、凡人には之が分からぬから、丁度寶の山へ登つて空手で

歸るやうなものだ。

五十六、人境俱奪

人境俱奪と云ふのは、所謂迷情の四句は皆な非なりと云ふ様なもので、人法共に空じて仕舞うのである。即ち所縁の境も能縁の心も、全く無みして仕舞つて、眞正の無一物になる事である。之に就て南院和尚と風穴和尚との問答がある。南院和尚問うて曰く「如何なるか是臨濟の人境俱奪」と遣つた。そこで風穴和尚は「足を躡んで進前する事は須らく急々なるべし、鞭を促がして鞅に當つて遅々たること莫れ」と答へた。之は皆な故事に寄せて人境俱奪の義を顯したもので、初の足を躡んで進前するは須らく急々なるべしと云ふは、昔漢の高祖に事へて、戦へば必ず克ち、攻むれば必ず取る云ふ、軍に長じて居つた韓信が、部下の將卒を撫育して三軍に大勢力の有つた所から、おのれ一旗立て、遣らうと思ひ、高祖に對つて云ふやう、どうか自分を假の玉に封

じて下さいと云つた。處が高祖は忽ち怒り、馬鹿ツと胴喝して起ち上らんとする一刹那、其處に居並んでゐた張良や、陳平等は、若しや此際高祖と韓信と隙を生じ、韓信をして怒らしめたならば、さてこそ國家の一大事であると氣遣つたから、それと無く高祖の足を一寸踏んで其意を洩した。流石は漢の高祖だけあつて、其意を覺り、忽ち態度を一變し、馬鹿の一喝を可い意味に轉じ、馬鹿な奴だ。貴様程の功臣でありながら、假の王にして呉れとは意氣地の無い申分だ。何故眞正の王を望まないのかと言ひ放ち、即坐に齊王に封じた。今風穴和尚は、此故事を引き來つて、道に進前する場合には、人境俱に奪つて、驀直に遣らなければならぬと云ふ事を示したのだ。

▲遅々たること勿れ。次に鞭を促して鞅に當つて遅々たること勿れと云ふのも、矢張支那の故事であつて、或將軍が敵と戦ひ、深く敵地に侵入した爲に、遂に敗北し、敵の虜と成つた。そこで將軍思ふやう、斯く虜の身となつては、如何に藻掻いたとて到底駄目であると觀念し、極めて謹慎の態度を装うて、時の到るを待つてゐた。然るに監

禁して居る番兵共は、心を緩して、居眠り半分に番をする様になつた。そこで將軍は其油斷を見すまして、其處に繋いてある馬に跨つて、一鞭高く加へて遁げ延びた。今風穴和尚は其遁げ延びる場合を指したのであつて、馬に鞭當て、遁げ行く際には、愚圖々々して居つては不可ない、眞一文字に前後を顧みずに進まなければならぬ。そこが丁度人境俱奪の有様であると寄顯せられたのである。

▲萬人一塚を作る。それから此人境俱奪と云ふ事を首山和尚は、萬人一塚を作つて時の人盡く悲みを帶ふと遣られた。これは昔俱利迦羅峠の戦とか、八島壇の浦の戦とか、西南役の田原阪とか云ふ様な古戰場へ行つて見ると、澤山の戦死者が一の塚になつて居る。丁度今も其如く、人境俱に空じ去つた場合の消息は、古戰場を弔ふ時、軍人も戦争と云ふ境界も、俱に無くなつて仕舞つて居る様なものだとしされたのだ。

▲何の佛祖かあらん。次に又石門和尚は、人境俱奪と云ふ事を、何の佛祖があらんの一語を以て示された。如何なる意味で然か云はれたのかと云ふと、執着すべき佛や祖師を捨

て、仕舞ふ見識である。丹霞が木佛を焼いたのも即ち此處だ。一休が佛に小便をたれたと云ふのも此處だ。佛祖を佛祖と見ずして、凡夫の迷情から佛祖に執着するのを根本的に排斥するのだ。織田信長が叡山を焼き拂つたのも、或一面から見れば、何んの佛祖かあらんと云つてよい。なぜかと云ふと、其當時の叡山坊主は、佛敎の眞精神を忘れて仕舞、鬼門除けだの何んのと云つて、凶器をたばさみ、宮闕をさへ、騒がし奉つる様になり、叡慮を惱し奉つたのであるから、此等の大弊害を一掃せんが爲に、信長が當時の腐敗佛敎に打撃を與へたものとすれば、彼は佛法を破壊したのではなくて、却つて佛法を護持したものと云つて可い。畢竟如此佛でも祖師でも、間違つた眼から眺めて居るならば、凡て打ち拂つて仕舞うのが所謂人境俱奪である。

▲鷓鴣啼處百花香。次に又南院禪師は風穴和尚に向つて、如何なるか是人境俱奪と問うた。其時風穴和尚は、常に憶ふ江南三月の裡、鷓鴣啼く處百花香し、と遣られた。これはどう云ふ意味かと云ふに、全體人境俱不奪と云ふのは、世界萬物有りとあらゆる

物、何一つとして、之が悪いと云つて取り除くもの、無い所を云ふのだ。天台に所謂一色一香無非中道と云ふ所が即ち此處だ。其處等に置いてある馬の糞でも、皆な悉くありくと光明を放つて居るのだ。此境界に住せば、最早善だの惡だの美だの醜だのと云ふ様な、差別を超越して仕舞うのである。だから風穴和尚は此境界を花咲き、鳥歌ふ、陽春三月の天地を以て示されたのだ。

五十七、收と放

圓悟禪師は、先の人境俱奪を簡單に「收」の一字を以て示されたのに對して、此人境俱不奪の場合には「放」の一字を以て示された。此二文字の遣分けに注意して見るがよ

▲翠巖頌。それから翠巖の眞禪師は、此四料揀を下の如くに頌にして遣つてある。

翠巖頌

五十七、收と放

奪人[○]不[○]奪[○]境[○] 日月自流遷 山河及大地 片雨過[○]蠻[○]天[○]
 奪境[○]不[○]奪[○]人[○] 問禪何處親 相逢不[○]祇[○]揖[○] 曉夜渡[○]關[○]津[○]
 人境[○]兩[○]俱[○]奪[○] 聲鼓墜[○]紅[○]樓[○] 縱橫施[○]巨[○]闕[○] 誰敢立[○]當[○]頭[○]
 人境[○]俱[○]不[○]奪[○] 閻浮轉[○]幾[○]遭[○] 面[○]南[○]看[○]北[○]斗[○] 爭得[○]合[○]伊[○]曹[○]
 眞禪師は慈明和尚の法嗣であるが、其慈明和尚と云ふは、殆ど不眠同様に坐禪に骨を折られた方であつて、睡魔に襲はれると、足に錐を突き立て、一生懸命に禪に凝られた人である。其法嗣が眞禪師であるから、中々偉い和尚である。而して、今其頌の中に奪人不奪境の事を形容して、日月自ら流遷すと云はれてあるが、實に尤もだ。時間と云ふもの程世に恐ろしいものはない。學生が試験が早く來ない様にと望んでも、少しも待つて呉れず、又子の成長する迄待つて呉れると頼んでも、日月は少しも待たぬ。此建仁寺も開山千光祖師以來七百年計りの間に、三百七十九代の住職が死んで居る。なんと日月は恐ろしいものではないか。又京都は桓武天皇以來千百年の星霜を経て居る

が、其間に死んだ人の數は、抑も幾何であつたらうか。然るに京都と云ふ土地は依然として少しも變らない。比叡も愛宕も其儘存して居るではないか。これが即ち奪人不奪境と云ふ所以である。其他奪境不奪人、人境俱奪等は、今の偈頌に就て公案として工夫するがよい。

五十八、臨濟の四料揀

四料揀の事は臨濟録にも委く出て居るが、衲は此四料揀と云ふ事を聞いても實にぞつとするよ。何故かと云ふと、此四つの難關に出逢ひ、何位艱難辛苦を爲たか知れなかつたからの事だ。先づ四料揀の料と云ふは、思量するとして、揀とは揀別と熟字して、辨別することである。して見ると、臨濟は思量分別即ち妄想を揀別したものかと思ふ者もあるけれども、決してそんな妄想では無い。思量分別が悉皆無くなつて仕舞はねば、それこそ馬鹿の骨頂と云ふものだ。臨濟和尚は黄蘗に就いて六十棒を喰つて、五

智中の四智即ち四料揀を悟られたるものであるから、下手な妄想を拈出せらるゝ氣遣ひは無いのだ。

▲古人の四料揀評。は中々能く中つて居る。其一に後人が此四料揀を以て古則と爲すは、却つて臨濟の眞意を軽く見るのである。師は唯石火電光中に向つて、一機一境の事を擧げたもので、何も思量料揀を勞するものではないと云つて居る。又、曇希夷師の贊には、四種料揀を示すは、平地に波を起すのであると云ひ、寧一山は彼の四料揀は已むを得ずして慈を垂れたるの語也と云つて居る。

▲四料揀とは何んぞ。臨濟が、始め河北に小庵を設けて禪居せられた時に、普化禪師と克符和尚の二上座が掛錫して居られた。そして其時二人の者が幾ら問ひを發しても、臨濟は不言沈黙の儘で、唯痛棒を喰はして居るばかりであつた。然るに或る晩の少參の時、示されて云はれる様には「我れ有時は人を奪うて境を奪はず、有時は境を奪うて人を奪はず、有時は人境俱に奪ひ、有時は人境俱に奪はず」と云はれた。是即ち四料

揀であるが、所謂人と云ふのは、先づ心性及び識情等を謂ふのであると云つて差支がない。又境とは山河大地文字言句等を云ふので、奪とは不立の謂である。併し是等は其一分の義を云うたもので、實際の室や堂に於ける消息は、毫も言ふことが出来ない。

五十九、四料揀の略解

或處で首座が臨濟和尚に問ふ様には「如何なるか是奪人不奪境」と聞いた。すると臨濟は「煦日(春の日)發生して地に錦を鋪く、嬰兒髪を垂て白きこと絲の如し」と答へられた。是はどう云ふ意味かと云ふと、初の一句は境を存し、後の一句は人を奪ふたのである。之を喩へて見れば、虎列刺が非常に流行して、一家残らず死に絶えて仕舞つた様なものだ。尤も譬喩一分であつて、臨濟和尚の奪人は、其様ちよる臭いものでは無い。全世界ありとあらゆる物を、皆な悉く奪ひ取つて、無にして仕舞うのだ。次に僧は又「如何なるか是奪境不奪人」と問うた。和尚云く「王令已に行はれて天下

に徧し、將軍塞外に烟塵絶すと遣られた。之は丁度漁師が風波の爲に船を沈没されても、彼等が水練に達して居る者だから、助かる様なものだ。次に僧は如何なるか是人境俱奪と問うた。所が和尚は、「并汾絶信、獨處一方」である。そして之を喩へて見るならば、強盜が這入つて家族を殺し盡して、金品を奪ひ、家に火を放つた様なものだ。それから次に人境俱不奪の事を、「玉寶殿に登れば野老謳歌す」と云はれた。これは丁度 仁徳天皇が高臺に登らせられて、民の疾苦を察し玉ひ、仁政を布かせられたと同じく、知らず識らず帝の則にかなふと云ふ様な場合である。

▲克符上座の頌。そこで克符上座が右の四料揀を充分に研鑽した上で、下の様な頌を作られた。

奪人不奪境

緣自帶諸訛

擬欲求ニ玄旨

思量反責麼

驪珠光燦爛

蟾桂影娑婆

觀面無三回互

還應滯三網羅

▲奪人と奪境。奪人とは自ら思量分別の根絶しをする事だ。たとひ古則公案と雖も、之に

掛つて居つては不可ぬ。即ち妄想の雲を取り拂つて、元の虚明歴々に歸るのだ。奪境不奪人と云ふのは、言も真でなく、禪も畢竟妄である。理も亦真でない。假令如何なる玄妙を會得するも、皆な眼中の塵で、閑葛藤に過ぎないと云ふのである。つまり奪境は悟りを奪ふのだ。彼の金剛經では、天下唯一の學者であると自負して居つた徳山和尚が、遂に其金剛經を焼く様になつた境界が、即ち其處である。

六十、翠巖頌略解

前に擧げた翠巖の四料揀の頌に、鼓を聲して紅樓より墜ち、縦横巨闕を施す、誰か敢て當頭に立つと云つて、人境兩俱奪を顯はしたのに就て、攻め大鼓を鳴らして樓から號令を下し、巨闕即ち槍襖を施したと云ふ場合に見る説もあり。又一説には、三十人も五十人も愛妾を蓄へてゐた或富豪が、官命によりて最愛の美人を納めねばならぬこととなり、其女が役人に連れて行かるゝのを高樓から望み見て、失望落膽の餘り、顛げ

墜ちて死んだと云ふ故事で解釋する説もある。併し此場合では、前記の戦争の場合に爲た方が、會得がよからうと思はれる。

▲南に面つて北斗を見る。次に翠巖が人境俱不奪を顯はすのに、閻浮轉ずること幾遭ぞ、南に面て北斗を見る。争てか伊れが曹らに合ふことを得んと云ふのは、抑も人境俱不奪の境界で、幾多の若辛艱難を嘗め盡し、總ての難關を経て居るから、既にどうてもよいと云ふ境界で、七面倒なことは通り越して済んで仕舞て居るのだ。誠に至眞至樂の境界で、大暇が明いて居るのだから、何を苦んでか奪ふの空ずるのと云ふ事は要らうぞ。隨時隨處に主人公となり、自由自在を得るのだ。そこは丁度白隱和尚が、晝夜二六時中を使ふと云はれた所であつて、晝に一晝夜のみを自由自在に使ふのみならず、五大洲は勿論のこと、南閻浮洲は愚か、須彌山でも指の先きでころころと廻轉することが出来たのだ。東に向つて愛宕山を見、南に向つて比叡山を見ること位は譯が無い。ここを翠巖が、南に面て北斗を見ると云はれたのだ。こんな事を聞かされると、世間のも

のは狂人の沙汰だと想ふかも知れない。いや多少禪門に入つたものでも、堂に入つて未だ室に入らざるものは、容易に解らないだらう。總じて公案の荒繩は解けても、細い金線の解けない者は、うんと氣張つて此人境不俱奪の妙境に到らねばならぬ。

六十一、佛耶信仰の異同

芳賀博士とか云ふ學者が、日本人の佛教を信仰するは、基督教徒が神を信仰する如く尊敬せずして、寧ろ之を馬鹿にして居る。之が例證を擧ぐれば、曰く尻喰へ觀音、曰く知らぬが佛、曰く佛の顔も三度と云ふが如き、又閻魔、達磨、七福神の如き、多くは滑稽の材料として居る、云々と云つたさうだが、一應は如何にも尤もな邊もある様だが、其處が佛基兩教の立脚地が相違して居るところであると思ふ。元來猶太民族の舊約の神は、劇烈なる嫉妬の神様であつたのだから、基督が出て如何に此神を天父だ、エオバだと垂示しても、總ての人類は、辛うじて神の養子即ち義理の子と成ることが出来

ると云ふ鹽梅だから、口では神人一致と云ふが、どうしても糞子根性が免がれない様で、其尊敬中にどうしても隔て心がある様だ。だから基督主義からは、神人合一はどうか知らぬが、神人不二杯と云ふことは、到底云ふ事は出来ない。それで基督信者は神様と云ふものを、人とは根本的に違つて、無上の威力と慈愛を有つて居るものとして、人間では寄り附くことが出来ぬものと心得て居る。

▲凡聖不二生佛一體。然るに佛教の立脚地から云ふと、凡夫も聖者も又佛も衆生もあつたものでは無い。法の本來は佛でも凡夫でも無く、佛戒名、凡夫俗名だ。そんな名目に縛られてたまるものか。尻喰ひ觀音どころか、放屁一發も惠んで遣らぬぞと云ふべき場合があるのだ。又達磨の不識と云ふことは、口では何人も能く云ふが、其の眞味を實地に嘗めたら、成る程知らぬが佛では無いか。佛教は、兎に角何んでもあつさりと執着なく、さら／＼と遣るのだ。

▲平等觀と差別觀。だから如何なる神佛たりとも、悉く己れの眷族として、自身が其の主宰の位を占むる見識が無くてはならぬ。隨時隨所に脚本と舞臺との都合で、種々無量に變じ、無碍自在の融通の利く様な事は、窮屈な耶蘇教では出来ない所作だ。ゴッドや耶蘇を奴隸として、使ひきる事の出来る基督教徒が、何人あるだらうか。芳賀博士の批評は差別を見て平等を看まない傾向があるから、柄は之が補缺として、差別を捨てよと云ふにあらねど、先づ第一に平等を看破して、然る後に差別を應用せよと云ふのだ。然らざれば惡差別觀に陥つて仕舞うぞ。

六十二、豪商の宗教事業

近來豪商共が、教育や、慈善や、宗教事業に喜捨する事に成つたのは、兎に角善事だ。此頃神戸の豪商川崎正藏が、布引の瀧の下へ寺院を建立して居るが、新寺建立は手續が面倒であるからとて、天龍寺の出張所として建立することに爲た。又此間も話した、吳服商白木屋の親類筋になる、至道無難禪師等の木像を安置してあつた東京の

至道庵は、白木屋の先祖が建立したのであつたのだが、維新後に至りて廢寺と成つて居たのを、先般白木屋主人に面會した際、あれを再興してはどうだと勸告した處が、それが動機と成つて、此程之を再建したいから、如何なる設計に爲たら好いかと、納に相談に來たから、いろ／＼と云うて遣つたので、其再建準備に取りかゝつて居るが、實に善い心掛けだ。又大阪の富豪藤田傳三郎は、種々な大事業を遣つて居る丈けあつて、別荘も彼地此地に澤山持つて居るが、今回復た上京荒神口上る府立病院の北に、廣い地所を高崎大阪府知事の世話で購入したとのことであるが、彼が老後の法樂として、其別荘を禪林に喜捨する目的であるさうだ。

昔飛ぶ鳥も落す程の權威を保つて居つたものでも、幾多の歲月を経るに隨つて、其遺蹟が滅却して仕舞うものだが、眞箇の信念より企畫した清淨無垢の宗教事業は、永久に保存せられてあるものであつて、聖徳太子が御建立に成つた、法隆寺や、四天王寺及び八阪の塔坏は、千三百年の末なる今日に至る迄、縦令燒失しても、立派に再建して

保存されてあるのだ。大阪堂島に米相場を創めたと傳へらるゝ、淀屋辰五郎の墓は、何處にあるか分らぬ程で、大阪天王寺附近の曹洞宗珊瑚寺境内に、淀辰の墓ぢや相など云ふ計りて、無縁の墓と成り果てゝあるが、洛西花園妙心寺に、淀辰が一建立を爲て置いた經堂は、今尙儼として保存せられ、淀辰の一建立であると云ふことも、亦不朽である。又七百餘年以前に秀衝父子が建立した、奥州の中尊寺(天台宗)には、八百の清僧に淨寫せしめた、一切藏經が現存してあつて、同寺の金堂等と共に、國寶と成つて居るさうだ。だから少しも野心なく、清淨な信仰上の觀念を以て爲て置いた事は、何時迄も永く繼續する者だから、何んでも宗教上に關しての事業は、勉めて爲て置くが善い。

六十三、殺生に關する質問

此程青森縣弘前市田代町の西村重敏と云ふ人から、書簡をよこして、左の疑問を解決して呉れろと云つて來た。其疑問と云ふのは、大要下の様な事だ。

情ら現界目前の有様を見るに、動植物を通じて、一切の物皆な他の生命を以て自己の生命を保存致しつゝあるものゝ如し。事實果して然る時は、肉食菜食は云ふに及ばず、一滴の水と雖も飲下することは、慈悲の本意上出来難き道理なり。而して一步を進めて之を考ふれば、生物は、生物を食するが故に生あり。然らざれば一日片時も其生を保つこと能はず。是れ則ち宇宙の大法なるが如し。尙更に一步を進めて考ふる時は、宇宙間には絶対に死物と云ふ物は無き様なり。如此思惟し來る時は、朝夕何物を食する場合にも、心中不安なき能はず云々と云ふのだ。つまり殺生と云ふことが可いことであるか、又は斷じて悪い事であるかと云ふ疑問である。

六十四、絶待論と相待論

先づ此殺生の疑問に答へるに當り、一寸斷つて置かねばならぬのは、禪と云ふ立場か

ら云ふと、恁う云ふ疑問に相手になるのは、癩病に膏藥を貼つて遣る様なもので、畢竟駄目な事である。さう云ふ事をするよりも、寧ろ命懸けの根本的治療、即ち荒療治をした方がよいのである。そして夫には齒もたゝぬ様な公案を授けて、白汗一番正念工夫の禪三昧に入らしめなければならぬのだ。併し今は互ひに顔見合せての事でないから、さう云ふ譯にも行かぬから、第二三義に下つて膏藥療治位に止めて置かう。そこで殺生と云ふことは、可い事か悪い事かと論判するに就いて、茲に絶對の見方と相對の見方との二方面がある。先づ其絶對の見方と云ふのは、絶對即ち平等で、此立場から云ふと、一切時一切處に、生もなく、滅もなく、彼も無く、此もなく、凡て一平等であるから、殺すと云ふこともなく、殺されると云ふことも無いのだ。既に一切衆生もとゞ大解脱海であるから、自他と云ふ事も云へず、又一異と云ふことも云へない。然るに其平等無差別なる處に無理に隔てをつけたり、區別を立てるのは、世間の妄想言句文字の差排と云ふものだから、此絶對の見方から行くと、殺生が可いとか、

悪いとか云ふ事も無くなつて仕舞う。なぜなくなるかと云ふと、殺生と不殺生と云ふことが、既に無いからである。

▲絶対と相對。だが此絕對即ち平等と相對とは、彼の起信論家て談ずる、眞如と隨縁の關係で、不即不離だ。即ち水即波、波即水の如きものである。そこで次に相對論即ち差別と云ふ立場から見ると、山川草木國土が歴然差別して居ると同じく、人天鬼畜の區別も一糸亂るゝことなく、差別の相を呈して居る。そして之と同時に、生滅もあれば一異もある。随つて殺生と云ふ事も成立つて来る。それから又殺生と云ふ事に就いても、種々大小輕重の區別が出来て来る。

▲殺生の種々。即ち善心を以て善人を殺し、惡心を以て善人を殺し、善心を以て惡人を殺し、惡心を以て惡人を殺すと云ふ區別がある。そして瑜伽菩薩地經の戒品や、正法念經等の説に依つて見るも、善心を以て惡人を殺すは、惡心を以て蟻子を殺すよりも其罪輕しと云つてあるし、又國家に害するものを殺すは、其罪なしとも云つてある。又

涅槃經の中には、恁う云ふ經説がある。釋尊が金剛不壞の身を得られたのを、一座の大衆が甚深微妙の事であると思ひ、佛は過去世に在りて、如何なる善根を修し給ひてか斯様な金剛不壞の身を得させられたかと問ひ奉つた。すると世尊が答へられる様には我過去世にて國王たりし時、正法を護持し、道ある軍に立ちし故に、此金剛不壞の身を得たりと仰せられた。さあ殺生が善いか惡いかと云ふ事は茲だ。殺生することが必ずしも惡いとも云へないし、又必ずしも善いと許りも云へないのは實に茲である。若し只今釋尊が述べられたやうに、正法を護持し、廣大無邊の慈悲心から現はれて殺生するならば、無論惡でもなんでもない。却つて功德を得るのである。さて如此慈悲心を以て惡人を膺懲し、非道の者を誅戮するのは、姑息の仁、怯弱の心を以て、一人や二人を宥し置いて、其れが爲大亂を醸すに至ると、固より同日の論ではない。實に此邊は心を潜めて翫味せねばならぬ處だ。

▲精神上の問題。要するに、殺生の善惡と云ふことは、殺すとか殺さぬとか云ふ、形の上

の問題ではなくて、殺さんとする精神上の問題である。たとひ手を下ださなくても、其心が惡逆であつたならば、大罪である。又手を下だしても、其れが大慈悲心より現はれ、道の上よりする事であるならば、大善根であると云はねばならぬ。さあ之から二三の例を引いて一層解かる様に話して見やう。

▲高僧と殺生。已上は殺生と云ふ事に就て、佛教の教理上から論じて見たのである。即ち佛教の立場から云ふと、殺生が善いとか、惡いとか云ふことは、形の上の問題ではなくて、殺す殺さぬと云ふ精神上の問題であると云ふ事を述べたのだが、是れから昔の高僧が、殺生と云ふ事に對して、どう云ふ考へを持つて居られたかと云ふ事を、二三の例を擧げて話して見やう。却つて此方が早分りをするかも知れぬ。

六十五、法然上人の殺生觀

先づ淨土宗の宗祖法然上人に就いて述べて見やう。或人が法然上人に對して、肉食

をせずに精進潔齋したならば、往生が出来ますかと尋ねた時に、上人の返答が中々面白い。若し肉食して往生が出来るならば、山猿が一番に往生するのであらう。それぢや、魚肉をどんぐり喰つたならば、成佛が出来ますかと問うた。すると上人復曰はれる様には、魚肉を喰つて成佛が出来るならば、漁師が一番に成佛せねばならぬ筈である。兎に角肉食をするとか肉食をするとか云ふ事は、抑もの末の議論で、唯心一つにあるのだと教誨せられた。又上人が土佐へ流罪せらるゝ途次、泉州大河浦を通られたが、其邊一帶の濱邊が大不漁で非常に困つて居つた。其窮狀を見られて、法然上人どうにかして彼等を助けて遣りたいと思ひ、漁師を集めて云はれるやう。乃公が魚の集つて居る所を教へて遣る程に、浦中の漁船を出すが好い。さる代りには、一網打つ毎に乃公と共に念佛を唱へよと云ひ含められて、愈々船を出して見ると、未曾有の大漁であつた。そこで漁民共一同が困難な生活を免れたので、大いに上人を徳とし歸依する様になつた。今日に至る迄其邊一回が残らず淨土宗であるのは、此因縁からである。是れ

即ち上人が佛教の慈悲心より、殺活興奪を行はれたもので、道心と少しも矛盾するところが無いのである。

▲元政上人亦然り。又深草の元政上人はどうだ。深草から岡崎へ講釋を聴きに行かるゝのに、祇園の遊廓を避けて、態々重箱の周圍を歩く様に、ずつと廻り路して行かれたと云ふ程、行狀正しき律僧でないか。然るに其持律堅固な元政上人が、實母の大病の場合に、毎朝托鉢して歸らるゝ時、活きた鯉を購なつて来て、自ら料理して母御の膳に供へられたと云うてはないか。茲が上人の上人たる所で、佛法の妙味のある所だ。融通が利かずに戒律にへばり付いて居る輩は、宜しく此元政上人の爪の垢でも煎じて飲むが好い。殺生に就いて思ひ煩ふものは、今の法然上人や、元政上人の精神を深く味はつたならば、這般の消息が解せらるゝであらう。

六十六、殺生に關する書簡の解答

殺生に關する衲の意見は、大體已上述べた様な次第だが、質問者西村氏に對しては下の如く簡單に返事した。

(質疑) 動植物を通じ一切の物、皆な他の生命を以て自己の生命を保ちつゝあり。然る時は、肉食菜食乃至一滴の水と雖も飲下するは、慈悲の本意に叶はず云々。宇宙の半面を觀て全體を我が物にせざれば、勘定合うて錢足らざる小理窟多きものに御座候。天地我と同根、萬物我と一體、平素天地と生死を同らし、萬物と去就を共にせざれば、貴氏の云はるゝ如く、一滴の水を飲み、一莖の葉を喫するも、殺生の罪業は免るべからず。

(質疑) 一步を進めて考ふるに、生物を食するが故に生あり。然らざれば一日片時も其生を保つ能はず、是れ則ち宇宙の大法なるが如し云々。

死なしと云へば、生亦あることなし。生ありと云はゞ、死も亦なかるべからず。死なくして生ありと云ふ、此理あることなし。生ありて死なしと見る、之を常見と

云ひ、死ありて生なしと見る、之れを斷見と云ふ。斷常の二見を坐斷せざれば、正智正見を具するを得ず。正智見を具せざれば、貴問の如く、境に對して種々の小疑惑絶えず、小疑は正智見の障碍なり。宜しく一大疑團を凝らされよ。疑團打破する時、始めて正智見、現前せん。這裡に到つて殺活與奪の全權を掌握し、機に臨んで殺し、變に應じて活す。活す時は動植物一々光りを放ち、殺す時は動植物箇々空に歸す。殺活共に慈悲光中の活機用なり。此機用あらば、貴氏の云はる、動植物の共食も亦何んぞ慮るに足らん。

八月十一日

黙

雷

西村重敏様

六十七、人情の機微

昔或所の母親が、最愛の獨り娘を死なしてから、毎日／＼その寺へ墓參りに行つ

て、和尚を相手に、死んだ娘の事ばかり云うて、悲歎の涙に暮れて居た。そこで其和尚は、どうかして諦らめのつく様に、諭してやらうと思ひ、

極樂へ嫁に遣つたと思やすむ

と云ふ上の句を遣つた所が、其母親は下の句を附けて、

思もやすめども思もやすめども

と遣つたさうだ。一寸した話の様だが、人情の機微を能く言ひ現はして居るではないか。

六十八、臨濟禪の特色と悟後の修行

臨濟禪は、丁度荒繩で括つてある人を解く様なもので、それで先づ安心だと思つて、尻を据ゑると間違だ。そんな事では未だ／＼不可ぬ。今度は細い針金で身動きも出来ない様に縛られて居るのだ。其處を其機根其機根で、臨機應變に解くのが、臨濟禪の臨

濟禪たる所である。そこが所謂對機說法である。其括られ加減に依つて、之を解く方法がいろ／＼あるのだ。だから荒繩一重位解けても、決して油斷が出来ないのだ。其所謂細い針金で縛り付けてあると形容するのは、即ち習氣の事である。荒繩を解くと云ふのは、大悟の刹那に根本無明が退治せられたることである。けれども無始以來の無明の薰習力が残つて居つて、容易に除かれない。之が習氣と云ふものであつて、中々微細に取り纏うて居るのである。だから之を細い針金に縛られて居ると云ふのだ。臨濟禪に悟後の修行と云ふことを八釜敷云ふのは、つまり此細い針金の習氣を取り除く事に骨折る事だ。然るに若し禪を遣つても、此悟後の修行と云ふ事に骨折らないと、邪禪に陥り易いのだ。そして荒繩は解き易いが、細い針金は解き憎いと同じく、大死一番して悟道の門に入るのは易いが、悟後の修行は極めて六ヶ敷のだ。だから始めの荒繩を解く段は、悟道の入門と云つて可い。世間を見渡して見ると、悟道の入口を覗いただけで、既に重荷を卸した様な氣になつて、有頂天になるものが鮮くない。茲は充分に求道者が注意を拂はねばならぬ所である。

六十九、凡情退治の方便

臨濟の四料揀に就いて、臨濟より二代目に當る南院の顯禪師が、其弟子の風穴和尚に問うて云はるゝ様には、四料揀は一體何の法を料揀するののかと聞かれた時、風穴は、凡そ語凡情に滯らざれば、即ち聖解に墮す、學者の大病なり。先聖之を哀んで、爲に方便を施す、楔の楔を出すが如し。

と答へられた。凡ての料揀と云ふことは、ものゝ仕分を付けることで、參學するものの根器をよく調べて、東西眞闇がりになつて居るものを、夜が明けた様に爲て遣るのだけれども、餘り凡情から懸け離れると、却つて悟りと云ふことに粘着いて、聖解地獄に墮ちて仕舞う。之がどうも多少學問あるものゝ陥り易い大病である。だから其邊の呼吸を能く計つて、兩方の極端に陥らない様に、其癖を除いて遣らなければならぬ。

而して其癖の除き方に、四通りあるのである。それが即ち四料揀である。

▲楔楔を出す。そこで其の癖を除く爲に、方便を施すのは、丁度楔で以て楔を抜く様なものであると云はれたのだ。楔は六ヶ敷杭を抜かんとするには、杭を打ち込んで杭を抜くものだ。それと同じく、凡情を除かんが爲には、其方便として、凡情を利用するのだ。若しさうしないと、悟りに粘着くからである。此處は實に六ヶ敷處で、なか／＼骨の折れる所だ。荆の刺に刺つた時に、荆の刺を以て抜き取り、酒の二日酔を直すに、再び酒を用ゆる様なものだ。此處の道理を考へずに修養すると、禪の半可通になつて、揚句の果は、野狐禪になつて仕舞うのである。

▲鐵面門の道破。南院和尚は、尙ほ進んで風穴和尚に問はれる様には、奪人不奪境とは、どう云ふものかと聞かれた。すると風穴和尚は、新に紅爐を出づる金彈子、閻黎が鐵面門を破す」と答へられた。其意はどう云ふものかと云ふと、此の奪人不奪境の境界では佛も祖師も、自分の足下にも寄せ付けぬぞと云ふ見地で、丁度火爐を出てたる鐵砲の彈

丸一發、生れつきの鐵面門を打破るのだ。打破すと云ふのは、所謂身心脱落の事だ。

七十、臨濟の三句

或時一人の僧が来て、臨濟慧照禪師に問うて云ふ様には、如何なるか是真佛眞法眞道、乞ふ開示を垂れよと問うた。そこで臨濟和尚は、は、あ此坊主下恨があるなと省て取つたから、何時もならば三十棒を喰はす所であるが、三十棒迄にも及ばないと思はれて、下の如く垂示せられた。

▲佛法道。そこで臨濟和尚の云はれる様には、

佛と云ふは、心の清淨是れなり。法と云ふは心の光明是れなり。道と云ふは、處々無碍淨光是れなり。三即ち一、皆空にして實有なし。眞正の道人の如くんば、念々問斷せず、達磨大師西土より來つて、只是れ箇の惑を受けざる底の人を覓む。後に二祖に遇ひ、一言にして便ち了して、始めて従前虚しく工夫を用ゆることを知れり。

山僧今日の見處佛祖と別ならず。若し第一句中に薦得せば、佛祖の師となるに堪へん。若し第二句中に薦得せば、人天の師と爲るに堪へん。若し第三句の中に薦得せば、自救不了なり。

と答へられた。

▲心の穢れ、外の物は水か石輪で濯へば、垢穢が落ちて清浄になるが、心の穢れは、水や石輪では不可ぬ。無字の公案を拈提するに限る。又心の光明である所の法は、辛苦艱難を遣り通して、愈々練り立てた已上は、何處へ轉しても、汚れると云ふ氣遣ひは無。已上臨濟は心、法、道と三通りに答へて居るが、是れは彼の僧が三段に問うたから三通に答へられた迄で、本來は一つ物だ。而も其心もなく、名もなく、相もなく、悉く空であつて、實と云ふものがないのだ。そして念々間斷せずとあるのは、正念相續を爲すことである。此場合には邪魔が這入らない様に爲なければ、正念相續は覺束ないぞ。邪魔が這入ると全く駄目である。

▲達磨と第二祖。此處にも云うてある通り、達磨は經典も何も持たずに、唯心を當てに梁の國へ遣つて来て、武帝に遇つて濟度しようと思つたが、機縁が合はないで、忽ち去つて少林寺に面壁して居られた。所が、其處へ二祖の慧可大師が來られて、何んとも不安心でたまりませんと問うたから、達磨は、乃ち其の不安心なるものを持つて來いと云はれた。そこで二祖は其心を求むるに遂に不可得なりと答へられたので、達磨は汝既に安心し得たと云はれたのである。

七十一、三句とは何ぞ

先きに云つた臨濟の三句に就いて、第一句と云ふのは、謂はゞ天地未分以前のことで、未だちらつと光りの見えない以前、即ち念頭に何者も浮ばない前に、悟る所の上根を指すのだ。第二句は中根であつて、既に念頭に浮んでは居るが、未だ音聲に發せざる以前である。第一句は佛祖の師であつて、第二句は人天の師である。第三句は下根

の分際であつて、難有い事をして見せたり、又言うて聞かせたりしなければ、合點の出来ない側である。だから此第三句の下根のものを、自救不了と云つて、他の力を借らなければ、救ふことの出来ない徒輩である。

▲第一句の解。そこで臨濟和尚は第一句のことを、

三要印開して朱點穿れ、未だ擬議を容れざるに主賓分る。

と云はれた。そして風穴、道吾、海印等の諸師は、皆夫れく之を説明して居られる。即ち風穴は聲に隨つて喝すと云はれた。之は正しく第一句の事を指されたのであるが之を受取るもの、如何によつて、第二句とも第三句ともなる。次に道吾の眞禪師は、直下雲際を衝く東山往來を絶すと遣られ。海印の信和尚は、二王忿怒すと云はれ、雲峰の悅禪師は、手を垂るれば膝を過ぐと云はれた。斯く云はれたのは、要するに色々の譬喩や因縁を以て、佛祖の師と云ふべき第一句の境界を説き示したのである。

▲第二句の解。次に又其の僧が如何なるか是第二句と問うた、其れに對して臨濟禪師の

答へらるゝ様には、

「妙解豈に無著の間を容れんや、謳和争か截流の機を負はん」と

云はれた。其妙解と云ふは、言詮不及の義で、不思議の解會である。そして此妙解と云ふのは、文殊の根本智を指したので、即ち此答には、文殊と無著との問答の故事があるのだ。之に就いて古人が色々の説をして居られるが、今は此二解を擧げて、其因縁を話さうと思ふ。

▲文殊と無著。昔無著と云ふ禪僧があつて、或時支那の五臺山に入り、文殊菩薩に見え

やうと思ひ、金剛窟前に坐し、香を炷し、禮を作し、瞑目して居つた。所が暫くにして牛を叱かる聲を聞いたので、遽かに眸を開いて見ると、身窄しい一人の翁が、牛を牽いて溪に臨み、牛に折角水を飲ませて居つた。無著は如何なる人間とも知らず、一禮して見守つて居たが、老翁の方から口を開き、爾何んの爲に此處へ來たと其來意を尋ねたから、實はかくくの次第で、文殊大士にお目に懸らうと思つて遣つて來まし

たと答へた。すると翁は大士は未だ見ることが出来ないが、併し爾は喫飯の前であるかどうかと尋ねたから、いゝ未だ飯を喰ひませんと答へた。然らば己れが今牛を牽いて歸るのに随つて來るがよいと云つて、無著を連れて或寺の中へ這入つた。寺へ這入るや否や、均提と人の名を呼ぶと、其聲に應じて一人の童子が出迎に來た。そこで翁は無著を伴ひ、堂に昇つて坐せしめた。無著がつくく〜と堂宇の中を見廻すと、どこもかも金壁の莊嚴で飾られて、凡て善美を盡してゐる。暫し其美觀に見惚れて居ると、童子が俄に玻璃の盞を舉げて、酥酪とも謂つべき美味な酒を饗應して呉れた。周圍の光景と云ひ、慇懃なる款待と云ひ、餘り意外なるに、心氣恍惚として夢の如き心地となつた。所が翁は進んで云ふ様には、一體爾は何處から來たのであるかと問うたから、南方より参りましたと答へる。それぢや南方では佛法を如何に住持するかと翁は聞くそれに對して無著は、末法の比丘は少しく戒律を奉ずと答へた。すると翁は、又其比丘はどれ程あるかと尋ねたから、無著は或は三百或は五百と答へた。

そこで今度は無著の方から、其老翁に向つて、此間の佛法如何に住持すと問ひかけた。すると老翁は龍蛇混雜凡聖同居と答へた。そこで無著は再び衆幾何と問うた所が翁は前三三後三三と答へた。此の如く問答して居ると、應て日暮になつたから、どうか一泊させて貰ひ度と無著が申出てたが、翁はいつか承知して呉れない。無著は益々翁が慕はしくなつて來て、戀々として去るに忍びなかつた。愚圖々々其處に停つて居た。所か翁は遂に童子に命じて、無著を門外へ連れ出さしめた。さうなればなる程無著には翁が慕はしくなつて、且つ其所作が不審になり、そつと童子に向つて、是は一體何んと云ふ寺であるかと問うた所が、童子は般若寺であると答へた。そこで無著が情々思ふやう、さては彼の老翁は文殊であるに違ひない、又と遇ふべき機會もあるまいと思ひ、童子の足を拜して云ふ様には、願はくはもう一言なりとも聞いて別れたいと述べた。すると其童子は、直に身を隠し、朗かに歌うて曰く、
面上に瞋無ければ供養具り、口裡に瞋無ければ妙香を吐く。心内に瞋無ければ是れ

珍寶なり。無垢無染なる、即ち眞常なり。

と。因つて無著は再び錫を五臺山に駐め、度々文殊と念悟したと云ふことだ。

▲問答の價值。今此文殊と無著の問答を見るに、無著のは平々凡々であるが、文殊のは、流石に非凡である。だから文殊の答へた「前三三後三三」と云ふのは、今も公案として骨折らして居る所である。抑も無著が文殊に遇ひたいと云つて五臺山へ登つたと云ふのは、吾が邦で云ふと、昔學僧が叡山に登つて、高德に就いて修業した様なものだ。文殊は三世諸佛も之より出現する佛母であるから、其答辯が各別なものも尤もである。

▲諸師の第二句觀。風穴和尚は、此第二句を解して、未だ口を開かざる前に錯まれりと云はれ。道吾和尚は、面前渠れを見ず、背後冤苦と稱すと云ひ、海印和尚は、衲僧も措くこと罔しと云ひ、雲峰和尚は、萬里峴州と云はれた。

▲第三句に就て。次に第三句だが、また如何なるか是れ第三句と問うた所が、臨濟和尚は

直ちに「棚頭に傀儡を弄することを看取せよ、抽牽元是れ裡頭の人」と云れた。棚頭と云ふは、舞臺のことで、彼の忠臣藏の人形芝居を観るがよい。老人が杖をついて舞臺へ出てくると、之に續いて又浪人の武士が現れる。是れ與市兵衛と定九郎とである。

そして此與市兵衛も定九郎も共に裡面に隠れて居る主人公即ち人形遣ひの爲に操られて居るのだ。今臨濟和尚が棚頭に傀儡を弄するを看取せよと云はれたのは、即ち此處の事である。凡て凡人と云ふ奴は皆な第六識の爲に操られて、自由自在に翻弄せられて居るのだ。だから此操つて居る處の正體が、確かに見届ける事が出来たなら、

▲三世諸佛の根元。が分るのだ。三世諸佛と云うても外にあるのではない。つまり凡夫を取つて廻はす第六識と云ふ人形遣ひの正體を見届けたならば、そこで始めて三世諸佛が出て來るのだ。て此臨濟の語に對して諸佛はどう考へて居らるかと云ふに、

▲樂屋を看破す。風穴は明破すれば、則ち堪へずと云はれた。これは其所謂操人形の樂屋を看破した處である。又道吾和尚は、頭上一堆の塵脚下三尺の土と云はれた。之はど

う云ふ意味かと云ふと、第一句や第二句よりも、此第三句が本来一番難關であつて、塵芥や泥土の中に塗れて、灰頭土面て以て遣つて除けねばならぬと云ふ事だ。之は餘程悟後の修行の充分圓熟した者でなければ出来ない藝だから、禪も此處まで骨を折らねば、逆も物にはならない。灰頭土面て泥まふれに成つて精進工夫をしたならば、屹度起てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は百合の花と云ふ様に、實に眞善美を盡した心の境界になられるのである。

七十二、佛鑑禪師の偈頌

佛鑑禪師が彼の四料揀に對しての偈頌があるから、之を云うて見やう。師は、五祖の會下であつた。名は惠勲と云うたのである。

甕頭酒熟人皆醉 林上烟濃花正紅 夜半無燈香閣靜 鞦韆垂在月明中
此頃の綠蔭中毛虫が澤山居るとのみ見るか、否自然らずだ、現に櫻花も爛漫と咲き亂

れ、都踊りも最中であるぞ。櫻花ももの言ふぞ。花見に来て花を脊にして飲食する奴を花が眺めたら、馬鹿奴と云ふぞ。瓢箪も重箱も破壊して焼いて仕舞ふと、花が怒つて居るぞ。

鸞逢春暖歌聲滑 人遇時平笑臉開 幾片落花隨水去 一聲長笛出雲來
人は時の平なるに遇うと、必らず何時の世でも驕奢に流れるもので、奢る平家は久しからずであるから、何人たりとも泰平無事の時には、治に居て亂を忘れずで、如何なる變動が不意に生じ來るとも、其戒嚴準備をちやんと爲て置かねばならぬ。況して臨濟の兒孫たる者に於てをやだ。

堂々意氣走雷霆 凜々威風掬霜雪 將軍令下斬荆蠻 神劍一揮千里血
臨濟と云ふ將軍が、一たび令を下だし、神劍一揮して荆蠻を斬れば、千里悉く血だ。血流れて杵を漂はす程に遣るので。即ち人を殺さば、須らく血を見るべしと云ふの、最も甚だしきものだ。此人境兩俱奪を實踐躬行するには、逆も題目や稱名念佛位で

遣るものでないぞ。臨濟計りて無く、徳山や雲門も、三十棒で、一番初めから憊う云ふ風に遣つけるのだ。

聖朝天子坐明堂 四海生靈盡安枕 風流年少倒金樽 滿院桃花紅似錦
此處の場合に至つては、極々泰平で、花見遊山酒茶好物で、歡喜踊躍して居る様なのだ。徳川に於ける元祿時代の様なもので、至極寛かな境界だ。

總 頌

千溪萬壑歸滄海 四塞八蠻朝帝都 凡聖從來無二路 莫將狂見逐多途
已上の偈頌は、中々可い事は可いが、之に就いて一寸注意して置かねばならぬ。昔はこんな偈頌を遣つた位で済んだが、今は連もこんなものでは通れぬぞ。矢張公案を充分に遣るが好い。假令如何に巧妙なる偈頌を作つたとて、畢竟是閑葛藤、即ち邪魔物の徒事だから、夫れよりは、各自夫自身が正念工夫して練出すのが一番大切である。

七十三、無學和尚の僧侶訓

無學和尚は流石に偉い者だ。納等に、僧たるものは、女と肉食さへ爲なければ、其一分か立つから、是非それだけ堅固に遣つて呉れと云はれた。人は兎角世間普通の常道が却つて六ヶ敷ものである。平生無事。底に正念相續するのだ。「常の道おぼる月夜に迷ふなよ」と云ふ句があるが、面白いな、又「春有二百花 秋有月 夏有涼風 冬有雪、若閑事無掛ニ心頭 便是人間好時節」と云ふのは、中々面白いやらないか。

七十四、昔の知識

昔の知識はいろいろな遣り方を爲たもので、睦州の陳尋宿は、龍興寺と云ふ寺に迹を晦まして居た人だが、平常草履を作つて途上に置いたものであるから、陳蒲鞋と綽

名されたさうだ。そして此人は僧侶が遣つて來るのを見ると、いきなり現成公案汝に三十棒をゆるすと遣ッ付けたさうだ。又汾州の無業禪師は、學僧が遣つて來て問答をしかけると、常に莫忘想と云つたものださうだ。夫れから、又馬祖の法嗣であつた池州魯祖山の寶雲禪師は、學僧が門へ這入つて來るのを見ると、直ぐ身を轉じて面壁したものださうだ。恁う云ふ遣り方は、全體どう云ふ意味かと云ふと、學道者が其宗旨を失はない様に遣らねばならぬと云ふ事を示したものだ。

七十五、五種の縁

昔潁山和尚が、仰山禪師に向つて、法幢を建て宗旨を立するには、五種の縁が備つて始めて成就する者だと謂はれた事がある。五種の縁と云ふのは、外護の縁、檀越の縁、衲子の縁、土地の縁及び道の縁との五である。然らば此建仁寺は此五種の縁が備つて居るかどうかと云ふに、最初衲が來た時分には、僧堂もなく、外護者もなく、無

檀同様であつた。それが今では外護も檀越も有り過ぎる程出來て、居士大姉も何時も百人ばかりは集つて來る。それから土地の縁はと云ふと、一方から見ると、祇園町に接近して居るから、初門の者には餘り感心しない點が無いが、又一方から見ると、最も便利の善い有縁の土地でもあり、且禪宗日本最初の道場でもあるから、土地の縁も備つて居ると云はねばならぬ。又道の縁はどうかと云ふと、衲は卓州隱山の兩方の系統を繼承したのであるから、悟道の兩刀遣ひと云つて善い。即ち卓州派の氣の附かない處も研究して居るし、亦隱山派の足らぬ所も調べて居るから、衲の遣り方は一舉兩得の道の縁があるのだ。と云つたら衲が自慢をするのだと思ふ者があるかも知らぬが、自慢でも何んでも無い、眞面目にさう思つて居るのだ。實際衲は雲水時代の頃から今日に至る迄、衲程道に忠なる者はないと自ら信じて居る。道の事となると、行住坐臥寸時も等閑にすることが出來ないのだ。だから今の師家や雲水共の遣り方を衲の眼から見ると、不熱心に見えて仕方が無い。衲は他の師家の二三人前働いて居る

から、少しの寸暇も無いのだ。

七十六、布袋歌と一軀佛

此間布袋和尚の無所住歌を話したが、和尚自ら布袋歌と一軀佛歌とを作つて置かれたのがあるから、云うて見よう。

我有一布袋	虚空無罣礙	展開遍十方	入時觀自在	吾有三寶堂
裡空無色相	不高亦不低	無遮亦無障	學者體不如	來者難得樣
智慧解安禪	千中無一匠	四門四果生	十方盡供養	
吾有一軀佛	世人皆不識	不塑亦不裝	不彫亦不刻	無一滴灰泥
人畫畫不成	賊偷々不得	體相本自然	清淨非拂拭	雖然是弋軀
分身百千億				

▲我れとは誰ぞ。「我に一布袋あり」と云はるゝ我とは誰のことだ。即ち人々箇々のこと

だ。百人居れば百の布袋があり、百千億の布袋が居ても、少しも罣礙無く十方法界に充滿して居るのだ。そこでこれを「佛身法界に充滿して、普く一切群生の前に現す。縁に隨ひ感に赴いて、周からざる靡し。而して常に此菩提座に處す」と云うてある。恁う云ふことは誰でも能く云ふけれども、之を自得せねば駄目だ。「吾に三寶堂あり、裏空じて色相無し」と云ふのは、一體、三寶及び堂とは形容を云うたもので、其次に「不高亦不低等とは奇麗に云うた迄であつて、畢竟中道實相を云うたのだ。「無遮」とはがら明きのことであるから、がらりとして居ることだ。「學者體すれども如かず」とは、須らく十二時中無理會の處に向つて、究め來り、究め去り、無駄骨を折るのが好いのだ。「智慧安禪を解す」とは、無分別に遣るのだ。「千中一匠無し」とは、昔から禪坊主と蛙の子と云うて、百疋の中に一疋丈けしか間に合はぬものとしてある。夫故坐禪は最期まで遣らなければ何にもならない。「四門四果生ず」とは、四方に門があつて其中に三寶堂がある、そしてどの一門より這入つても淨樂我常だ。さうなれば「十

方盡く供養す」と云ふ様に、佛に供養される様になるのだ。佛の機嫌をとる様な事は駄目だ。そんな事では佛の方から、拙い／＼と笑はるゝぞ。向うばかり輝いて、こちらは眞闇りては、薩張りいけない。我手許から光明を輝かさねばならぬ。

七十七、吾に一軀の佛あり

次に同じく布袋和尚の歌に、「吾に一軀の佛あり」と云ふのは、人々各々が佛であると云ふ事を云ふのだ。然るにやれ清水の観音だ、やれ伏見の稻荷だと、兎角佛を向うに置いて、機嫌を取ると計りに苦心して居るのは、畢竟吾に一軀の佛あることを忘れて居るからだ。自分々に立派な佛を持つて居ることを識らないで、外に計り狼狽へ廻はつて穿鑿して居るのは、馬鹿の骨頂と云ふべしだ。

▲不塑亦不裝。と云うて、佛師の作つたものでもなく、又佛畫師の描いたものでもない。木で作つたり、紙に描いたものは、如何に靈佛であると云うても、泥坊に偷れること

もあれば、火に焼けることもあるが、吾／＼が持つて居る佛は、偷むことも出来ず、火に焼けることもないのだ。そして體相本自然と云うて、圓く長く何んとも云へぬ程都合好く出来て居て、僅か一軀の佛であるけれども、分身は無量無邊である。

七十八、善慧大士の法身偈

中々面白いな。

空手把鋤頭 步行騎水牛 人從橋上過 橋流水不流

此句は一寸合點することが出来ても、之を實驗して見ないと、薩張り面白く無からうが、實驗すればする程、妙味が出て来るのである。

七十九、默雷老漢の懷舊談

▲托鉢の懷舊談。

納が若い時分に、妙心寺の越溪和尚の會下で雲水を遣つて居つたが、托

鉢に出る場合には、各々其區域がちやんと極つて居つて、各自の領分が定められて居つた。所が其時分に室町頭の味噌屋で丹茂と云ふ家があつたが、其處の婆さんは、有名な佛教信者で、そして中々の陰徳家であつたから、雲水が托鉢に行くとき、息子や店の者等の手前があるから、表面を繕らうて、右の手で一厘錢丈けを施し、家の者に見附からぬ様にそつと左の手で錢を握られる丈け握つて施したものだ。吾々雲水共は、此貴い陰徳家の婆さんの手から貴いお金を貰ふのが、嬉れしくて耐まらないものだから、區域も領分もあつたものではない。誰も彼も抜け駄の功名をやらうと思つて、第一番に丹茂へ駆け附けて先陣を争つたものだ。其れだから丹茂の婆さんくくくと云つて、雲水仲間では中々の評判者であつた。そして其家は今も相變らず榮えて居るさうだ。又其時分には、四條の紅平も善く施したもので、雲水連の好評を博したものだ。それから又大丸とか何んとか云ふ様な大きな店になると、其所の精進日には、必ず雲水の點心(晝飯の饗應)を招待したものだ。衲も今は乞食の親方だが、これは乞食の

乾分時代の懷舊談だよ。

▲上士中士下士。禪では上士は仇に法を嗣ぎ、中士は怨に法を嗣ぎ、下士は勢に法を嗣ぐと云ふことを云ふが、衲が雲水時代に、自坊の師匠から電報が来て、師匠が重病に罹つて、お前に遺言を仕度いと云ふから、直ぐ歸れと云つて来たから、其足で歸つて見ると、師匠は病氣でも何でもなく、唯衲を自坊に置いて寺を相續させたいと云ふ策略であつたので、己はそんな事は以ての外のことだ、充分修行の功を積まないで、法を嗣ぐのは嫌だと斷然辭退して、再び僧堂へ飛んで歸つた事があるよ。

八十、臨濟の打爺

禪の専門語を門外漢が一寸聞くと、禪宗程破壊主義な、破倫不徳な者はあるまいと誤解するかも知れないが、禪を知らないものには無理も無い事だ。折々さう云ふ批評を耳にする事だが、禪では臨濟打爺の拳と云うて、恩師である所の黄檗禪師を弟子の臨

濟和尚が、其横面を拳骨で殴つた事がある。之は抑もどう云ふ譯であらうか、一寸素人が聞くと、丸て無茶苦茶な遣方で、此上も無い破倫不道德の様であるが、併し臨濟の打爺と云ふ事には、云ふべからざる言外の妙味のある事で、世間で目撃する様な、子が親を殴つたり、弟子が師匠を打つたりするのは、ころりと變つた意味のある事だ。それであるから臨濟の打爺は、不遜不孝ではなくて、最大謙遜最大孝行であるのだ。夫を知らずに、一口に禪は破壊主義だとか、破倫不法の教であるとか謂つて貶したり、或は下手に禪を眞似して無茶苦茶な行ひをするのは、全く眞の禪を了解しないからだ。

八十一、親の頭と酒徳利

昔放蕩息子があつて、晝夜酒色にのみ耽り、親に不孝のあり丈けを遣つてゐたが、或晩深更に及んで我が家へ歸り、暗がりの所を手探りにして、自分の部屋へ行かうした所が、足元に寝て居つた父親の頭を蹴飛ばしたので、放蕩息子は丁寧都合掌して通り過

ぎた。そこで翌朝父親が息子を呼んで云ふ様には、之迄貴様程不孝のものは無いと思つてゐたが、夜前乃公の頭を推し戴いて拜んで行つたのには感心した。貴様もどうやら改心が出来たと見えると喜びながら話した。所が息子は怪訝な顔をして、そんなら夜前私が蹴つたのは親仁さんの頭であつたのか、俺はそんな事とは知らず、大事な大事な酒徳利を蹴倒したのだと思つて、之は勿體ない事をした、誠に不調法な事をしたと拜んだのが、さては藥罐頭であつたのか、馬鹿々々しい事をしたわいと、後悔したと云ふ話があるが、どうだらう、此放蕩息子が酒徳利を合掌禮拜したのと、臨濟和尚の打爺の拳とは、どちらが倫理道德に契つた行ひであらうか、能くまあ一つ考へて貰ひ度いものだ。なんぼなんでも之を同日に論ぜられては、耐つた話ではない。所が多少禪通を以て自負してゐる輩でも、往々此點に就いて誤解を生じ易いのだ。

八十二、臨濟の宗名

禪とは、臨濟、雲門、曹洞、潯仰、法眼の五家と云つて居るが、其五家中臨濟宗は大いに諸家に超出して居るからして、古徳は臨濟宗は達磨の骨髓、諸家の眼目なりと云うて居る。そして臨濟といふ宗名は、地名に依つて名を得たもので、元寺の院號であつたのだ。即ち臨濟和尚が黄檗の希運禪師から印可を受けて、河北鎮州城の東南隅なる、潯沱河の畔りの小院に住持して居られたのだ。眞の大徳と云ふものは、白隠和尚ばかりでなく、多くは小寺に居つて、眞箇の光明を放たれるものだが、臨濟和尚も即ち其一人である。

八十三、臨濟和尚の傳

▲少壯時代の禪師。臨濟禪師は諱を義玄と云うて、曹州南華の人で、俗姓は邢氏である。幼少の時分からして穎異であつたが、成長せられてから、孝行を以て其名廣く四隣に聞えた。凡て大業を成すものは、必ず親に孝行を盡すものであると云ふ事が、禪師の場合

でも分かるではないか。其後落髮出家せられて、諸有經論を博く研究し、精しく戒律を修めて居られたが、或時倩ら考へられる様には、是は濟世の醫方にして、教外別傳の奥旨にあらざると。忽ち禪衣に更めて行脚に出懸け、洪州黄檗山大安寺の希運禪師の禪林に入つて、三年間黙つて坐禪ばかり爲て居られた。

▲黄檗へ獨參。叢林の首座が和尚を將來の俊傑であると目星を附けたから、和尚を勸めて黄檗に獨參せしめた。首座から色々獨參の勝手を教へて貰つて、始めて黄檗禪師に參じ、如何なるか是佛法の大意と問ひかけると、黄檗はいきなり痛棒を加へた。そこで臨濟和尚は叢林へ歸つて右の首座に其始末を話すと、首座は再び勸めて師の室へ遣つた。所が復た同じ様な結果であつた。傳記には恚う遣つて三度行つて三度ながら痛棒を喰はされたと云うてあるが、強ち三度に限つた譯ではなくて、幾度も痛棒を喰つたのである。そこで義玄禪師即ち臨濟和尚、熟々考へられる様には、最初行脚に出懸ける時には、佛教の學問は藥の能書であつて、一切藏經は、皆な藥の處方に過

ぎないものである。一生此薬方にのみ附け廻はされてゐるのは残念である。畢竟佛法は解脱が根本であるから、須らく解脱をせねばならぬと大決心を發して、黄檗の僧堂に此三年の間掛錫して居たが、結局痛棒を受けた丈けて何んの垂示をも受けず、薩張り方角が附かない様になつて仕舞つた。寧ろ此際他の禪林に行つて見るに若かずと思ひ立ち、其由を希運禪師に話した所が、師匠の云はれる様には、落着く先きは決して他に行くな。必ず高安縣の大愚禪師の室に行けと命ぜられた。

▲大愚禪師と臨濟。そこで臨濟は早速大愚山に登つて、和尚に相見した所が、大愚は「汝は全體何處から來た」、「ハイ黄檗から來ました」、「黄檗は汝に何んと云つた」、「ハイ何んにも言はず、唯幾度となく痛棒を加へられた迄で、誠に無理な事ばかりする和尚であります。ですから實は其れを怨んで出懸けた様な次第であります」と有體に臨濟が語るのを聞いて、大愚和尚は再び言を更め「あ、黄檗は老婆親切なものだなあ」と深く嘆賞して居られたが、其れと同時に忽ち臨濟が大悟した様子が分つたから、直

ぐ「黄檗の佛法は如何」と問はれた。すると臨濟は「黄檗の佛法多子なし」と答へた。大愚和尚益々氣に入つたが、尙之を試みやうと思ひ、臨濟の身體を抱へた所が、臨濟は大愚の脇腹を拳骨で突いた。そこで大愚は之で確かに徹底して居る、もう大丈夫だと思つて取つたから、そんな事は顔にも出さず、「汝何をするのだ、そんな生意氣な奴は暫くも此處に置く事は相成らぬ、さつさと出て行け」と即刻退去を命じた。すると臨濟も自ら大いに得る處があつたのを喜び、さあ嬉しくて耐らぬ。之全く希運老師のお蔭であると思つて見ると、矢も鐵砲もたまらない。早速其足で再び黄檗として來た。

▲臨濟と黄檗。そこで黄檗は臨濟和尚に對つて、何しに戻つたのかと、そしらぬ顔で問ふ事は問ふたが、心の中では大悟徹底して居ると云ふ事を知つてゐたのである。すると臨濟は、大愚の許であつた、一伍一什の話をした處が、黄檗は表では、大愚め、お饒舌りの老婆禪を遣りくさつたなあ、おのれ小癩な奴だ、今に見ろ今度こゝへ來よつ

たら、痛棒を喰はさにや置かぬと云ふのを聞くや否なや、臨濟は飛び上り、痛打するなら大愚の來たるを待たないと云つて、いきなり黄檗の横面を打つたので、黄檗の喜びは實に云はん方なく、この風顛漢何をさらすぞ、虎の鬚を採ると危いぞと遣られたのだ。

▲悟後の修行。茲に於て臨濟は悟後の修行に骨を折つて居たが、或夏中に黄檗が看經をして居る所へ遣つて來て、私はこれから歸りますと云ふから、黄檗は何處へ行くぞと問はれた。所が臨濟は、是河南にあらずんば、便ち河北に歸らんと答へて、黄檗を打つ叩いた。是即ち臨濟打爺の拳と云ふのであつて、臨濟が答へられた言の意味は、畢竟去來と云ふ事が無いから、どこへ行くにも行く所が無いではないかとの意である。

▲禪板を焼かんとす。そこで黄檗は大いに安心し、之ならもう大丈夫だと思ひ、百丈から傳り來つた禪板を傳へて傳法の證據とした。然るに臨濟は之を見て慙んなものが何んになるものか、焼いて仕舞へと叫ばれた。禪板を傳へると云ふ事は、今て云ふならば、印

可狀である。それを焼いて仕舞うと云ふのである。一休和尚も師匠から印可狀を贈つて來た時に、こんな物が何んの役に立つものかと云つて、之を火中に投ぜられたと云ふ事があるが、それかと云つて、強ちに傳法の贈物を誰も彼も輕んじて仕舞うのは可くない。其後此消息を滄山和尚が仰山に問はれた時に、仰山和尚の云はれる様には、恩を知つて其恩に報ゆと答へられた事である。

▲禪師の入寂。それから臨濟は黄檗を去つて河北に小庵を立て、禪居せられたが、唐の十八世懿宗咸通八年丁亥、即ち吾邦の清和帝貞觀九年正月十日、端坐して法嗣三聖院の住慧然と問答を爲し、我法とする正法眼藏は如何に爲るやと問はれた時に、二十四人の法嗣中の尊宿慧然和尚が一喝を遣られたので、安心して入寂せられた。勅して慧照禪師と諡せられた。そして或説には、四月十日に入寂せられたと云ふけれども、矢張り正月十日の方が正しいのである。

八十四、廁で大悟

昔大慧禪師の居士で、宋人張九成と云う翰林の大博士があつたが、此居士の爲に或動機から大慧禪師は十七年間も流罪に遇つた事があつた。そして其張九成と云ふ居士は、彼は、彼は大慧から授つた公案を拈提しつゝ、正念工夫しながら、或時雪隠に這入つてうんと氣張つて大きな糞を垂れると、糞壺の中に大きな墓がゐたが、其上に糞があたつて、どすんと云ふ音がした。蛙がそれに驚いてぐうと鳴いた。居士は其聲を聞くと共に大悟したと云ふ事だ。同じ悟るのでも撃竹の聲を聞いたとか云ふと奇麗であるが、糞を垂れてどすん、ぐうと悟つたと云ふのは、如何にも汚いな。然し其悟りに至つたとは一であるのだ。犬のわん／＼猫のにやん／＼、糞蟲の蠢々にも何んの變りがあるものか。

八十五、仙婁和尚の牧童畫賛

其處に掛けてあるのは、仙婁和尚の自書自賛の牧童吹笛だが、あの牛の姿が妙てないか。而して又賛が面白い。「うなひ子のかへるやいづこ吹く笛に、鹿の音添ふる野邊の夕ぐれ」とやつてある。和尚は充分に繪畫を學んで、そしてこんな小供が描いた様な粗畫を思ひ切つて書く處は、大雅堂も及ばぬところだ。禪も兎角口先ばかりの理談にのみ偏して、空見識計り吐く輩は、恰も繪畫を學ばずに、此仙婁の眞似して畫を描く様なもので、到底見られたものではない。仙婁の書いた牛と牧童とがびつたりと乗つて居る具合は、禪者で無ければ出來ないところだ。

八十六、臨濟の吹毛劍

人境兩俱奪する場合には、佛とも祖とも論せず、何ぞ聖凡の情を説かんやである。臨

濟の禪は吹毛劍と云つて、非常に銳利なるものであつて、どんなものでも一寸でも觸つたら、忽ち截れて仕舞うのだ。そして此劍は迷情愚癡計りを切るのでは無い。總て悟りても何んでも悉く拂ひ除けて仕舞うのだ。だから進むも退くも生命總て師家の手裡に在つて、其銳鋒を犯すことは出来ぬぞ。丁度遙か遠い三十三天から糸を垂れて、下界の針の孔に糸を通さんとする様なものだ。次に人境俱不奪と云ふは、華嚴の四法界で、理も事も理事も通り越して、事々無碍法界の境界となり、一切萬物悉くが主賓知音と成つた所である。而して夫が所謂澄潭の月を踏破して、碧落の天を穿開すると云ふ所だ。何に穿開か、夫は天に窓を明けることだ。其處が即ち無作の妙用だぞ。

八十七、三種の根機

臨濟和尚は諸方の參學人に對して、三種の根機に區別して濟度する風であつた。これは華嚴の四法界に相當する三種を開いて四料揀と爲たので、中下の根機が來た時に

は、和尚其境を奪つて其法を除かず、中上の根機の者には、境も法も俱に奪ひ、上々根機の者が來る時は、境法人俱に奪はずに、此出格見解の人には、便ち全體作用して凡べて活すのだ。さて愈々此場合に到つては、電光石火の極僅かな隙も無いのだ。

八十八、境と法と人

そして此三種の根機を言を換へて云へば、境と法と人とである。人とは自分の事で境は我に對する所のものだ。法とは佛祖も外魔も善惡も聖凡も生死も涅槃も悉く之に含有して居るのだ。凡て法とか境とか佛とか云ふもの、其實は、人々各々其見處によつて法に依るものもあれば、人に依るものもある。だから妄見の師家に引掛つては大變な事に成るのだ。向うに佛を立つる者に向つて、其佛を除いて仕舞うと、内に省る様に成る者もあるけれども、場合によつては、唯其佛に對する信心を薄らぐ計りて、詰り一も取らず二も取らずに終るものがある。例へて云はゞ、田樂を喰はねば櫻花が見

られぬと云ふ連中と、人に依つては、櫻があつては邪魔になるから、楓に植ゑ換へねばならぬと云ふ人間があると同じ事だ。

八十九、精神と儀式

佛在世時代は勿論、滅後に至つても、精神上計りて無く、表に顯れてある儀式上迄が至極綿密であつた。然るに當今は、儀式だから駄目であると誤解するものがあるが、決してさうでは無い。儀式と精神とは不離不二の關係を以て居るのだ。即ち色心不二の關係だ。佛の滅後年を経るに隨ひ、儀式が粗雑になつたと云うて大に排斥せられてあるのは、つまり此處である。彼の六群比丘等を見よ。油を盆に一杯盛つたのを捧げて、戸障子の明けたてに音もたてず、油一滴もこぼさず、又、起居振舞が丁寧であるから、足元に置いてある薄い紙が少しも動かない程、行儀作法が正しかつた相だ。然かもそれより以上の聲聞佛弟子になると云ふと、又一層嚴正な者であつたのだ。今の僧

侶の方袍圓頂は、聲聞佛弟子の姿ぢやないか。して見れば此姿を爲て居る以上は、内外表裏なく、誠實に聲聞佛弟子たるの實がなければならぬ。然るに或一種の禪坊主になると、事を捨て、理談のみに片寄り、眞箇の坐禪を遣つた事もなく、空見識の法螺を吹き飛ばして、酒肉女色が何んの差間があるべきやなどと、大悟した者の口眞似をやつて居るから耐らない。聲聞佛弟子の姿は寺に寝轉んで、梵妻と巫山戯る爲に害用されては耐つたもので無い。かう云ふ奴は、恰も羊皮を被つた狼の如き詐欺僧だ。酒肉女色を斷つことが出来ぬとならば、在家の菩薩と成り變つてやるが好いのだ。さうさへ爲れば、嚴しい戒法も無いから、極樂々と遣つて行けるのだ。だから今後は是非眞箇の淨僧と、優婆塞一類の穢僧と二種類に區別して、其待遇方法から何もかもちやんと取極めるが好い。然るに宗制寺法に妻帯勝手たるべしとやつては、折角雨夜の星程稀になつた淨僧までが女臭に感染して、遂には墮落するから、彼様ことをしようとして運動する奴等は、充分打ち伏せて仕舞うが好い。

九十、煩惱即菩提

誰でも口を開けば煩惱即菩提と、上滑りに能く饒舌ることだが、其眞味を自覺しないで、無暗矢鱈に極め込まれては、却つて駄目だから、そこで昔梁の寶誌和尚が作られた「菩提煩惱不二頌」を擧げて話さう。

衆生不解修道 便欲斷除煩惱 煩惱本來空寂 將道更欲覓道

一念之心即是 何須別處尋討 大道祇在目前 迷倒愚人不了

佛性天真自然 復無因緣修造 不識三毒虛假 妄執浮沈生老

昔時迷日爲晚 今日始覺非早

どうだ煩惱と菩提とは、果して同じであらうか、如何だらうか。或一方から見た場合には、同一處の沙汰で無い。天地の相違があるのだ。だから之を、味噌も糞も一緒にすることは出来ぬ。然るに他の一方から見ると、此煩惱と菩提とは無二亦無三で、元來一な

りとするのだ。こんな事は講釋を爲て聞かさなくも、別のものではないことは直ぐ分る。然るに衆生と云ふ愚人は、之を別物に見るのだ。煩惱本來空寂のもので、畢竟空だ。卑近な例を以て云うて見様なら、東山に見える浮雲の如きもので、愈々其東山に登つて、雲そのものを掴んで見様と爲ると、どうしても捉へる事が出来ないやうなものだ。乃て今の頌にある通り、道を將て道を覓めんとするには、一念の心即ち是れなりて、此儘の、有様の、白粉も金箔も何もつけず、暑ければ暑い儘、寒ければ寒い儘で、宇宙と云ふ座敷は大胡座かいて遊んで居られるのだ。然るに地獄ぢや極樂ぢやと有想差別の迷心を、浮雲の如く起す時は、即ち今迄極樂であつたものが、直ちに地獄と成つて仕舞うぞ。然し憍うは云つて見るもの、畢竟する處は、斯んなことを云ふものも可くないのだ。目の前にそれ、其處にありくと在る大道も、愚人には了解出来ないのだから仕様が無い。佛性は天真であつて、自然のものだから、製造したものでも、又製造されたものでも無い。全く能造所造を離れ、復因緣修造したものでも無いのだから

唯其儘に成り切つたら、それで好いのだ。

九十一、三毒の水泡

三毒の水泡は虚假であるのに、之を識らないで妄執して、生老病死に浮沈するのだから困つたものだ。そして此貪瞋癡の三毒は、煩惱の親玉だぞ。妄執と云ふ奴は、漸と癡づいて、澤山の垢が附いたのだが、大道は三世不可得と云つて、素より迷悟も無ければ、三世の別もないのだ。それだから木地即ち素朴の儘に成り切れば好いのだ。

九十二、修養の両面

凡て精神の修養を志す者には、賓主の別を立て、考へると云ふ事を忘れてはならぬ。自分を主人公として考へる時は、佛祖も奴隷の如く、脚下に見下して、釋迦何人ぞ、我何人ぞと云ふ大見識がなくてはならぬ。又自分を切磋琢磨して行くと云ふ上から云ふ

と、どんな詰らぬもの、一言半句でも翫味して、其長所を學んで行かねばならぬ。人間にはどんな偉い人でも各々長短があるから、其短所ばかり見て長所を捨てる様な事をしてはならぬ。釋迦の十大弟子でさへ、各々其特長もあり、短所もあつたてはないか。一派の管長もつまりさうだ。各々長所もあれば短所もあるのだから、悪い所や短い所は少しも眞似しないで、専門の善い所を味つて行き度いものである。

九十三、隠れたる徳僧

衲等の若い時分には、我臨濟に於ても、如何はしいやうな管長も無かつたでもないが、唯今はさう云ふ不確實なものは一人も無い様になつた。是れは誠に結構な事で、斯くなくてはならないのだ。しかし學徳兼備の良師家は、一山の管長に限ると云ふ譯ではない。丁度在朝の者ばかり偉いに限らず、民間にも随分立派な人物の隠れて居る如く、田舎の末寺に隠れて居る僧侶の中にも、學問徳行兩つながら兼備せる良師家が

居るのだから、専門の修行をせんとするものは、此邊の所へも氣を附けて、世間の評判ばかり聞いて、明師々と浮かれ廻はらぬがよい。

九十四、圍碁と度生

凡て度衆生と云ふ點から云ふと、何が因縁となるか分らない。今度川崎正藏が布引の瀧の傍に、十萬圓を投じて寺院を新築して、天龍寺の龍淵管長を請して、兼務住職になつて貰ふ相だが、抑も之が動機は、何から起つたかと云ふと、龍淵和尚の圍碁が大いに興つて力あるのだ。即ち嵯峨に川崎正藏の別荘があつて、徒然な折には、龍淵和尚と正藏とが互ひに往來して碁を弄んで居る間に、寺院建立の話が成立したのださうだ。して見れば圍碁を媒として随分相手を佛道に引き入れる事が出来るものだ。併し専門に熟達もせず、道徳も浅いものが、如何程茶や圍碁で濟度しようと思つても到底駄目だ。龍淵和尚が碁を圍みつゝ度衆生の實があつたのは、和尚平素の陰徳の然らしむる所であると云ふ事を忘れてはならぬ。

九十五、肺病慰問傳道

▲須磨行。此間云つた須磨の療病院で死に瀕して居る肺病患者の所へ、再三の懇請で止むなく、醫者の注意も構はず慰問に往つて來たが、其患者は京都で名高い吳服商人の松宮甚太郎と云ふ男だ。今年五十歳で吳服商の合名會社を遣つて居つた人間だが、今は見る影も無く瘦せ衰へて、青い顔をしてゴホン／＼と厭な咳をして居つた。

▲宗教には冷淡。そこで衲は其病人に向ひ、一體お前はどうか云ふ宗教を信仰して居つたのか、して又、どうか云ふ風な信じ方をして居つたのかと、劈頭第一に尋ねた所が、へいお恥かしい話でありますが、一向佛法には冷淡でありましたと答へた。うんさうか、其れではお前の家の宗旨は何宗であるのだと重ねて問うた。すると彼は、へい私の家は日蓮宗でいます。それで初めは、本門佛立講を信じてお題目を唱へた事がありましたし

たのですが、其内幕が解かつてからと云ふものは、何だか馬鹿らしくなつて、それぎり止めて仕舞ひましたのです。それに何分商賣の方が忙しいものですから、つい其後佛法を信心すると云ふ事が無かつたので、ムいまずと云つたから、其れだから不可ないのだ。衣食に苦むと云ふのなら兎も角、有り餘る財産を持ち乍ら、何を苦んで浮か／＼と暮らして居つたのだ。さう云ふ横着な心懸けだから、今將に死なんとするに臨んで狼狽へ廻らねばならないのだ。併しお前は只今何が一番氣に懸つて苦んで居るのか。

▲須閔の中心。を尋ねた所が、彼が云ふのは、先年別荘に居つた時、蛇を二匹殺した事があつたが、病氣になつてからと云ふものは、其蛇を殺した事が氣に懸つて仕様がなかつた。所が其揚句、或夜二匹の蛇が自分の口から出た夢を見ました所が、夫れから一層病氣が重くなりまして、明けても暮れても彼の蛇の事が忘れられない様になつたのです。どうしても私は蛇の怨念が此病氣を起したのだらうと想つて居ります。どうかあなた之を除ける方法は、ムいますまいかと、苦しい息の下から苦悶を訴へて、只管

説法を求むると云ふ有様であつた。

▲對機説法。そこで衲は對機説法を始めたのだ。お前は蛇を殺した事を苦に病んで病氣を募らせて居ると云ふが、蛇位殺したとて、何んの祟があるものか。衲は小僧の時に蛇を澤山殺した事もあるし、犬や猫も手當り次第に殺した事があるが、何の祟もないよ。少し其祟があれば面白いと思つて居るけれども、薩張り夢にも見た事が無い。

▲盃中の蛇。昔支那にかう云ふ話がある。晋の樂廣と云ふ人が、河南と云ふ所の知事をして居つた時に、仲の好い友達と一所に酒を飲んだ事があつた。所が其時友達が自分の盃の中に蛇が一匹居る様に思つて仕様が無かつたけれども、折角ついて呉れた酒を辭退する譯には行かないものだから、氣持悪る／＼ぐつと其れを飲み干して宅へ歸つたが、さて夫れからと云ふものは、七顛八倒の大病に罹つて、色々と醫藥を用ひて見ても効能がなく、非常に難儀をして居つたが、段々其蛇を穿鑿して見ると、ほんとの蛇でも何でも無くて、壁上に懸けてあつた角弓に、漆で描いた蛇の繪が、丁度其盃

の中へ映つたのだと云ふ事が分つて來た。すると、忽ち病氣が平癒して、元々通り健康な身體になつたと云ふ事だ。

▲萬法唯心の道理。て眞實の蛇で無いものを蛇と認めて狼狽へるのだ。華嚴經に「三界は虛妄にして但是れ一心の作る所なり」と云ひ、又「心は工なる畫師の如し、種々の五陰を描く」と云つてあるのは茲だ。世間の萬事萬端畢竟盃中に映つた虚無の蛇だ。だから何事も愚圖く想はないで、其儘坐禪を遣つたがよからうと云つて、夫れから一通り其心得を教へて遣つた。

▲題目を唱へたが好い。そしてお前が因縁あつて日蓮宗に流を汲み、一旦本門を信じて題目を唱へたと云ふのなら、是非共其題目を遣つた方が好い。して又坐禪を遣つて居る間に心に何か蟠まるものがあつては駄目だ。坐禪の要は只無心になり切るのにあるのだと、段々云つて聞かせたら、病人も非常に喜んで、安心した様な鹽梅であつた。そして納は坐を向き直つて、看病して居る親戚共へ、お前達も身體の丈夫な間に、さあと云つた時狼狽へぬ様にして置くが好いと、嚴しく意見をして引取つた。

九十六、白隱會下の大姉

白隱會下第一流の大姉は、阿さつと云ふ婆さんであつたが、此阿さつ婆さんは、娘の時分から天性非凡であつて、人を驚かす様な奇行が澤山あつた。

▲法華經を尻に敷く。或日のことに、自分の父親が、最も大事に崇めて居る法華經が這入つてゐる箱の上に腰を掛けたので、父親は吃驚して、言語道斷不届千萬な奴だと呵り飛ばした所が、娘の阿さつは、一向平氣なもので、何こんな物が勿體ない事があるか、何て爵が當つたりするものか、こんな死物の法華經が、何の役に立つものかと、出放題な事を饒舌つて、酒蛙くとして居る。父親も餘りの事に吃驚仰天し、若しや發狂したのであるまいかと思つて、早速白隱禪師の許へ駈け付け、一伍一什の顛末を語り、發狂したのではありませんでしょうかと相談した。

▲歌で試験。所か禪師の云はれる様には、よし／＼夫れちや此紙へ乃公が何か書いて遣るから、それをそつと娘の部屋へ貼り付けて置くがよい。そして娘がそれを見て何とか云うてあらうから、其結果を早速知らするがよい。さうすれば發狂か發狂でないか直ぐ分かる。兎に角之を持つて行くがよいと云つて、書き與へられたのが、即ち暗の夜になかぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の父ぞ戀しき

と云ふのであつた。然るに娘は不圖之を見て、ははあ之は面白い、自分の思つて居る所と此歌の意とは、少しも違つては居らぬと感心したので、父親はすぐ其足で禪師の室へ飛んで行き、實は、斯く斯くの始末でありましたと其模様を述べた。すると禪師は、其れては發狂でも何んでも無い大丈夫だ。中々天晴な禪機のある奴だから、充分坐禪に骨折らすが好いと云はれた。そこで之が動機となつて、禪師に就いて永らく參禪し、遂に白隠下で第一流の大姉となつたのだ。

▲寶珠の涙。所か此女はてぼちんて至つて醜婦であつたから、一生獨身で暮らすと云

うて居たが、其後父親の勧めにより、婿を貰ひ子供も出來て、長壽を保つた。老後になつてから孫を喪つた時に、泣いて／＼泣き崩れて居た。其有様を見た或人が、此婆さんは悟つて居る人かと思つたに、此有様では、逆も悟つて居らぬに違ひないと云つた。所か阿さつ婆さんの返答が面白い。私が泣いて居るのは眞面目であつて、一滴々々が寶珠であるのが分らぬかと云つた相だ。

九十七、桶屋の頓悟

此建仁寺の門前に桶屋をして居た、桶庄事林庄次郎と云ふ爺さんが住んで居つた。中々義侠に富んで、そして非常に正直な男で、始終納の所へ來たものだ。或時納に何か書いて呉れいと頼んだから、眞中へ〇を書いて、其下へ「わや／＼云ふな」と書いて遣つた。すると職業が桶屋だから、桶の輪を書いて呉れたのだと思つて居つたので、可笑かつた事があるよ。今から四十四年前、どん／＼焼けの時に、建仁寺に加州藩の軍

勢が屯して居つた事があるが、其時此爺さんが、其殘物悉皆を二束三文で買うて、どつさり積んで置いた。所が騒動が濟んで、物價が俄に騰貴した爲に、非常な利益を得たと云ふ様な、中々目先きの利く爺さんだ。そして近所の難義な者杯が何を頼んでも、肩肌ぬいて、世話をして遣つたもので、借金の證人に立つて其尻を拭つて遣つたり、又眞面目な僧侶の布教を手助けしたものだ。どう云ふ因縁か衲と非常な近づきになつて、何時でも衲の室へ這入つて來るのに、取次もなく案内なしに遣つて來たが、それが桶庄の自慢であつたさうだ。

▲死んだら牛に成る。或時彼が「この爺が死にましたら、何に成りますか」と衲に聞いたから、元戲半分に「お前は牛に成る」と云うて遣つた所が、元來が正直な爺さんだから、眞面目に信じて非常に狼狽へた顔をして「どう云ふ譯で牛に成りますか」と聞いたから「お前の顔が牛面をして居るから、屹度牛に成るに違ひないぞ」と答へた。さうすると彼は更に「どうしたら之を免るゝ事が出來ますか」と聞いたから、そこで衲は彼

の機に應じて説法をして遣つた事があつた。

▲臨終の大歡喜。其後爺さんが大病に罹つて、早速危篤と云ふ事を聞いたから、臨終の前日に、衲が見舞に行つた所が、落涙合掌して非常に喜んだ。そこで衲は枕元で慰問の説教して遣つたが、善く安心して大歡喜をして死んだ。生前彼が死んだら有難い御經を澤山讀んで呉れいと始終云うて居つたから、約束通り彼の爲に澤山御經を讀んで遣つたよ。

▲學問が邪魔になる。桶屋の爺さんが衲の云ふ事を眞受けに信じて、未來の一大事に安心満足して死んだと云ふ事で思ひ出すのは、今の青書生等が、やれ人生問題だ、やれ未來觀だ杯と煩悶して居る事だ。彼等は古今の哲人が慈悲を垂れて、ちやんと説いてある事を疑つて、五里霧中で見當違ひの所を搜して居るのだ。つまり彼等は少し計り理窟や文字があるのが、却つて邪魔になつて居るのだ。そこへ行くと無學文盲な桶屋の爺の方が遙に偉いものだ。

九十八、依頼心と禪

世間諸有宗教と名の附くものは、大抵あるものに依頼するのが普通であつて、先づ依頼心を起して執り着いて懸るのであるが、獨り禪に於ては全く正反對である。他の宗教は態々其依處を拵へて之に依らしむる様な仕組であるのに、禪はいきなりに無所依と云ふ奴から這入て行くのだ。無所依とは何事にも依頼せぬ事だ。即ち有にも依らず、無にも依らず、迷にも依らず、亦悟にも依らず、神にも依らず、亦佛にも依らず、全く依頼心を捨て、仕舞うのだ。若しも其依頼心たる卑屈根性があつたなれば、先づそれから取つて除けなければ、禪の初門に入る事は出来ない。あれやこれやと何事にも依つて見やうと爲るから、愈々五里霧中に迷ひ込んで解らなくなるのだ。實際はそんなものには無い、それ其處にさよるり、くわんとしたものがあつたのだ。雨が降る時はあたりが暗くなる。斯う云うても解らないだらう。困つたものだ。迷ひの卵は、依

頼心であるから、此奴を打殺して懸らなければならぬ。然るに兎角有には依りたがる者が多くあるので、有部的の宗教が表面流行るものだが、有と見る奴は夢を見て居る様なもので、夢の中は夢たる事を知らずして、欺されて居ると同様だ。有を實有と欺されて逆想して居る所から、其常住見から分別を生じて、見る事聞く事に多くの是非を云ひ立てるのだ。此有と云ふ病氣を全く除き去るに至らば、今度は復た無の時代に這入つて、何も彼も亦た無に欺されて仕舞うものだ。然し有を離れて無の境に入るのは、修養が進んで來たのだから、悪い事ではないが、無に計り偏して仕舞うては、是又一方の擔板漢と云ふ奴で、君父も神佛も有るものかと、味噌も糞も一緒にして仕舞うのだ。だから有見も無見も共に聲聞緣覺處の沙汰ては無い。最も下劣な外道の見てある有爲の奥山今日越えてと云ふが、さあ有爲を超さずとも、本來其儘無爲無造作であるのだ。心と云ふのも此方から勝手に名を附けたもので、譬様が無いから、虚空の様なものだと云へばとて、虚空に執しては不可ぬ。大乘は猶虚空の如しとも云ふ。無相即

實相、實相即無相だ。虚空を師とし、若し無相の理を論ぜば、唯我父王のみ知るで、父王は即ち虚空を産み出したものだ。基督教などに云ふ造物者とは趣きが大分違ふぞ。以上は龐居士の作つた無所依歌の大意を云うて見たのだから、左に其歌を掲げて見よう。

無所依歌

龐居士

昔日在_レ有時 常被_二有人欺_一 一相生_二分別_一 見聞多是非
 已後入_レ無時 後見_二無人欺_一 一向看_二心坐_一 冥冥無_二所知_一
 有無俱是執 何處是無爲 有無同一體 諸法悉皆離
 心同_二虚空_一故 虚空是我師 若論_二無相理_一 惟我父王知

九十九、逆境の修養

世間の諺にも、可愛い子には旅をさせよと云つたり、又獅子は其子を千尋の谷底に

突き落して、其膽玉を試めして見ると云ふが、若し旅をしてへこたれて仕舞ふ様な子供や、谷底へ落されてへたばつて仕舞ふ様な獅子では、到底物の役に立たない奴だから、其儘死んで仕舞つた方がよいのだ。旅は憂いもの、其艱難辛苦を嘗めて鍛へた子供でなければ、親の頼みにはならない。又千尋の谷底から再び匍ひ上る程の獅子でなければ、百獸の王とはなれないのだ。彼の伊達自得居士は、十年間も入獄して居つた。其逆境中に精神を鍛錬して、天晴な大根機となつたのだ。それから昔俊澄和尚と云ふのは、衆生を濟はんが爲に、わざと罪を犯して入牢し、其牢屋の罪人を濟度したと云ふ事がある。然るに此世間も或意味から云へば、獄中同様であるから、誰人でも自得居士や俊澄和尚の心を以て自分の修養をすると同時に、他人を救ふ爲に力を盡さねばならぬ。

▲逆境は輔なり。國亂れて忠臣現はれ、家貧うして貞婦なることを知るで、播州赤穂の淺野家で云うて見ても、平常無事な時には、大石良雄より大野九郎兵衛の方が、家老中

て飛ぶ鳥も落す程に威張つて居たのだ。所が一朝、一藩の浮沈に關する逆境が降り下つて來ると、忽ち良雄と九郎兵衛の眞價が現はれて來た。だから丁度刀劍が何遍も韃にかゝると同じく、人間も逆境と云ふ韃にかゝらねば、其眞價が現はれないのだ。

▲洋劍と日本刀。凡て刀劍と云ふものは、鋼鐵が少なければ鋭くないし、又鋼鐵計りでは脆いものだ。野狐禪と云ふのは、つまり鋼鐵ばかりで脆いから駄目だ。今の洋劍は、鋭いと云ふ點から云ふと從來の日本刀よりも鋭いさうだが、洋劍はどうも物質的に出來て居て、日本刀のやうに、鍛冶師の人格や、品性が映つて居ると云ふのとは違ふ。例へば日本刀に電光の姿を出すには、鍛冶師が電光の觀相を凝らして鍛へなければ出來ないのだ。それで柄は常に造物主を立てる耶蘇の神は、物質的に近い洋劍式で、佛敎特に禪は、日本刀式だと思つて居る。

▲日本の逆境的試練。戦争は國家としての大逆境であるから、日本は維新後、西南、日清、日露の戦争で、つまり三度逆境の韃にかゝつた次第である。だが是れから益々平和的

の戦争が劇しくなるから、油断なく奮闘せねばならぬ。これは世間の話だが、禪の戦争は晝夜不斷に、水火銃劍は愚か、神や佛とも組み打をせねばならない。

百、悟道の境に天地なし

片眼でも、山地獨眼龍見た様な、豪傑もあれば、跛でも、山本勘助見た様な軍師もある。だから片眼ぢやとて、跛ぢやとて、強ちに馬倒は出來ぬが、今の禪宗坊主見た様な片眼や跛には閉口する。悟道の境には、天地も隔なしてあるが、迷情の世界にありては咫尺も日露ぢや。だから今の坊主ども、濟むの濟まぬのつて、盲の棒千切を遣つて居る。いやはや見られたさまではない。是れ畢竟無我の世の中で、無理に我見の棒を擔ぎ廻るからぢや。

博多聖福寺の仙壺和尚の法嗣に、湛元和尚と云うが有つた。此和尚は頗る手腕家ておまけに詩まで能く咏んだ。師の仙壺は其性格に一休風があつて、詠歌にも戯作の狂

歌が多かつた。禪機の外に歌道を以て名を知られて居た。併し衲は湛元の方の詩に惚れ氣を出して、色男が戀女から艶書でも貰つた様に、繰り返し巻き返して、熟讀反吟する事が常であつた。今でも記憶して居るが、

道一天涯同故國、心雙故國亦天涯。杜鵑頻叫山窓月、不識使吾何處歸。」

行脚方知吾道周、扶桑六十有餘州。村々到處稻梁熟、應是福田衣界秋。」

歸去來と叫ぶ杜鵑、汝元來何んするものぞ。如何なれば吾に歸來處あらんやとの大氣、豈是れ湛元の面目ならずや。

九州の長崎は姪地で坊主なんどの止住する所でないが、京都も其通りである。長崎も舊式の法事佛法が盛んだから、坊主の暮が易い。夫れだけ坊主の墮落も早い。京都にも其趣きがある。京都も長崎も坊主杯の修行者には魔窟である。だから大徳寺の高見素厚に、ちと東山へ出て來ぬかと云うても、彼は四條を東へ渡ると土地が穢れて居るからいやぢやと、妙なことを云うて居る。是れ畢竟泥を見て蓮華を見ぬからである。

百一、魔窟に入りて魔事を破る

魔窟に在りて魔事を破る、是れ大丈夫の腕力なり。四條橋東は、確に姪窟なり、魔境なり、而して吾建仁僧堂は、實に此魔境の包圍に在り。故に吾僧堂の周圍は、醜臭厭ふ可く鼻持もならぬ淤泥なり。去れば吾僧堂は淤泥に染まぬ蓮なり。高見素厚は泥を見て蓮を見る能はず。我弟子は泥蓮二見を立てず、之を徹觀し去れ。境に在りて境に動ぜられざるは、丈夫解脱の相なり。解脱し能はざるは、佛子の面目にあらず。覺者の止住する處、一として清淨ならざるはなし。法輪は隨所に轉ぜられ、光明は當所に耀く。境の汚淨に拘はる法輪は眞個の法輪にあらず。又是れ眞個の光明にあらず。佛者の光明は眞に無際限にして、無量光ならざる可らず。清淨境にも魔姪窟にも唯其境を擇び、對機を擇ぶは、未解脱の輩の境界なり。併も吾大衆は、魔境を四境に控へて、鍛鍊を此間に試みんとす、如是にして成效せる修行は、眞個の修行なり。眞個の鍛

鍊なり。異日何れの境に到るも、決して境遇對機の爲めに退轉するの憂慮なきに至る可し。此境此位置、又得易からざる道場にあらずや。

近頃は其筋の注意で、衛生上大清潔を勵行して居る。其検査日の前日位に市街を通行して見よ、どんくばたく、塵埃堆積臭氣四塞、車上で走らしても窒息しさに感ずる位だ。昔から、厄日は澤山あるが、此検査日は明治式の大厄日だ。然るに衛生の事は、畢竟個人間何人を限らずに必要だから、其筋の注意までもなく、平素日々遣つて置けば、検査當日にはたくどんくを遣らかさず、衛生係りが巡查聯帶て来たとして別に狼狽するには及ばぬ。然るに世人は掃除と謂つた處で、何時も人前ばかりを誤魔化して置くから、衛生係りが、警察官と云ふ淨玻璃鏡を連れて來ると、大狼狽だ。左様なことでは、如何に露國に打ち勝つた戰捷國でも、世界へ鼻を高くする文明國とは云へぬ。

今も夫れと同じことで、我大衆等も、教相學者や素人連を相手に、いや隻手で候のいや栢樹子で候の、いや趙州の無字で候のと、こけ嚇しを遣つて居たとて、一旦眞個の師家から調を受けると、丁度人前誤魔化しの掃除で、二度の遣り直しを命ぜらるゝ様に、大狼狽の大醜態の上に、又候こつくと遣り直しをせねばならぬ様な目に遇うては、素人連の前では戰勝しても、矢張暗黒の黒凡夫ぢや。そんな事ぢや此僧堂で市内の信徒の供養を受けて、飯喰つて糞垂れて居る直打が無いぞ。

百二、美人も來れ姪婦も來れ

禪者の眼に、淨穢二境が映ずる様なことでは駄目だ。「坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人を深山木に見て」だ。這般豈に祇園町あらんや、宮川町有らんや、美人來たれ、姪婦來たれ、俗物來たれ。活潑潑地の境遇には、我に於て一毫の障りを感じずである。坐禪するとして、有り難い坐禪をするな。雲照や阿吽鉢羅などは、此の難有禪の連中だ。昔牛頭山の法融禪師が、最初深山に居て難有禪を遣つて居た時には、猿や鳥の類が

頻りに果實などを運んで供養して呉れた。處が一旦四祖禪師に參じてからは、猿は愚か、鳥一羽も出て來ぬ様に成つた。然れば法融は四祖に相見して、境界が落ちたかと云へば、決してさうでない。畢竟法融の境界に、非常に進歩を示したから、禽獸の類得て窺ふ可らざる境遇に成つたのだ。畢竟茲が眞禪で、初めのは偽禪だ。眞禪は其徳深く隠れて窺知すべからずと云ふにある。即ち無心の境界だ。處が偽禪家の難有家と來ちや、初めの猿や鳥に馴らされて居る中が有り難くて、眞個の坐禪が、有り難く無くなる。要するに、坐禪は無心を貴ぶ。無心とは有心だ、即ち有心上の無心が、禪者の謂ふ無心である。

千疑萬疑の一大疑團も、公案三昧に入つて、一疑破るれば萬疑共に破る。古則公案素より一ならず。然るに修行者が、之は如何に、夫れはどうだと比較して、鳩の巢の早合點する様では、到底駄目だ。公案の味は、冷暖自知に在る。「鼠入錢筒」の婆言能く掬して能く味ふ可し。狡鼠竹筒に入りて首を節間に入れ、二進も三進も動かぬ様にして

獨情死をする様な馬鹿な眞似をするな。此處で倒斷一番、身を轉じて一路を他に發見するが、禪の常道だ。若し此境遇を誤れば、華嚴の瀧か、淺間ヶ嶽である。狗子佛性の公案は、此場合に必要だ。心頭の煩悶に打ち負けて、瀧壺の泡と消えたり、噴火坑の煙と成る奴は、實に氣の毒のものだ。

自家の本業を粗末にする様な奴は、禪者でも、教育家でも、譽めて遣れる程の者でない。何時かも話した或る醫者が、醫者の癖に焼物自慢で、何時ぞや觀世音菩薩の像を何個か焼いて、是を數へるに、一疋二疋と云うて、丸て猫の兒の焼物を數へる様などと言うて居るから、柄は夫れに對して、苟くも相好端正の佛像を數へるに、畜生同様の語を用ひてするは不都合だ。何故一體二體と數へざるやと呵責して遣つたが、思つて見れば、自家の本業を粗末にする程の人物は、矢張物に接しても其節度禮法が判らぬと見える。て柄も多分のことは自慢は出來ぬが、本業だけか、坐禪するが一番の好物である。